MediaNet 第31号　2024年10月31日発行（年1回発行）　ISSN 0919-8474

MediaNet

No.31 | 2024

慶應義塾大学メディアセンター
Keio University Media Center

特集
つながる，広がる，コラボレーション

国立台湾図書館との学術交流協定
国内図書館団体との連携・関係
館外展示への出品
日吉キャンパスにおける読書バリアフリーへの取り組み

表紙の写真：ハイカウンター席（薬学メディアセンター）

ビルの隙間から芝公園の緑、その向こうには東京タワーを望む席。晴天の昼間はもちろんのこと、美しい夜景を楽しむこともできる。試験に追われる薬学部生たちにとっての憩いのスペースになればと思い設置したが、彼らは今日も分厚い本とノートPCを広げ、静かに熱く勉強している。

（薬学メディアセンター　谷藤優美子）

MediaNet

No.31　2024

慶應義塾大学メディアセンター
Keio University Media Center

MediaNet

No.31 / 2024

Contents

所長挨拶

くすり，情報，図書館 ―― 漆原　尚巳 …… 4

特　集　つながる，広がる，コラボレーション

国立台湾図書館との学術交流協定 ―― 木下　和彦，関口　素子 …… 5
国内図書館団体との連携・関係 ―― 木下　和彦，関　　秀行 …… 8
館外展示への出品：
　相手を支え，自らも得る ―― 竹内　美樹 …… 11
日吉キャンパスにおける読書バリアフリーへの取り組み：
　日吉メディアセンターと国立国会図書館の
　　視覚障害者等用データ提供館覚書締結 ―― 吉井由希子 …… 14

信濃町メディアセンター
　館内リニューアルプロジェクトの取り組み ―― 本井英理子 …… 18
早慶和書電子化推進コンソーシアム活動報告：
　2022～2023年度を中心に ―― 中井　亜子，藤本　優子 …… 24
メディアセンター全体研修の20年 ―― 河野江津子 …… 31

貴重書紹介

貴船の本地 ―― 石川　　透 …… 35

海外レポート

英国図書館研修報告 ―― 神谷　優子 …… 38

ティールーム

図書館をめぐるあれこれ ―― 西川　葉澄 …… 17

スタッフルーム

私を貫くもの ―― 手島　善人 …… 45

資　料

メディアセンターの主な出来事 2023年度 …… 46
メディアセンターの主な出来事 2023年度補遺：イベントポスター …… 48
メディアセンターの活動の記録＜2023年度＞ …… 49
メディアセンター展示一覧＜2023年度＞ …… 56
メディアセンター所蔵資料の展覧会貸出・掲載・放映＜2023年度＞ …… 58
メディアセンターに関する書誌＜2023年度＞ …… 60
スタッフによる論文発表・研究発表＜2023年度＞ …… 61
年次統計資料＜2023年度＞ …… 62

編集後記 …… 70

所長挨拶

くすり，情報，図書館

漆原（うるしはら）　尚巳（ひさし）
（薬学メディアセンター所長）

2023年10月より薬学メディアセンター所長を拝命致しました漆原です。

薬学生は，卒業までに社会の薬局店舗や病院にて薬剤師のたまごとして実務実習を行い，その上で国家試験に臨みます。それまでに薬学部内で受けなければならない授業には，化学・物理・生物学などといった基礎科学から，より専門的な有機合成や成分分析といった実験を行う実験実習，調剤技術や患者応対を学ぶ臨床実習，そして医薬品の性質，作用・副作用を調べる情報検索など，幅広い学習内容が含まれます。医薬品は，その包装から出されて医薬品そのものがポツンと置いてある状態だと，見た目はただの白い粉だったり，特徴のない錠剤・カプセルの形をしていて，外観だけではくすりなのか，くすりでない他の何かであるかは判別することができません。どういう見た目をしていて，なんの病気に対して用いるのか（効能効果），どれだけの量を服用するのか（用量），どのように服用するのか（用法），注意すべきこと（副作用など）は何か（使用上の注意）などといった，医薬品を特定し，その性状と使用に関する情報があることで，初めて人に使用して，病気を治すことができるのです。時計やカメラまたは自動車のように，見るだけで，または触れただけで用途がわかる，機能が理解できる多くの一般工業製品と大きく異なる特徴です。医薬品は体内に取り入れることでその機能を発揮することができる一方で，その利用に関する情報がなければなんの役にも立たない，また間違って服用すれば副作用などの害をなすこともあります。すなわち，医薬品とは，物質と情報の両方が揃って初めてその価値を生み出すことができる工業製品です。当方の研究室，医薬品開発規制科学講座では，薬剤疫学とレギュラトリーサイエンスという研究分野を担当していますが，医薬品にまつわるさまざまな情報またはデータを材料に医薬品の評価に関する研究を行っています。また，薬局などでの実務実習前の学部内授業にて，医薬品に関する情報の検索方法を教えています。

インターネット全盛の現代社会では，医薬品に関する情報が溢れかえっています。医薬品を販売する製薬企業や医薬品を管轄する政府機関の医薬品医療機器総合機構や国立医薬品食品衛生研究所，または厚生労働省，海外の医薬品規制当局や世界保健機関World Health Organizationなど，権威のある情報ソースから公開されている医薬品情報のみならず，医師や薬剤師が中心になって病気とその治療法に関連する健康情報をまとめ，共有する医療機関やコミュニティのサイト，営利または非営利目的で個人や企業・各種団体が運営する健康情報サイト，それ以外のSNSサービスでの医薬品や健康に関わるトピックを扱うコミュニティでの情報などに加え，医療者と学術専門家を対象とする医学薬学系の学会や学術専門誌が運営するサイト，学術論文の内容を共有・提供するサイトもあります。怒涛のような情報過多と，玉石混交の情報の質を面前に，薬学生が必要とする正しい情報を効率的に入手するには，何が手掛かりになり，どのような検索方法が最も効果的かを理解して実践する必要がありますが，一朝一夕にはできません。そのためには，ある程度の基礎知識を習得し，検索技術を学び，自らが持つクエスチョンに応える情報を的確に探り当てることが必要であり，そのプロセスは真実を探索する体系化された研究として見ることもできます。

現在の図書館は，古より伝わる情報を後世へと伝えるアーカイブ機能と，最新の学術的知見を瞬時に別の場所へ移転させ新たな反応を引き起こすリアクターとして情報生成を行い共有する機能を併せ持ち，まさに人類の叡智「情報」が集結する場です。薬学生の学習と薬学部の研究を支える基盤として，より一層使いやすいメディアセンターを目指して尽力したく存じます。ぜひともご活用ください。

特集　つながる，広がる，コラボレーション

国立台湾図書館との学術交流協定

木下（きのした）　和彦（かずひこ）
（メディアセンター本部課長）

関口（せきぐち）　素子（もとこ）
（日吉メディアセンター事務長）

1　国立台湾図書館との学術交流協定締結

2024年３月７日，台湾・新北市にある国立台湾図書館において，曹翠英国立台湾図書館長と須田伸一慶應義塾大学メディアセンター所長との間で，「学術交流に関する協定書」の調印式が行われた。

協定の趣旨は，その第一条「国立台湾図書館と慶應義塾大学メディアセンターは，学術的相互協力関係を構築して，図書館交流を発展させていくために，本協定を締結する。」に集約されている。想定される交流には以下のようなものがある。

・学術研究情報の収集および相互提供，相互の出版物や学術資料の交換
・事業の共同実施
・職員等の交流

図１　調印式
右：曹翠英国立台湾図書館長
左：須田伸一メディアセンター所長

2　交流協定締結の経緯

協定締結に至ったきっかけは，2023年６月の他大学の図書館情報学研究者からの問い合わせに遡る。その方のかつての同僚で，国立台湾図書館顧問である黄文哲氏が，同図書館からの日本視察にあたり本学メディアセンター訪問を希望しているが，受入れを検討してもらえるか，という内容であった。その後，黄氏とのメールで訪問目的は見学および連携や交流に関する相談であることを確認し，メディアセンター本部と三田メディアセンターで来訪を受けることになった。

８月23日午後に，黄氏と同館職員２名の計３名を三田に迎え，メディアセンターの概要説明や貴重書室等の案内の後，懇談の時間を設け，国立台湾図書館側の来訪の意図を改めて伺った。同館は2024年に開館110年の節目となるにあたり，多くの国の図書館との交流を広げたいという曹館長の強い意向があり，その可能性を探るため図書館見学を兼ねた訪問を企画したとのことであった。

なぜ国立台湾図書館が交流相手として慶應義塾を選んだのか，という点については，黄氏の経歴が関係していた。黄氏は東京大学で博士号を取得し，2022年３月まで国内の大学で教鞭もとっていた経歴があり，国立台湾図書館が日本の図書館との学術交流を検討する際に，日本の同僚からの意見を参考にした結果，慶應がその候補にあがった，ということであった。

しかしこの段階ではまだ情報が十分とは言えず，こちらから国立台湾図書館を訪問し，その上でどのような形・内容の連携や協力関係がありえるのかを

検討することになった。それに際してはメディアセンター所長が先方の館長を訪問する形が望ましく，時期を2024年３月と定めた。黄氏と秋頃から具体的に調整を開始していたが，12月中旬になり曹館長自らがこちらからの訪台に先んじて１月に慶應を訪問したい，との相談があった。夏は同館の職員のみの来訪であったため，先方としても館長が直接慶應の様子を把握したいということと，交流協定について所長も交えてより具体的な話し合いをしたいという意図を感じさせるものであった。

こうして2024年１月17日には，曹館長ほか同館職員２名の来訪を受けることになった。この時には全ての時間を協定締結に向けた意見交換に費やした。日本語に長けた黄氏が通訳の役割を果たしてくれたため，お互いに率直な考えを伝え合うことができ，曹館長の協定締結にかける意気込みを肌で感じるものともなった。

この意見交換により，協定は，学術情報資料の交換や職員の交流といった包括的な表現にとどめ，その実行に際しての必要経費は応分の負担とすること，協定は期限付きとして更新は双方の合意によるものとすることなど，かなり具体的な内容が見えてくるものとなった。

その結果，３月には国立台湾図書館において協定の調印式を行うという方向性で合意し，それまでの間にメールベースでの協定案の推敲がなされた。学内手続きも必要であり，協定案のリーガルチェック，学内の関係委員会の承認，国際協定締結に必要な稟議の決裁など，さまざまな手続きを進めていった。

これらの準備を経て，冒頭に書いたように３月７日に無事調印式が行われたのである。

図２　国立台湾図書館前にて

３　国立台湾図書館について

台湾には現在３つの国立図書館があるが，国立台湾図書館の前身は日本統治期の台湾総督府図書館であり，1914年に設立された台湾で最も古い図書館である。現在の場所（新北市）には2004年に移転し，名称は何度かの変遷を経て，2013年に国立台湾図書館と改称された。

国立台湾図書館はその由来から台湾総督府時代の資料を多く所蔵し，戦前の日本関係資料などの日本語資料も10万冊以上を数える。これらの資料や地方志などの中国語資料をもとに2007年に「台湾学研究センター（臺灣學研究中心）」を設置し，台湾学に関する研究成果の発信を精力的に行うほか，台湾について書かれた古い日本語資料の復刻にも取り組んでいる。

また開設当初から製本室を有し，製本技術者を日本から招へいして台湾の技術者に製本技術を伝えてきた歴史がある。現在は，「台湾図書醫院」を設置し，台湾において図書・資料修復の中心的な役割を果たしている。３月に訪問した際には，修復中の「法華経」の原本を見せていただき，その役割を実感することができた。

図３　修復された「法華経」

図書館の建物は地上７階地下３階で，地上１階～６階までが利用者スペースになっている。１階には「親と子の学習センター（親子資料中心）」や「視覚障害者のための情報センター（視障資料中心）」なども設けられている。蔵書数は175万冊，雑誌３千タイトル，新聞300種類，提供する電子ブック16万冊であり，誰もが利用できる図書館として年間200万人が来館している。

4　今後の展開

まずは職員同士の交流を通じてお互いの業務の理解を深めることから始める予定で，2024年９月には，先方から３名の職員がメディアセンターを来訪することが決まっている。台湾との交流でネックとなるのは言語だが，国立台湾図書館には日本語を操れる複数のスタッフがいるため，当面は日本語と英語とスマートフォンの日中翻訳機能でカバーできると思われる。お互いに共通した課題を見出して，こちらからもスタッフを派遣していきたいと考えている。

5　メディアセンターにおける海外の図書館との交流

メディアセンターでは，これまでも海外のさまざまな団体と関係を結んできた[1)]。しかしその多くは欧米諸国の機関であり，今回のようにアジア圏の図書館と交流する機会はあまり多くない。過去には2010～2014年にかけて延世大学図書館（韓国）と交流協定（MOU）を締結していたことがある。当時メディアセンターが運用していた海外製の図書館システムであるAlephを延世大学図書館が導入したことが交流の発端で，この時も先方からの申し入れがきっかけで協定が実現した。そうした経緯から延世大学図書館とは図書館システムに関する情報交換が交流の主となり，職員の往来が数回行われた[2)]。アジア圏は近くて行き来がしやすいため，欧米の諸機関とは交流の仕方も違ったものとなっている。

また，今回の訪台時には，国立台湾図書館からの紹介により，国立台湾大学図書館を訪問する機会を得て，短い時間ながら，メインライブラリ（総図書館），スペシャルコレクション，社会科学院辜振甫先生紀念図書館などを丁寧に案内していただいた。同大学は図書館システムとして本学と同じAlmaを使用しており，以前の延世大学との協定のように，漢字圏のユーザ同士の情報交換といった交流に繋がる可能性が感じられた。

6　おわりに

今回，協定締結の学内手続きを進める中で，事務部門が独自に協定を結ぶのは異例だと認識する場面が何度かあった。それはメディアセンターが国際交流をする意義を改めて考えさせられることにもなった。

協定に限らず国際交流をする理由は，メディアセンターが扱うのは世界中の学術情報であり，その収集，整備，保存などについては国内事情だけでなく，世界の動向を常に意識する必要性があるからである。今ではインターネットを通じて世界中の情報が瞬時に得られるようになっているが，業務の遂行という観点で見た時には，そこから得られる情報だけでは不十分であろう。今回のような包括的な協定であれば，漠然とした内容でも簡単なことであっても情報交換をしやすい土壌を作ることができる。そのような交流を通じて視野を広く持つことは，業務の幅を広げ，深めることにもつながるという点でも大切なことであろう。

協定締結から約１ヶ月後の４月３日，台湾東部沖でマグニチュード7.2の地震が発生し，花蓮市を中心に台湾東部に大きな被害が発生した。国立台湾図書館は震源地からは離れていたが，地震発生当日にお見舞いのメールを出したところすぐに返信があり，幸い職員は無事とのことで安堵した。しかし，実際には，館内は図書が散乱しただけでなく配管が壊れて漏水被害が発生したようであった。被害のあった施設の一部では，まだサービスを休止しており９月の時点でもその状況が続いているようである。

そのような中ではあるが，９月に職員３名の来訪が決まった。再会を喜びつつ，被害の状況などについても詳しく伺う予定である。また，こちらからも2011年の東日本大震災時の状況を共有し，震災対策や罹災時における相互支援についての意見交換をしたいと考えている。

参考文献

１）関口素子．海外との交流からSDGsを考える．MediaNet．2023，no. 30，p. 34-36.
２）田邊稔．延世大学図書館出張報告 ―図書館システム管理における協力体制の確立を目指して―（海外レポート）．MediaNet．2011，no. 18，p. 72-74.

特　集　つながる，広がる，コラボレーション

国内図書館団体との連携・関係

木下（きのした）　和彦（かずひこ）
（メディアセンター本部課長）

関（せき）　秀行（ひでゆき）
（メディアセンター本部事務長）

1　はじめに

メディアセンターは慶應義塾大学の図書館として，大学に所属する学生・教員らの活動を支援するためにある。その目的のためには，自館のリソースに加え，館種に関係なく図書館が協力しあうことで，単館では果たし得ない機能・役割を果たすことができる。そのための様々な仕組みを図書館界は長い歴史の中で確立してきた。一例として，自館にない資料を他館から借りたり，あるいは貸したりする相互貸借があげられる。このように，図書館同士が連携することでスケールメリットを生み出し，利用者の活動支援をより効果的に，幅広く行うことができるのである。

そうした図書館間の連携活動をより円滑に進めるほか，図書館職員の研鑽や情報交換のため，あるいは図書館以外の組織との連携・連絡窓口となるために，国内には様々な図書館関係団体があり，本学もそれらの団体といろいろな形でかかわっている。今号のテーマである「つながる，広がる，コラボレーション」にちなみ，本稿では，本学と主だった図書館関係団体との関わりについて概観する。

2　私立大学図書館協会

筆頭にあげられるのは，私立大学図書館協会（以下「私大図協」とする）である。私大図協は1930（昭和５）年に創立された「東京私立大学図書館協議会」を前身に持ち，本学はこの設立時から加盟している。当初は東京にある11大学で発足し，全国的な「私立大学図書館協会」となったのは1943（昭和18）年のことである[2)]。2023年度の加盟総数は516校となっており，日本の私立大学の約９割が加盟している。

私大図協は私立大学図書館の改善・発展を図ることを目的とし，このための研修の実施，研究会・講演会等の開催等に加えて，国際図書館協力セミナー，研究助成等の独自事業のほか，すぐれた大学図書館活動を顕彰する協会賞授与などをおこなっている。

図書館団体の活動はそこに加盟する図書館が交代で事務局を担ったり，各委員会に委員を派遣したりする形での運営が一般的である。本学からも，私大図協のさまざまな委員会に職員を送り出すことで，その運営に協力している。

3　国公私立大学図書館協力委員会

私立大学と同様に，国立大学図書館や公立大学図書館も，それぞれ団体を組織している。国公私立大学図書館協力委員会（以下「協力委員会」とする）は，国公私の垣根を超えて広範囲にわたる協力関係を維持する必要性から，日本の大学図書館全体を包括する組織として1979（昭和54）年に作られた[3)]。

当初の課題には，文献複写によるILL（図書館間相互貸借），図書館資料の交換，電算機による書誌情報ネットワークの構築などがあげられており，現在では図書館にとって欠かせないこれらのサービスが，この委員会の発足によって，より円滑な運営を目指して整備されてきたことが伺える。現在は，国公私の各団体間や国立情報学研究所，国立国会図書館との情報共有のほか，文部科学省からの連絡窓口としての役割も果たしている。大学図書館が直面する課題が多様化し，各大学に共通する問題が日常化している昨今，日本の大学図書館コミュニティとして統一的な意思決定をせまられる局面が増えており，協力委員会に求められる役割も重要なものになってきている。

協力委員会は，国立大学から４館，公立大学から３館，私立大学から６館が選出され，全13大学で委員館を構成している。国公私それぞれから２館が常任幹事として選出され，この常任幹事館が日々の運営の核となっている。本学は，早稲田大学とともに私立大学の常任の委員館であり，かつ常任幹事館の役割も担っている。さらに常任幹事館は持ち回りで

協力委員会の委員長となることが慣例となっており，委員長館が委員会の事務局も務める。本学は５年に１回のペースで委員長館を担っており，事務局業務はメディアセンター本部総務担当が担当する。

この協力委員会は，前述したようにさまざまな関連団体・組織との連携の窓口にもなっており，「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」（以下「連携・協力推進会議」とする）や「国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会」といった大学図書館と密接な関係のある組織との会合が定期的に開催されている。

また協力委員会は単に調整・連絡を行うだけでなく，その下部に，「大学図書館研究」編集委員会，大学図書館著作権検討委員会，シンポジウム企画・運営委員会といった専門委員会がおかれている。大学図書館著作権検討委員会は，図書館における重要なサービスの一つである文献複写サービスに関する著作権問題を扱うもので，外部の権利者団体とのタフな交渉・調整も行う重要な活動となっている。これらの委員会全てに本学は委員を派遣し協力している。

４　日本図書館協会（大学図書館部会）

日本図書館協会（以下「日図協」とする）は，1892（明治25）年に発足した「日本文庫協会」を前身とし，日本の図書館界を代表する総合的な全国組織である[4)]。図書館と一口にいうものの，その中には公共図書館や学校図書館など様々な種類があり，大学図書館もその一つの館種となる。館種ごとに部会が組織されており，大学図書館のためには大学図書館部会がおかれている。

前述の協力委員会が組織されるまでは，この大学図書館部会がその役割を担っており，前述の国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会もこの大学図書館部会が受け皿となっていた。現在は，協力委員会のシンポジウム企画・運営委員会との共催で年１回のイベント開催を行うのが主たる活動となっている。

また日図協は，国内のほぼ全ての図書館で使用されている日本目録規則（NCR）や日本十進分類法（NDC），基本件名標目標（BSH）を刊行しており，その内容の更新を継続的に行っている。そのための委員会がそれぞれ設けられているが，このうち目録委員会では，本学の目録担当者が数年ごとに交代しながら委員を長年務めている。

５　国立情報学研究所との連携の下での活動

国立情報学研究所（以下「NII」とする）は，1976年に発足した東京大学情報図書館学研究センターを前身に持ち，大学図書館の総合目録を目指した目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）を1984年から運用してきている。1986年に学術情報センターに改組，2000年に情報学分野を中心とする研究所となったが，大学共同利用機関として，学術コンテンツやサービスプラットフォームの提供などの事業も行っている。NIIとは前述の「連携・協力推進会議」以外にも様々な活動で連携しているが，ここでは２つの活動を取り上げる。

(1) 大学図書館コンソーシアム連合

大学図書館コンソーシアム連合（以下「JUSTICE」とする）は，国立大学図書館協会のコンソーシアム（JANULコンソーシアム）と公私立大学図書館コンソーシアム（PULC）という，それまで別個に運営されてきた２つの組織を合体させた新たなコンソーシアムとして，2011（平成23）年に発足した。日本の大学における教育・研究活動に必須である学術情報の提供を，安定的・継続的におこなっていけるように，国公私の垣根を超えて大学図書館全体として取り組むための組織であり，具体的には，出版社との条件交渉を含めた，電子ジャーナル等の電子リソースに係る契約，管理，提供，保存に関わる活動が中心となっている。2024年５月現在の会員館は561館（国立大87，公立大82，私立大376，その他16）である。

組織構成は若干複雑で，協力委員会とNIIとの間で2010（平成22）年に締結された『連携・協力の推進に関する協定書』にもとづき，両者が連携して設置する「連携・協力推進会議」の下にJUSTICEが置かれる，という構図になっている。事務局はNII内に置かれているが，事務局員は，会員機関からの出向職員により運営されている。本学からも2013年から２年間，この事務局に職員を派遣したことがある[5)]。事務局以外にも運営委員会や作業部会といった委員会が担う重要な業務があり，それらにも委員を出し協力している。

(2) オープンアクセスリポジトリ推進協会

オープンアクセスリポジトリ推進協会（以下「JPCOAR」とする）は，機関リポジトリを通して日本国内のオープンアクセス並びにオープンサイエン

スに資することを目的として2016（平成28）年に設立された組織である。加盟機関の多くはNIIが提供している機関リポジトリのクラウドサービスであるJAIRO Cloudを利用している。2024年５月現在の会員館は754館（国立大83，公立大81，私立大464，その他126）である。JPCOARもJUSTICEと同様に「連携・協力推進会議」の下に設置されている。

本学は機関リポジトリにJAIRO Cloudを利用していないが，機関リポジトリに登録するメタデータの検討などを行う関係もあり，作業部会に委員を出している。

６　その他の図書館関連団体

国内には，特定の分野を対象とする図書館団体もある。本学が所属するものとしては，日本医学図書館協会，日本看護図書館協会，日本薬学図書館協議会があり，それぞれ信濃町メディアセンター，看護医療学図書室，薬学メディアセンターが加盟している。これらの団体では，研究集会・研修会や機関誌の発行を通じて会員館の交流や情報交換を行っている。加盟館として研修会の講師派遣や機関誌への寄稿などを通じて協会運営に協力する一方，専門分野を扱う図書館として，これらの協会の活動への参画によって得るものも多い。

７　おわりに

メディアセンターは私学の中でも規模の大きい図書館として，外部からさまざまな役割を期待されている。協力委員会の委員長館を担う場合を除き，日常業務への負担は大きなものではないが，それでもこれだけの広範な活動に委員を送り出し寄与するのは簡単なことではない。一方で，これらの活動を通じて国内の大学図書館との良好な関係を維持しつつ，その関係から享受できる利点もある。本来の業務とのバランスは当然とりながらも，今後もこれらの活動への協力を通じて日本の大学図書館界への貢献を行っていければと思っている。

注・参考文献：

１）加藤諒．大学図書館界における本学メディアセンターの活動と役割．塾監局紀要．2022，no. 37，p. 47-48.
２）“私立大学図書館協会史”．私立大学図書館協会．https://www.jaspul.org/about/asset/docs/kyoukaishi1.pdf
３）“「国公私立大学図書館協力委員会」の成立”．大学図書館研究．1979，no. 15，p. 84.
４）“日本図書館協会について”．日本図書館協会．https://www.jla.or.jp/jla/tabid/221/Default.aspx
５）保坂睦．JUSTICE事務局での２年間 ―得られたこと・考えたこと―．MediaNet．2015，no. 22，p. 34-37.

館外展示への出品：
相手を支え，自らも得る

竹内（たけうち）　美樹（みき）
（三田メディアセンター）

1　はじめに

美術館や博物館で開催される展示会は，華やかであるが展示業務のごく一部である。そこに至るまでには１年程度あるいはそれ以上の準備期間があり，会期終了後も借りた作品を所蔵機関に返却する業務がある。スペシャルコレクション担当（以下，「スペコレ担当」）では展示会に三田メディアセンター（以下，「三田メディア」）の蔵書を貸し出すことはあっても外部から資料を借用することはほぼない。資料を出品する側ではどのような業務をしているのか，本稿ではその概要を紹介する。

2　対応件数と相手機関

スペコレ担当は，毎年平均16～17件ほどの館外展示（学外機関や学内他部署の企画）に出品対応している。展示というと美術館を想像しそうだが，実際の出品相手はほとんどの場合，歴史博物館である。三田メディアの蔵書をこれまでに何度も展示したリピーターから初めての機関までさまざまで，希望資料として打診されるものは和漢書や古文書が多い。

3　展示出品の流れ：事前準備

(1) 打診から申請受理まで

学外の場合，最初の打診は展示会期（予定）の１年程度前に来ることが多い。やむをえない事情により差し迫った日程で申請されることもあるが，それはごく稀なケースである。一方，学内他部署からの出品打診は気安さもあってか大抵ギリギリである。並行して進めている複数の学外展示準備や利用者対応などの間を縫ってスケジュール調整するため，他部署展示は準備の各段階で日程にほとんど余裕がなく，お互いに綱渡りのような状況で会期にこぎつけることも多い。

打診を受けた後，資料の状態や他展示への出品予定などに問題がなければ仮申請を受理する。この段階で先方の学芸員が来館して現物閲覧後に借用資料を確定する。同時に資料のサイズや綴じの状態などを確認し，展示方法の検討ならびに書誌事項と解題作成の準備をしているようである。その後，相手先機関の提出する企画書や展示施設の防災設備環境などを確認し，正式な出品手続きに入る。

(2) 進捗状況の管理

出品資料リスト，画像手配や保険など，出品に伴う細かい業務項目はエクセルに入力し，複数の学外展示の進捗をまとめて管理している。展示出品自体は無償だが，図録などに画像を掲載する場合，高精細画像の手配（資料によっては新規撮影も）や支払関係業務が発生する。

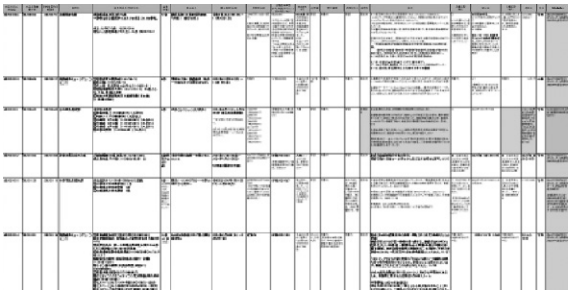


図１　複数の展示の進捗状況をエクセルで管理

(3) 資料の種類と取り置き

相手先の企画内容により，出品資料の数は１点～数十点にわたる。出品対象が一般書や準貴重書のみであれば閲覧担当が対応するが，１点でも貴重書が含まれるとスペコレ担当が対応している。一般書や準貴重書の場合，貸出処理をしてスペコレ担当事務室や保存庫に一時保管する。その際，返却期限は要注意である。展示には通常の貸出より長い日数が必要なので，会期後に資料が戻る時期を見越し，閲覧担当にあらかじめ依頼して返却期限を延長しておかないと，資料管理面でトラブルのもととなる。一般書や準貴重書の出品点数が多い場合は，各展示のために何を借りてどこに取り置きしているか，管理用リストを作成して注意を払い，他担当に迷惑をかけ

ないようにしている。

図２　一般書と準貴重書は返却期限を延長し，ブックトラックに取り置く

他方，貴重書はもともと閲覧のみの運用でシステム上の貸出処理はしないが，搬出の数か月程度前には出品資料を書架から取り出して書庫内に別置する。展示するのが１冊だけの場合は現物に「○月に○○博物館に出品」とメモをつけて搬出日近くまで書架に置いておくこともある。いずれも別展示へのダブルブッキングの予防措置で，貴重書閲覧や授業への使用には対応するため，書庫でスタッフがすぐに現物を発見できるように配慮する。

(4) 指定文化財には要注意

文化財指定の貴重書を学外で展示する場合は，オプション作業が発生する。

◆国指定重要文化財（例：大かうさまくんきのうち，相良家文書など）

文化庁指定「公開承認施設」[1] に登録済の機関に出品する際は，出品申請書と共に登録証控を受け取ればオプション作業は完了である。未登録機関の場合は先方が文化庁に事前に申請し，三田メディア・出品先機関・文化庁の三者連立で必要な手続きをとる。文化庁から展示可否に関する回答がすぐに出ない可能性もあるので，出品先の学芸員は日程に余裕をもって準備する必要がある。

◆港区指定文化財（例：反町文書，曲直瀬家文書など）

国指定の重要文化財とは別に，慶應義塾は港区が指定する文化財も所蔵している。港区指定文化財にはどのようなものがあるか，港区立郷土歴史館のWebサイトに総合目録が公開されている。[3]

学外に港区指定文化財を出品する場合，現物が一定期間外部に配置されることを，港区の文化財当部署に知らせる必要がある。出品先が公開承認施設か否かは特に関係ないが，所定の書類に記入して港区に三田メディアから提出する。

(5) 搬出と搬入：当日までの準備

搬出入時の梱包・開梱，学芸員との現物確認は貴重書室で行う。他の閲覧予約を入れないよう作業数か月前には日程を決める。複数の外部展示に並行対応していると，同時期に搬出入候補日が集中することも多い。貴重書活用授業や遠方から来館する利用者の閲覧などが重なって貴重書室が予約困難の場合もあり，場所の確保は死活問題である。

搬出入日が近づくと入構申請を行い，控えと構内車両経路図を出品先に送る。入構申請には車両情報や乗務員全員分の氏名などが必要だが，運輸業界のマンパワーの関係で，ドライバーと車両の確定は作業日直前になることも多い。また，４トン車は入退出経路が通常車両と異なり，管財担当にも事前通知が必要である。

４　カルテと現物の突合せ（搬出・搬入時）

出品先の学芸員は事前調査時あるいは搬出当日に資料の状態――微細な汚れや綴じ糸のほつれ，古い虫損，折れなど――を細かくメモしたカルテを作成する。梱包前にスペコレ担当と学芸員で一緒に現物とカルテを照合するのだが，その作業は搬出時のみならず，会期後の返却搬入時にも行う。傷や汚れが運搬時や展示関係作業で増えていないということを確認するためである。

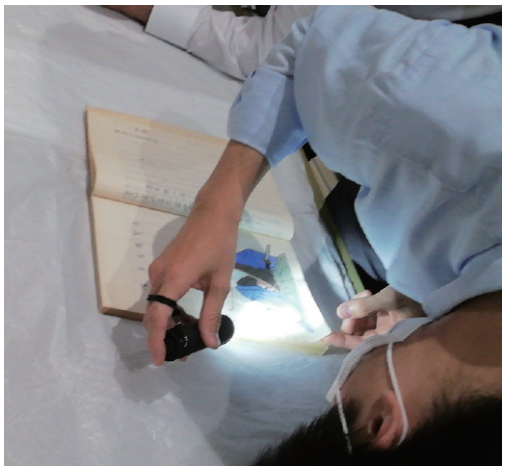


図３　出品資料の詳細な調査を行う学芸員

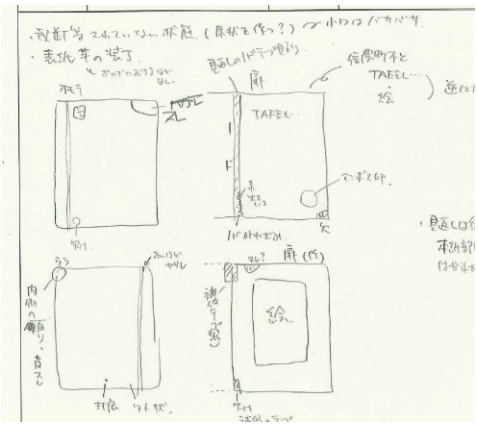


図４　実際に作られたカルテの例

また，学芸員によるカルテ作成時に，現物のコンディションや今後の取り扱いの注意などアドバイスを貰えることがある。

例：『戯作者考補遺』平賀源内の絵がある丁の折り目が切れかかっているとの指摘。この絵は館内展示などでも人気がありよく使用する。源内を探して何度もめくられるために傷んできているらしい。今後も使うことを考え，ハンドリングに注意するよう現物にメモをつけ，平賀源内部分に和紙栞をはさんですぐ見つけられるようにする。

図５　梱包と開梱は美術品輸送会社の専門スタッフが行う

５　会期終了後：休眠期間へ

戻ってきた現物とカルテの照合後，搬出時に預かった借用書を相手先に返却し，現物を書架に配架する。貴重書の場合，展示出品から戻った後，１年間程度は他の展示には出さずに休ませる。一般書や準貴重書は閲覧担当に引き渡し，返却処理と配架を依頼する。

６　おわりに

展示出品は大まかに上述の通りだが，展示する側では，企画作成と資料の選定，借用した作品の細心な取り扱いや保険，複数機関から資料を借りる際のスケジュール調整や美専車（美術品輸送専用車両）手配，広報，図録編集など，数十倍の業務をこなしている。企画時に三田メディアの資料が出品候補にあがるのは，丸善丸の内本店で開催している「慶應義塾図書館貴重書展示会」の図録やデジタルコレクションがきっかけになることもあるようだ。三田メディアの蔵書について，多様な視点の切り口で企画を提案してもらえるのは，我々スタッフにとっても大変勉強になる。蔵書そのものや資料保存方法に対する知識を深め，そして自分たち自身が企画を立てる際にも何らかの参考になるという意味においても，外部展示に積極的に協力することは今後も重要だろう。

参考

１）文化庁．“公開承認施設”．
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shoninshisetsu/
２）港区立郷土歴史館．“港区文化財総合目録”．
https://www.minato-rekishi.com/museum/list.html

日吉キャンパスにおける読書バリアフリーへの取り組み：
日吉メディアセンターと国立国会図書館の視覚障害者等用データ提供館覚書締結

吉井由希子（よしいゆきこ）
（日吉メディアセンター課長）

1　はじめに

2021年に改正された障害者差別解消法では，それまで民間事業者（私立大学も含まれる）には努力義務とされてきた障害のある人への合理的配慮の提供が，義務化されることになった。この改正法が2024年４月１日から施行されることを受け，日吉キャンパスでは，2023年初めから読書バリアフリーの促進について検討がなされてきた。読書バリアフリーとは，視覚障害，発達障害，身体障害等により，文字情報の認識が困難な人や，書籍を持つことやページをめくることが難しい人が，音声読み上げなど自分に合った様々な形で，書籍の内容にアクセスできるようになることを指す。2019年６月28日に「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」（読書バリアフリー法）施行されたことで，読書バリアフリーへの取り組みの必要性が広く認識されるようになった[1)]。

日吉キャンパスでは，視覚障害その他の理由で通常の活字の印刷物の読書に困難を抱えている（Print Disabilityのある）塾生および教職員を対象とした読書バリアフリーへの取り組みとして，書籍の電子化および提供について検討を開始した。時を同じくして，国立国会図書館が2023年３月に「国立国会図書館障害者用資料検索「みなサーチ」β版」の試験公開を開始した[2)]。この動きを受け，電子化した書籍のファイルを国立国会図書館に共有すべく，経済学部中野泰志教授，協生環境推進室（障害学生支援室），日吉メディアセンターで，協同して準備を進めることになった。本稿では，日吉キャンパスにおける視覚障害者等用データの作成および2024年１月に正式版として公開された「国立国会図書館障害者用資料検索（愛称：みなサーチ）」（以下「みなサーチ」）（図１）[3)4)]へのデータ提供について報告する。

2　視覚障害者等用データの準備

(1) 対象資料

提供の対象とする資料は，日吉メディアセンターで除籍となった資料のうち，過去にシラバスに教科書として掲載されていた書籍を主とした。どのような書籍の電子化が求められているかといったニーズの調査を行ってから取り組むやり方もあったが，まずはコンテンツを増やすことを重視した。教科書は多くの学生のニーズがあると予想されたことや，除籍された書籍であれば裁断してスキャナーで読みとることが可能となり，電子化作業の効率が良いため，対象として最適と考えられた。

(2) 事前調査

著作権法第37条第３項に規定される権利制限に基づき，図書館では視覚障害者等用として書籍の電子化（読み上げに対応するように透明テキストを付けてのPDF化など）を行うことができる。ただし，同じ形式のものがすでに著作権者等より提供されている場合は行うことができない旨が，同項のただし書きとして規定されている。電子化を行うにあたっては，日本図書館協会の「図書館の障害者サービスにおける著作権法第37条第３項に基づく著作物の複製等に関するガイドライン」[5)]を参考にし，同サイトに掲載される「著作権法第37条第３項ただし書該当資料確認リスト」に挙げられたWebサイトのほか，読み上げ機能つきの電子書籍を扱う出版社サイトを確認し，音声化できる形で電子化されたものがすでに提供されていないことを確認した。

(3) 電子化作業

電子化作業は，中野研究室および協生環境推進室が担当した。国立国会図書館に提出するデータを用意するために必要な作業は，書籍のスキャン，透明テキストデータ付PDFの作成，簡易書誌情報（提供する資料のリスト）の作成である。またPDFファ

イルの冒頭には，原本に関する情報，製作者，著作権法第37条第３項に基づき製作したことを，指定の書式に従って記述したページを添えなければならない。これらの作業について，学内で裁断およびスキャン作業が可能な資料については，すべて中野研究室内で行い，それ以外については透明テキストデータ付PDFの作成までを外注し，資料リストは協生環境推進室で作成した。

3 「みなサーチ」へのデータ提供

(1) 覚書締結

国立国会図書館との窓口は日吉メディアセンターが担当した。「みなサーチ」へのデータ提供館になるためには，あらかじめ国立国会図書館との「視覚障害者等用データ収集に係る覚書」の締結が必要である[6)]。覚書の名義は大学の場合，図書館でなくてはならないため，日吉メディアセンターにて準備を進めた。2023年12月８日に覚書を締結し，国立国会図書館への視覚障害者等用データ提供館として，日吉メディアセンターが登録された。

(2) データの提供

「みなサーチ」に提供できるデータの種類は，音声DAISY・音声ファイル・マルチメディアDAISY・テキストDAISY・テキストデータ（未校正テキストデータを含む）・点字データである[7)]。このたび提供した透明テキスト付PDFデータは「テキストデータ」にあたり，OCRで読み込んだままで人手による確認を経ていないデータということで「未校正テキストデータ」として提供した。

国立国会図書館とのデータの受け渡しにはクラウドストレージのBoxを採用し，電子化したデータがある程度の量になったところで，簡易書誌情報（提供する資料のリスト）とともに１つのBoxフォルダに格納し，これを国立国会図書館の担当者がダウンロードしていただくといく流れにした。なお国立国会図書館が提示しているデータの送付方法は，DVD-R，USBメモリ等の媒体による郵送・国立国会図書館のサーバへのデータ送信・メールによる送付の３通りのうちいずれかとなっているが，国立国会図書館の担当者とも相談させていただき，最終的に双方の負担が少ないBoxによるデータの受け渡しという形で調整することができた。

提供したデータは，国立国会図書館の担当者によって「みなサーチ」に登録される。この段階で，透明テキストの不備等で，読み上げに難があるものが見つかった場合は差し戻され，修正する。2024年８月現在，「みなサーチ」には，250件以上のデータが「製作者：日吉メディアセンター」として登録されており[8)]，作業は継続中である。

4 おわりに

「みなサーチ」へのデータ提供は，予算と人手が確保できれば，作業をルーティン化して，継続していくことは可能である。人手に関しては，日吉メディアセンターにおいても，国立国会図書館とのやり取りや，電子化する資料の事前調査，関係部署との各種調整等を行うため，少なくとも１名以上の担当者を立てる必要がありそうだ。「みなサーチ」は，視覚障害その他の理由で通常の活字の印刷物の読書が困難な方（Print Disabilityのある方）であれば，利用者登録のうえ利用ができる[9)]。「みなサーチ」にデータを提供し，コンテンツを充実させていくことは，読書バリアフリー環境を整えることへの貢献の一つと言える。

その一方で，Print Disabilityのある塾生や教職員にフォーカスしたサポートについては，さらに対策を検討していく必要があるだろう。そのためにはこれに関わるスタッフだけでなく，すべての教職員や学生が，読書バリアフリーに対する理解を深めていかなければならない。慶應義塾における読書バリアフリーへの取り組みについて，その必要性やメリットをさらに具体化していくことも求められるだろう。大学内において視覚障害者等は少数であり，実際のところ当事者の声を聞く機会がなければ検討が難しいのも事実で，それゆえに優先度が低くなりがちである。学内におけるニーズを把握し，対象者に分かりやすい形で読書バリアフリーに関するサポートを提供する体制を整えていくことが必要となっていくだろう。「みなサーチ」へのデータ提供の次に何ができるかは，これから考えていくべき課題といえる。

注・参考文献

1）“視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律について”文部科学省.
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/1421470.htm.

2）“国立国会図書館，国立国会図書館障害者用資料検索「みなサーチ」β版で視覚障害者等を対象としたデジタル化資料の全文テキストデータ提供を開始”カレントアウェアネス-R，2023，（NDL, 2023/3/28）
https://current.ndl.go.jp/car/175454.
3）国立国会図書館．“みなサーチ正式版を公開しました”みなサーチ（お知らせ），2024.
https://mina.ndl.go.jp/news/20240105.
4）“みなサーチ”国立国会図書館.
https://mina.ndl.go.jp/.
5）日本図書館協会．“図書館の障害者サービスにおける著作権法第37条第３項に基づく著作物の複製等に関するガイドライン”
https://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/865/Default.aspx.
6）国立国会図書館．“視覚障害者等用データの収集の手続き（「データ提供館」になる）視覚障害者等用データの収集について”視覚障害者等用データの収集について，
https://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual-10_01.html#a4.
7）国立国会図書館．“国立国会図書館が収集する視覚障害者等用データの種類”国立国会図書館が収集する視覚障害者等用データの種類視覚障害者等用データの収集について．
https://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual-10_01.html.
8）みなサーチ検索結果．以下URLより日吉キャンパスで作成された電子書籍を一覧できる（製作者を慶應義塾として検索）
https://mina.ndl.go.jp/search/detail?cs=bib-mina&q-producer=慶應義塾.
9）国立国会図書館．“視覚障害者等用データ送信サービスの利用者登録について（初めて登録する）”
https://www.ndl.go.jp/jp/support/pd_touroku.html.

図１　「みなサーチ」トップページ

Tea Room（ティールーム）

図書館をめぐるあれこれ

西川（にしかわ）　葉澄（はすみ）
（総合政策学部専任講師）

図書館についてずっと疑問に思いつつも放置してきたことがある。それは英語のlibraryが，フランス語ではbibliothèqueとなる謎である。ドイツ語のbibliothek，スペイン語，イタリア語，ポルトガル語のbiblioteca，ラテン語のbibliothecaなど，図書館を表す語がbiblioから始まるタイプは多い。この機会に語源を調べると，これらはギリシャ語のbibliothékēに由来する（本＋置場の意味）。一方，平凡社大百科事典によるとlibraryの語源は「木皮を意味するラテン語liber」に由来するという。フランス語辞書のLittréを見ると，かつてはフランスでもlibrairieが図書館の意で使われていたとの記載がある。librairieは現代のフランス語なら書店のことである。

慶應の図書館は言わずもがなメディアセンターという名称である。書物の他にデジタル資料等も扱うためだろうと，名称の由来について深く考えたことがなかったが，今回恥ずかしながら初めてメディアセンターのWebサイトにある概要・沿革を拝見し，1871年に設置された図書室が後に各キャンパスの大学図書館に拡がり，やがてメディアセンターとして有機的につながっていく歴史に胸が熱くなった。

さて，図書館といえばボルヘスの「バベルの図書館」のような小宇宙ともいえる神秘的な建物に計り知れない量の蔵書が詰められた謎の空間をついつい思い浮かべてしまう。2000年以前に出版された蔵書を全部廃棄処分にした大学図書館の話を聞いたことがあるが，そうしたニュースに恐怖を感じる私のような人間にとって，図書館とは願わくば新旧とり混ぜ様々な本を包容していく小宇宙であってほしい。そのため図書館の建物は大きければ大きいほど安心する。永田町の国立国会図書館の高い天井の下にいると高揚感に包まれるし，サッカースタジアムのように広大なパリのフランス国立図書館はまるでユートピアのようである。華麗かつ壮大なロンドンの大英図書館も，アメリカの駅のように天井が高くやや薄暗いボゴタの国立図書館の建築もみんな素晴らしかった。

もちろん大学図書館も最高だ。北米の大学図書館もいくつか通ったが，レンガやコンクリートブロックで組んだ壁の内部がそのままペンキで塗られたような建物が多く，その無造作な感じもまたたまらない。本との偶然の出会いがある開架式が好きだが，閉架式の魅力も捨てがたい。予約した本が出てくる瞬間はまるで誠実な友達に願いが聞き届けられたようでもある。

学生時代にはもちろん大学図書館でアルバイトをした。受付で貸出・返却手続きをしたり，返却された本がぎっしり詰まったカートを押して，本が元いた場所に忠実に戻すのだ。それらは実に楽しい作業だった。

図書館が舞台になる小説もいい。まずは村上春樹の『図書館奇譚』を思い出す。主人公はひょんなことから図書館の老人により図書館地下の謎の空間に幽閉されてしまう。牢屋では静かに読書をし，食事の他にも寝る前にドーナツとジュースが羊男から差し入れされる。逆にご褒美ではないか。主人公は「やれやれ」と呟く。村上に影響を与えたであろうR・ブローティガンの『愛のゆくえ』も変わった図書館に住む男の話である。1975年の青木日出夫訳では主人公が「やれやれ」（Well）と呟くのだが，それは彼が図書館から出てメキシコにいる時のエピソードだ。他にも図書館を舞台にしたおすすめの作品があればぜひ教えていただければ幸いである。

信濃町メディアセンター 館内リニューアルプロジェクトの取り組み

本井英理子（もといえりこ）
（信濃町メディアセンター主任）

1　はじめに

信濃町メディアセンター（以下「当館」とする）では，2023年12月から「信濃町メディアセンター館内リニューアルプロジェクト」（以下「当プロジェクト」とする）を進めている。本稿を執筆している2024年８月時点で当プロジェクトは進行途中にあるため，最終的な成果を報告することはできないが，当プロジェクトの実施に至った経緯や現時点までの取り組み状況，今後の展望について報告する。

2　「学習環境に関するアンケート」の実施

当プロジェクトの開始に至ったきっかけは，2023年５月に実施した「学習環境に関するアンケート」（以下「学習環境アンケート」とする）にある。医療従事者や医学研究者の利用が主となる当館では，電子資料の利用が非常に多い反面，来館者数は年々減少傾向にあったが，2020年から始まった新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）の拡大による入館制限を経て，入館者数はさらに激減した。2022年11月には当館の入館制限が完全解除となったにも関わらず，来館者数は2019年度と比べ４割に満たない月が続いた。特に学生の来館者数の減少が顕著だったことから，コロナ禍を経て学生の学習行動にも何らかの変化が起きているように思われた。もしそうであれば，行動変容の理由を把握し，新たなニーズを満たせるようにサービスを見直していかなければならないと考え，アンケートを実施して利用者の実態を把握することにした。アンケート計画の策定や設問の設定にあたっては，当館で2012年度に実施した「スタディライフ調査」[1)] の記録を参考にした。

学習環境アンケートは2023年５月15日から５月31日までGoogleフォームを使って実施した。対象者は，信濃町キャンパスが主な学習拠点となる医学部２～６年生，看護医療学部３年生，健康マネジメント研究科生のほか，キャンパス内に個人の研究スペースを持っていないと思われる研修医も対象とした。なお，医学研究科の大学院生は個人の研究スペースを所有しているケースが多いため，対象外とした。また，教育的観点から図書館に求める設備やサービスへの要望を聞き取る目的で，教員に対してもアンケートを実施した。学生に対するアンケートでは，最近１ヶ月の信濃町キャンパスにおける活動状況や学習行動，当館の利用状況を把握するための問いに加え，日頃の学習場所の選択理由や不満な点，どのような学習場所があればより学習が捗ると思うかといった，学習場所へのニーズを把握するための設問を用意した。より多くの回答を得るため，回答者には謝礼としてオリジナルボールペンを配布した。

結果的には，学生96名，研修医17名，教員34名からの回答が得られた。学生からは，ディスカッションや仲間と教え合う学習が行える場所を求める声が多かった一方で，静かな個室や仕切りのある学習スペースを求める声も聞かれた。また，動画視聴やWeb会議への参加が快適に行える設備へのニーズも見られた。これは，コロナ禍を経てWeb会議が社会全体で定着したことに加え，医学部ではオンデマンド形式を中心としたオンライン授業が定着し，現在も実施されていることも一因と思われる。来館理由を問う設問では，オンデマンド授業の動画視聴を含む自習目的での来館が多い一方で，館内設置パソコンを利用する目的での来館者数は０名という結果が出た。この結果から，多くの学生は自身で持ち込んだパソコン等を使って学習していることが分かった。教員からは，既存設備のうち「静かに学習する場所」「グループで学習する場所」「講習会やセミナー・発表が開催できるスペース」の改善・増設や，「オンライン授業等で発話可能な個室ブース」「論文・レポート執筆関連資料コーナー」などの新設を求める意見が出た。

７月下旬には，学生課にこのアンケート結果を報告するとともにヒアリングを行い，信濃町キャンパスの学生用施設の現状についての意見交換を行った。これらの結果から，学生の学びの形が多様化していること，それに伴い学習環境へのニーズも変化してきている状況が見えてきた。今求められているのは，多様な学びの形態に対応できる多様な学習環境であるとの認識をもとに，当館パブリックサービス担当は既存設備の改善検討を開始した。

３　改善計画の策定

学習環境アンケートの実施により学生のニーズは掴めたものの，そこから具体的な改善案を出すところで行き詰まった。特に，複数名で会話をしながらアクティブに学習ができるような場所を当館のどこに設置すべきか，うまく定められずにいた。当館地下１階の奥には，グループ学習室という予約可能な小部屋が１室あったが，奥まった場所であることも影響してか利用率は非常に低い上に，換気性能上の理由から2022年以降は少人数でしか利用できなくなり，この部屋の利用促進がしにくい状況となっていた。学生のニーズを考慮すると，最もアクセスしやすい１階閲覧席にこそ会話可能エリアを設置すべきとも考えたが，長年静かな学習スペースとして運用されてきた１階閲覧室を会話可能エリアにすることは，利用者にとってかなり影響の大きいルール変更となることが予想されたため，なかなか決断できずにいた。

また，この段階では改善計画に充てられる予算は確保できていなかったため，現実的にできることは既存の設備や什器をやりくりする程度の小規模な改善計画でしかなかった。そもそも当館は築80年を越え，老朽化が進んだ建物である。どんなに足掻いても，少ない予算で魅力ある設備の図書館に作り変えることなど到底できないように感じられた。

実現可能性に捉われすぎてもよい施設改善は望めないことから，企画段階では多様な知見や視点で自由にアイディアを出し合える機会が必要だと考え，８月29日に当館スタッフ全員参加による「館内環境改善ワークショップ」を実施した。ワークショップは，まず参加者が自由に館内を巡りながらアイディアを出し，次に２班に分かれて意見をまとめていく流れとした。その結果，各班から既存設備や資料配置に関する思いきったアイディアが提案され，館内環境全体を大きく見直すきっかけになった。

９月にはワークショップで出されたアイディアをベースに，各担当のチーフと事務長が複数回のミーティングを重ねて館内閲覧エリアのリニューアル案を固めた。この過程で，単なる閲覧スペースの改修にとどまらず，信濃町キャンパスにおける学生の学習環境向上に資するような視点も盛り込まれた。

図１　館内環境改善ワークショップの様子

案では，リニューアルの目的を「館内閲覧スペースを，多様化する学生の学習スタイルやニーズに対応したスペースへと転換させ，信濃町キャンパスにおける学習環境の向上を図る」ことと定めた。フロアコンセプトとして，１階を「動」のフロアとし，グループ学習や小規模なプレゼンテーションも含むアクティブな学習活動が実施可能な学習空間を目指すとした。一方，地下１階のコンセプトは「静」のフロアとし，個人学習を行うための機能を集中させる案とした。キャンパスとして不足している環境整備にも配慮し，オンライン授業の受講席を地下に設置することにした。

さらに１階は，特定の利用者層を想定して２エリアにゾーニングし，学習席が多く設置されている閲覧室エリアを学生，新着雑誌などが配置された「くつろぎ閲覧エリア」を臨床医・研究者と位置付け，それに合わせて資料配置も見直すことにした。またこれらの計画が確実に実行できるよう，希望通り予算が獲得できた場合のプランだけでなく，予算の手当てがなくても既存施設のやりくりとルール変更だけで実現できるプランも別途用意した。

こうしてまとめられた計画は，12月１日，当プロジェクト特設サイト[2]での広報開始とともに，実現に向けて動き出した。その後，幸いなことに我々のコンセプトが認められ，慶應義塾大学病院の機能充実・機能改善や医療人材育成に向けた機会充実・環境整備を使途とした「慶應義塾医療環境整備資金」[3]から予算がつくことになり，最も不安であった資金面の見通しもようやく立ち，計画の実現に向けて進めることができるようになった。

４　館内リニューアルに向けた取り組み

当プロジェクトで最初に着手したのは，レファレンス資料の移動である。１階閲覧室には，２層式のレファレンス書架が大きく場所を取っていた。館内の一等地とも言える１階に利用者スペースを広く確保したいという意図に加え，近年の冊子体のレファレンス資料の利用度の低さも鑑み，大半のレファレンス資料を地下書庫に移した。移動先の地下の書架も満杯であったため，現在ではほぼ利用のない『医学中央雑誌』や“Index Medicus”などのインデックス資料を閉架書庫に移動し，さらに利用のなかった中国語雑誌を協議会で承認の上廃棄するなどして，スペースを捻出した。空になったレファレンス書架は2024年２月に撤去し，１階に大きなスペースを確保することができた。

続いて，館内設置パソコンの減台に取り組んだ。もともと１階閲覧室にはITCパソコンが20台，地下１階セミナー室には18台設置されていたが，学習環境アンケート結果でも示されたように，これほどの台数を維持する必要性は低いと考えられた。そこで，信濃町情報センターとも相談し，１階は３台，地下は７台に減らした。

こうして１階にできた空間には，地下グループ学習室の可動式テーブルを運び込み，グループワークができるスペースを用意した。この設置什器の変更に合わせ，２月12日から書庫エリアを除く１階全体を会話可能というルールに変更した。併せて１階閲覧室を「マナビバ」，くつろぎ閲覧エリアを「くつろぎ」という名称に変更した。

一方，地下１階のセミナー室は，防音対策が施された環境をそのまま活かし，発声を伴うオンライン授業の受講も可能な「eラーニングルーム」とした。奥まった場所にあったグループ学習室には，１階閲覧室にあった視聴覚ブースや視聴覚資料を設置し，名称を「メディアルーム」に変更した。もともと個人学習エリアとして使われていた地下１階閲覧室は，用途がより伝わりやすいよう「自習室」へ名称変更するとともに，空気清浄機や大型テーブルの設置などにより，より快適に個人学習が行えるよう改善した。

５月には，１階閲覧スペースの壁面塗装やカーペット張替工事が完了した。入退館ゲート前に設置されていた書架は，学生をメインターゲットとした資料群である教科書コーナーや国試・研修コーナーとともにマナビバに移設した。

図２　eラーニングルーム

図３　マナビバおよびマナビバブース

８月の夏季休館期間中には新しい什器が設置され，休館明けから一新した「マナビバ」が利用可能となった。予約可能な半個室スペースである「マナビバブース」が２区画設置され，かつてレファレン

ス書架が大きく陣取っていたスペースには学習の合間にリラックスできる空間となるよう，大きなテーブルやラウンジチェアなどを設置した。このスペースはカフェのような雰囲気を目指し「マナビバラウンジ」と名付けた。

図４　マナビバラウンジ

入退館ゲートの正面は，当館の新着情報をコンパクトに集約して提供できるコーナーとし，新着図書や新着雑誌，OPAC専用端末などを設置した。利用者層を臨床医・研究者と位置付けた「くつろぎ」には，診療ガイドラインコーナーを移設したほか，新たに研究支援コーナーを設置し，研究や論文執筆に役立つ資料群の展示を開始した。

図５　入退館ゲート正面

５　館内サインの見直し

当プロジェクトでは設備や資料配置の見直しとともに，館内サインの見直しも行った。当館は決して広い図書館ではないが，地下フロアへ続く階段に扉が設置されているせいか，地下フロアの存在が利用者にあまり認識されておらず，学習環境アンケートからも利用度が低い状況となっていることが見えていた。そこで，誘導掲示の視認性を高めるため，大きなフォントや矢印を用いた目立つデザインにし，サインスタンドで立体的に掲示することで視界に入りやすくなるよう工夫した。また，歴史ある当館の雰囲気にマッチするよう茶色をベースカラーとしたデザインで館内のサイン類を統一した。この館内サインの一新により，館内全体が落ち着いた雰囲気でありながらも，必要な情報が利用者に届きやすい環境を整えることができた。

図６　地下フロアへ誘導する館内サイン

６　館内飲食ポリシー緩和の検討

学習がより捗り，長時間滞在したいと感じる学習場所とはどのような場所かと考えた時に，飲食可能か否かという条件は大きな要素の一つになるのではないだろうか。当館では，これまで全エリアにおいて，密閉できる蓋つき容器に入った飲料のみ持ち込み可としてきた。しかし学習環境アンケートでは，学習が捗る場所の条件に，食物やコーヒータンブラー等の密閉できない容器に入った飲料の持ち込みも可であることを挙げている学生は多く，ニーズの高さが窺われた。近年は利用者ニーズに応えることや長時間滞在の実現などを目的として，館内に飲食可能エリアを設置している図書館も多い[4)]ことから，当館でも館内飲食について検討を進めることとなった。

主な課題としては施設の汚れやゴミ，臭い，害虫

問題といった館内衛生面，所蔵資料への影響，これらに伴うスタッフの負担増などが考えられた。また，同キャンパスにある慶應義塾大学病院の建物内では感染症対策として引き続き黙食やマスク着用が徹底されている状況だったので，キャンパス全体の感染症対策と照らし合わせて問題がないかを確認する必要があった。国内の他大学図書館で館内飲食を可としているところでは，仕切られた部屋をイートインスペースとして提供している事例が多く見られたが，当館には扉などで仕切られ飲食に適した部屋がないため，特に衛生面での不安や，どの程度の飲食を許容すべきなのかという迷いもあった。

そのような折，信濃町メディアセンター協議会に医学部の学生代表２名が委員として加わることになった。館内飲食について学生の立場からの意見を得るべく，早速委員に委嘱された２名との懇談の機会を設けた。医学部生の日頃の学習の様子や学習場所に求める機能をヒアリングしていく中で，やはり飲食可能な学習場所には魅力を感じるという意見が挙がった。ただし，学習中はグミやキャンディのような菓子類が摂取可能であれば十分であり，むしろパン・おにぎり・お弁当のような食事の持ち込みは，学習場所としての雰囲気が損なわれてしまう恐れもあるため認めないほうがよいのではないかという意見も出た。

こういった学生の意見も参考にしながら更に検討を重ね，当館では８月16日から2024年度末までの約７カ月間，館内飲食ポリシーの緩和を試行することとした。試行内容は，１階マナビバエリアに限り，臭いが出ず手が汚れない菓子類（グミ，キャンディ，シリアルバー等）および蓋つきの容器に入った飲料（コーヒータンブラー等）の持込と飲食を許可するものである。なお，マナビバ内のPCコーナー周辺およびマナビバ以外の館内全エリアは，密閉できる容器に入った飲料のみ可とする既存の運用を継続することとした。試行中には「館内飲食ポリシーに関するアンケート」を実施し利用者の声を集めるとともに，実際の利用の様子を観察して，今後の運用の参考としていきたいと考えている。

7　今後の課題

本稿執筆時点ではまだ当プロジェクトの結果を評価することはできないが，現時点で今後の課題と考えている点をいくつか記しておきたい。

設備に関しては，くつろぎの什器見直しが課題として残っているので，次年度以降に進められるよう検討したい。マナビバは，アクティブエリアとして２月より提供開始しているにも関わらず，いまだ個人での利用が多く，グループワークをしている様子はあまり見られない。８月の新什器設置後の様子を注視するとともに，教員や学生を巻き込んでマナビバでの学習活動の活性化に繋がる働きかけもしていきたい。何よりもまず，当プロジェクトでメインターゲットとしてきた学生達に，当館の新しい学習環境を知ってもらうことが必要である。様々なチャネルを通じて学生にアプローチし，学習場所として根付かせていきたい。

当プロジェクトは複数年かけて行う計画としており，引き続き学生の学びを最大限にサポートできる学習環境を構築していく予定である。また当然ながら，利用者の求める学習環境は，今後もずっと時代に応じて変化していく。魅力ある学習環境を提供し続けるべく，これからも利用者の行動を観察し，利用者の声に真摯に耳を傾ける姿勢であり続ける必要があるだろう。

8　おわりに

当プロジェクトに取り組むなかで筆者が感じたのは，多様なステークホルダーとのコミュニケーションの大切さである。当プロジェクトの遂行にあたっては，信濃町キャンパス事務長をはじめ，管財課，学生課，情報センター，調達会計課，経理課等，様々な事務部門との連携が欠かせなかった。慶應義塾医療環境整備資金から予算を獲得するにあたっては多くの部門との連携や調整を要したが，最終的には医学部執行部から当プロジェクトについて理解を得ることができた。利用者との連携という点では，レファレンスサービスを起点に生まれた教員との繋がりや，信濃町メディアセンター協議会委員となった学生との繋がりを活かして，より詳細なニーズをヒアリングすることができた。利用者との繋がりを大切にすれば，今回のように利用者視点の良質なフィードバックが得られるだけでなく，口コミ等を通じた広報活動にも発展することが期待できるだろう。そして何より，わずか１年足らずで当プロジェクトを大きく進めることができたのは，当館スタッフが一

丸となり，諸々の制約を創意工夫で乗り越えようと奮闘してきたからだと思う。世界に羽ばたく医療人材育成のために，信濃町キャンパスで学ぶ学生の学習環境をもっと向上させたいという各々の思いが，コミュニケーションを通じて当プロジェクトに結びついたのだと感じている。これらの繋がりを今後も大事にし，これからも魅力ある学習環境，資料，サービスを提供し続けていきたい。

参考文献

1）園原麻里，西條智架，三谷三恵子．慶應義塾大学信濃町メディアセンターにおけるスタディライフ調査報告：学生の学習実態に基づいたサービス改善の試み．医学図書館．2013，vol. 60，no. 4，p. 445-458.

2）慶應義塾大学信濃町メディアセンター．“信濃町メディアセンター館内リニューアルプロジェクト”．https://libguides.lib.keio.ac.jp/snm_renewal2023.

3）慶應義塾大学医学部・医学研究科．“医療環境整備・医療人材育成へのご支援のお願い”．https://www.med.keio.ac.jp/giving/campus.html.

4）木下遼香，岡松道雄，宋俊煥．大学図書館におけるラーニングコモンズ及び飲食可能空間の整備実態と配置特性．日本建築学会技術報告集．2022，vol. 28，no. 69, p. 816-821.

早慶和書電子化推進コンソーシアム活動報告：
2022～2023年度を中心に

中井（なかい）　亜子（あこ）
（メディアセンター本部）
藤本（ふじもと）　優子（ゆうこ）
（メディアセンター本部主任）

1　プロジェクトの背景と概要

2020年の新型コロナウイルス感染症の流行により，従来の図書館の来館サービスや蔵書への物理的なアクセスが制限されたことをきっかけに，日本の大学図書館における電子書籍の購入が増え，特に和書の電子書籍の購入費総額は2019年度の約７億８千万円と2020年度の約17億２千万円を比較すると２倍以上になった[1)]。もちろん慶應義塾大学（以下「慶應」とする）も例外ではなく，来館できない利用者のために積極的に電子書籍を購入し，利用件数も大幅に増加した[2)]。このように電子書籍の購入と利用が本格化したことによって，和書において以下の課題を感じるようになった。

・大学図書館で購入可能なコンテンツが少ない
・紙の書籍よりも電子書籍の出版が遅い
・利用条件（同時アクセス数，ダウンロード可否）の制限が多い
・書誌データの質と提供スピードの向上が必要
・購読モデルの選択肢が少ない

こうした状況の中，慶應義塾大学メディアセンターは早稲田大学図書館とともに，2021年５月に「早慶和書電子化推進コンソーシアム」（以下「早慶コンソーシアム」とする）[3)]を立ち上げた。両大学図書館は2019年９月から図書館システムの共同運用を開始しており，同じシステムを導入しただけでなく，紙の資料の目録作成を協働で行い書誌データを共有し，館員の知識共有や人的交流を進めている[4)]。早慶コンソーシアムはこのスケールメリットを活かした電子資料契約における取り組みである。

まず，和書の電子書籍プラットフォームを提供する複数の書店と協議し，2022年４月に紀伊國屋書店をパートナーとすることに決定した。その後，紀伊國屋書店を通して出版社との交渉を重ね，2022年10月から１年半の期間限定で実証実験を開始した。実験では，早慶コンソーシアムの活動趣旨に賛同した国内出版社５社（岩波書店，講談社，光文社，裳華房，日本評論社）から有償で提供された約1,200点のコンテンツ（表１）を，学術和書電子図書館サービス

表１　提供されたコンテンツ

出版社	購読モデル	コンテンツの内容	コンテンツ数（2024年３月末時点）	同時アクセス数	特　徴
岩波書店	サブスクリプション（年間購読モデル）	早慶の所蔵冊子の貸出数が多い文庫・新書類	100	3	早慶が必要なコンテンツのみ選定。これまで図書館向けに提供されていなかったコンテンツも含まれる。
講談社	サブスクリプション（年間購読モデル）	早慶の所蔵冊子の貸出数が多いコンテンツ	181	無制限	初めてのKinoDenへの電子書籍提供。同時アクセス無制限のコンテンツはKinoDenで初めて。
光文社	サブスクリプション（年間購読モデル）	光文社新書・光文社古典新訳文庫	497	1	初めての図書館向け電子書籍提供。契約期間中の新書新刊が，冊子とほぼ同時に提供された。
裳華房	EBAモデル[7)]	新刊も含めた電子書籍全コンテンツ	398	1	国内出版社として初めてEBAモデルを提供。年度ごとに契約金額に応じたコンテンツの買い切りが可能。
日本評論社	サブスクリプション（年間購読モデル）	早慶の所蔵冊子の貸出数が多いタイトルのほか，教科書等の売れ筋，書評掲載など出版社選定のコンテンツ	100	1	学術書サブスクリプションモデル

KinoDen[5]にて慶應義塾大学および早稲田大学（以下「早慶」とする）の所属者が利用できるようにした。その利用状況や利用者からの意見を各出版社に直接伝えることによって，和書電子書籍の課題を大学図書館と出版社の双方にとってプラスとなる形で解決することを目指している。

なお，2022年10月20日には早慶と紀伊國屋書店で同時にプレスリリースを行った[6]。早慶の広報室の協力も得ながら進め，早稲田大学広報室の助言のもとデザイナーに作成を依頼したキービジュアルや概念図を使用した（図１，図２）。プレスリリースの反響は大きく，取材や会議での事例報告，原稿執筆などの依頼を受けた。

図１　キービジュアル

２　早慶コンソーシアムの取り組み

（1）電子書籍の提供

電子書籍は，早慶で使用している図書館システムAlmaに書誌データを登録することで，利用者が慶應のKOSMOSならびに早稲田大学（以下「早稲田」とする）のWINEで検索できるようになる。通常，電子書籍の書誌データは，AlmaのCentral KnowledgeBase（以下「CKB」とする）を利用している。CKBには，出版社などのベンダーが提供した書誌やリンクの情報等が含まれており，Almaを提供しているEx Libris社が常時更新，管理している。なお，電子資料の提供と管理の方法については，別途詳細な報告があるのでそちらを参照されたい[4]。

この度提供されたコンテンツは，早慶に限定して初めて図書館向けに提供されるものも多く，CKBに搭載されていないものが存在した。そのため，CKBに書誌データがあるコンテンツについてはそちらを利用し，ないものについては紀伊國屋書店からCATP形式のMARCデータをMARC21形式にコンバートしたものを提供してもらい，それをAlmaに登録することとした。KinoDenのMARCデータを登録するのは初めてだったため，システム担当と目録担当によるサンプルデータの検証を行い，挙がってきた修正点や改善点を時間的・費用的に可能な範囲で対応した上で，岩波書店，講談社，光文社

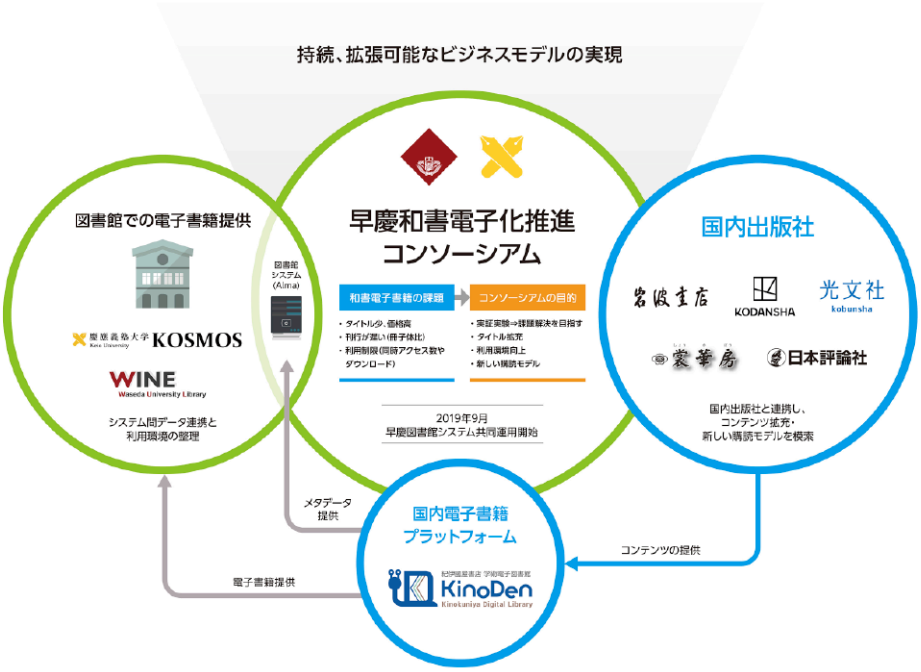


図２　概念図

の全件と裳華房と日本評論社の一部のMARCデータを早慶それぞれに用意してもらった。

Almaへの登録は，紀伊國屋書店から提供されたMARCデータを早慶の電子資源担当が受け取り，CKBに書誌データがないことを確認した上で，慶應のシステム担当が慶應のAlmaにMARCデータを登録し，次に早稲田のシステム担当が早稲田のAlmaに登録を行い，早慶で書誌等のデータを共有できる領域であるNetwork Zoneにおいて同一書誌に所蔵がついたかを確認するという手順で行われた。また，実験期間中のコンテンツが固定されている場合には一度登録すればよいが，新刊の追加提供があった光文社と裳華房については，毎月登録作業が発生することになった。当初は，電子資料におけるAlmaの活用の一つとして，早慶それぞれでMARCデータの登録作業を行うのではなく，先にNetwork Zoneへ直接MARCデータを登録することで書誌を共有する方法を考えたが，システム担当による検証の結果，そのような方式はとれないことがわかり断念した。どちらの登録方法にせよ，早慶で書誌を共有できることに変わりはないが，作業の効率化は叶わなかった。

コンテンツについては，早慶コンソーシアムの特設Webサイトに出版社ごとの一覧を作成し，データベースナビでもリストの提供を行っていたが，KOSMOSに登録されていないと利用者の図書館資料の探索行動から外れてしまう。視認性を高めるためには，書誌データの提供スピードは非常に重要であり，コンテンツの利用開始と同時にKOSMOSで検索できる状態となっていることが望ましい。加えて，CKBの書誌データは情報が足りないものや文字化けしているものがあるため，書誌データの質についても改善が必要である。早慶コンソーシアムの取り組みを通して，ゆくゆくは日本語コンテンツの書誌データの改善につながることを期待したい。

(2) 利用統計の分析

実証実験でのコンテンツの利用状況は，毎月初めに前月分の利用統計をKinoDenの管理者画面から取得して出版社毎に分析を行った。

実験を開始した2022年10月からの慶應における利用統計を分析したところ，学期期間中は利用が増えて，長期休暇中は利用が落ち着くという様子が見られた。特に，同時アクセス１で学術書が提供された裳華房と日本評論社については，学期期間中にアクセスできなかった件数が多くなっていた。

また，コンテンツの利用割合は最終的に90%を超えており，講談社と日本評論社に関してはほぼ100%であった。これは図書館でよく利用されているものを提供してもらったことに起因すると考えている。

KinoDenではWebブラウザのほか，電子書籍アプリ「bREADER Cloud」からも電子書籍を閲覧でき，利用統計もWebブラウザとアプリそれぞれからの閲覧数を取得できる。アプリによる閲覧割合を出版社ごとに比較したところ，新書・文庫がメインの光文社はアプリによる利用が45%となっていたが，理工学系学術書がメインの裳華房はアプリによる利用は18%であった。そのほかの出版社については20%台であった。全体としてはWebブラウザからの利用が主流ではあるが，隙間時間にも読みやすい新書・文庫についてはアプリ利用も好まれる様子である。

(3) アンケート調査

大学図書館が提供する電子書籍の利用状況や利用方法，改善要望などを把握するために，電子書籍に関する利用者向けアンケートを実施した。2023年６月１日～30日の１ヵ月間，早慶の学生・教職員を対象にWebフォームによるオンライン調査を行った。３分間という短い時間で回答できるよう質問数を15問に調整したことも功を奏し，合計1,517件（早稲田761件，慶應756件）の回答を得ることができた。内訳は学生が75%，教職員が25%であった。

調査結果は両大学で全体的に同じ傾向となった。唯一，早慶で異なる傾向になった設問は，「大学図書館で提供してほしい電子書籍の分野」であり，これは学部構成の違いが影響していると考えられる。

以下に主な結果を３つ示す。まず，日常的な電子書籍（和書・洋書・漫画など全て）の利用状況は，使う人が約79%，まったく使わない人が21%であった。また身分別にみると，日常的に電子書籍を利用している人の割合は，教員・研究者や学年があがるほど高いことが明らかになった（図３）。

次に，大学図書館が提供する電子書籍を使わない理由としては，「存在を知らなかった」が45%で，次いで「読みたいタイトルがない」「使い方がわか

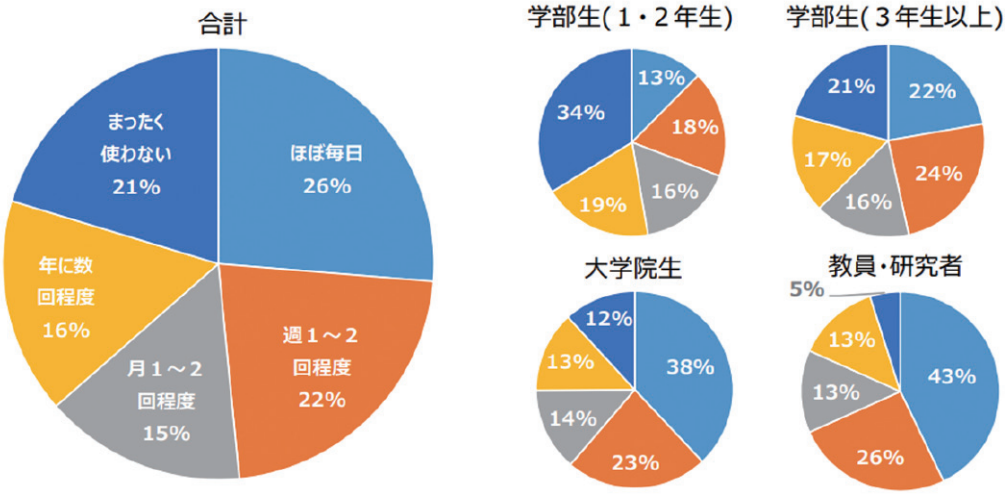


図３　日常的な電子書籍の利用状況

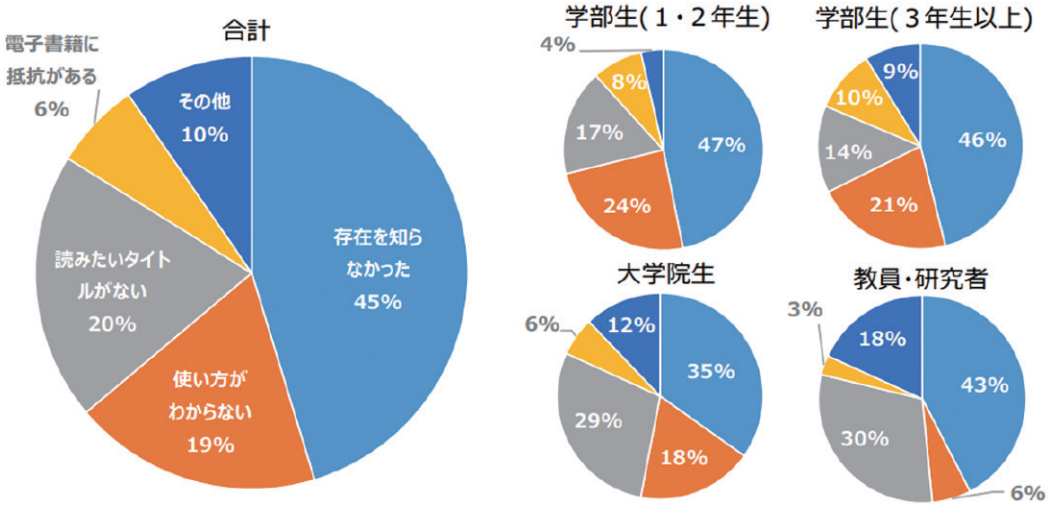


図４　大学図書館が提供する電子書籍を使わない理由

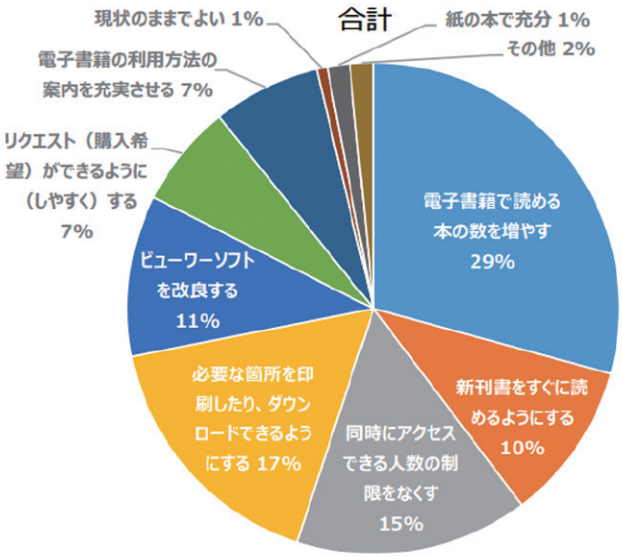


図５　大学図書館が提供する電子書籍の改善希望点

らない」となった。身分別にみると，教員・研究者は「読みたいタイトルがない」と回答する人の割合が高く，学部生・大学院生の学年が下がるほど「使い方がわからない」と回答する人の割合が高くなった（図４）。

最後に，大学図書館が提供する電子書籍の改善希望として最も多かったのは「電子書籍で読める本の数を増やす」で29%であった。次いで，「必要な箇所を印刷したり，ダウンロードできるようにする」，「同時にアクセスできる人数の制限をなくす」，「ビューワーソフトを改良する」，「新刊書をすぐに読めるようにする」が続く結果となった（図５）。

その他の設問についての結果は，早慶コンソーシアムのWebサイトにて概要を公開しているため，そちらを参照されたい[8)]。

(4) インタビュー調査

アンケート調査の結果を受けてさらに確認したい内容を利用者に直接聞き，課題を具体的に明らかにするために，利用者へのインタビューを行った。アンケートにて「インタビュー調査可」と回答した利用者に対して改めて協力依頼を行ったところ，慶應４名（学部生３名，大学院生１名），早稲田４名（大学院生４名）の調査協力者を得ることができた。いずれも，図書館を非常によく使っている利用者であった。慶應会場は2023年11月20日に，早稲田会場は2023年11月29日に，それぞれ４名ずつのグループインタビューを行った。

インタビュー調査の結果，主に明らかになったことは下記の通りである。

- 電子書籍は図書館へ行けない時（図書館の閉館時，教室や自宅など図書館から離れた場所にいる時）に利用することが多い。
- 同じ資料でも紙と電子で使い方が異なるため，両方が必要である。
- 電子書籍を引用する時でも，引用情報は紙の書籍を参照する。
- 同時アクセス数は意識しており，同時アクセス数１だと気を遣ったり，超過を心配したりすることもある。
- 新刊がすぐに追加されるのは魅力的である。
- 図書館の検索システムでの利用手順の簡素化，表示方法の改善が必要である。
- プラットフォームの利便性向上への要望（しおり機能，検索機能等）が強い。

(5) 出版社との対話

国内出版社５社とは，早慶コンソーシアムへの提供コンテンツや購読モデルなどについて，紀伊國屋書店を交えて何度も話し合いを行った。実証実験開始後も，その利用状況を定期的にフィードバックしたり，一般商品化に向けての価格や条件等について図書館側の意見を伝えたりして，対話を継続した。

その中で明らかになったのは，「個人向けのみに提供されて，図書館向けには提供されてこなかった電子書籍」が多数存在することであった。その理由としては，まず，紙の書籍の売り上げ減少への懸念が根強いことがある。出版社内で意見が分かれている場合もあり，電子化を進める部署としては電子書籍の提供を積極的に行いたいが，編集部ではその不安を払拭できていないという事例もあった。次に，著者の権利処理の問題や，印税処理の複雑化など，電子書籍を図書館に提供するためのコストが増加することが挙げられる。また，出版社の人手不足や著者の意向が障壁となるケースもある。

しかし，早慶コンソーシアムに参加したことによって，普段は知ることのできない電子書籍の利用状況や利用者の意見，大学図書館の事情などを知ることができて，社内の電子化に対する風向きが変わったという出版社の話も聞くことができた。

(6) イベント・展示

学内での電子書籍の利用促進を行うためにイベントや展示も行った。

2023年６月に，『光文社古典新訳文庫はこうやってつくってます』という光文社古典新訳文庫の編集長と若手編集部員によるトークイベントを開催した。これは元々，光文社より「学生と直接関わる機会を設けるためにイベントを開催したい」と強い希望があり実現したものであった。早稲田では６月20日に中央図書館で開催し，慶應では６月29日に日吉メディアセンターで図書館フレンズの協力を得て開催した。慶應会場では，光文社古典新訳文庫のファンや出版社に興味のある学生など38名が参加し，質疑応答も活発に行われて盛会に終わった。

展示についても，早慶の各キャンパスで複数回実

施した。慶應では各キャンパスのメディアセンターの企画として，裳華房に関する展示を理工学メディアセンター（2023年６月１日～30日）で，光文社古典新訳文庫に関する展示を日吉メディアセンター（2023年６月２日～７月１日）および湘南藤沢メディアセンター（2023年６月９日～23日）で，早慶コンソーシアム全体に関する展示を日吉メディアセンター（2023年７月３日～29日）で行った（図６）。展示の準備にあたっては出版社の協力も得ることができ，各出版社のロゴや説明文，書籍販売用のポップなどを提供していただいた。

慶應でのイベントおよび展示は2023年６月から７月にかけて実施され，その時期の早慶コンソーシアムで提供している電子書籍の利用数は伸びており，利用促進に直接結びついたと考えられる。

図６　日吉メディアセンターでの展示風景

(7) 成果報告会

2023年度までの活動内容と成果を取りまとめて出版社向けに報告する「早慶和書電子化推進コンソーシアム成果報告会」を，2024年６月11日に早稲田大学図書館にて開催した。プログラムは，図書館からの報告，出版社（光文社，裳華房）からの報告，学生・教員・出版社によるパネルディスカッション，紀伊國屋書店からの報告，という構成で，報告会終了後には軽い飲食をしながらの交流会も開催した。

当日は，出版社32社（43名），大学図書館６大学（７名）の計50名の参加があった。交流会も自由参加にも関わらず参加者が多く，活発な対話が行われていた。参加者アンケートでも回答者の90%以上が「満足」と回答しており，「実際に利用する学生の意見は貴重」「出版社の率直な意見を聞けたのがよかった」といった意見が特に多く，また，サブスクリプションやEBA[7]の販売モデルに興味を示す出版社がいくつかみられた。

3　これからの活動

(1) 2024年度について

当初は2023年度までで本プロジェクトは終了する予定であったが，新たに早慶コンソーシアムへの参画を希望する出版社が現れたため，2024年度も活動を継続している。2024年４月からは新たに，国内出版社３社（アルク，中央公論新社，PHP研究所）の賛同を得て，継続となる岩波書店を含めた４社から約1,200点のコンテンツ提供を受けて引き続き実証実験を行っており，各出版社との対話も重ねていく予定である。電子書籍の利用促進につながるように，各キャンパスのメディアセンターの協力のもとイベントや展示も継続して実施したい。

なお，2023年度までの早慶コンソーシアムに参画した国内出版社５社のうち，講談社については2024年度より一般商品化され，早慶以外の大学でも購入可能となった[9]。光文社についても光文社古典新訳文庫の一般商品化を視野に入れているところであり，早慶では先んじて2024年度もサブスクリプション契約を継続している。

また，2023年度のアンケート調査やインタビュー調査で明らかになった電子書籍提供時の問題点を改善できるように努めていく。特に，インタビュー調査ではKOSMOSから電子書籍を利用する際にどこをクリックすれば全文が閲覧できるのかわかりにくいという意見が多く出たため，貴重な利用者の声を活かすべく，KOSMOSの表示方法の改善に取り組んでいる。

(2) 今後の展望

2023年度までの活動を通して，大学図書館の利用者からの要望が明らかになるとともに，一方で出版社側の課題も把握することができた。早慶コンソーシアムでは当初の目的の通り，双方がプラスとなる形を目指す必要があると考えている。

また，和書電子書籍の図書館向けの提供が進まない背景として，図書館と出版社ともに紙の書籍が基準になっているように感じられる。例えば価格について，売る側は紙の書籍１冊あたりの価格が基準になってしまう現状があり，それに対して買う側は買

い切りではなくサブスクリプション契約であるなら紙の書籍１冊よりも安価にしてもらいたいと考える。また，利用方法についても，図書館の利用者は著作権法第31条等で定められているような図書館の所蔵資料を複写して利用する紙の書籍の使い方に慣れているが，現在の和書電子書籍はダウンロード制限が厳しいものが多いため同じような使い方は難しい状況にある。和書の電子書籍を発展させるためには，電子書籍の合理的な販売方法や利用方法を，出版社と図書館が一緒に考えていかなければならない。

早慶コンソーシアムをきっかけに多くの国内出版社で図書館への電子書籍提供に関心が高まり，日本全体の和書電子化推進につながることを目標に，今後も活動を続けていきたい。

注・参考文献

1）文部科学省．“学術情報基盤実態調査（旧大学図書館実態調査）”．文部科学省．
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/1266792.htm.

2）飯田尚子，藤本優子．コロナ禍における電子資料の提供と課題．MediaNet．2021，no. 28，p. 26-29.

3）慶應義塾大学メディアセンター．“本コンソーシアムについて”．早慶和書電子化推進コンソーシアム．
https://libguides.lib.keio.ac.jp/sokei-ebook.

4）慶應義塾大学メディアセンター．特集 早慶図書館システム共同運用．MediaNet．2020，no. 27，p. 4-39.

5）KinoDen（キノデン）は，紀伊國屋書店が提供する学術和書電子図書館サービス。2018年１月にリリースし，2024年５月時点で，搭載コンテンツは９万点，導入機関は国内外で500機関を超えている。
株式会社紀伊國屋書店．“トップページ”．学術電子図書館KinoDen.
https://kinoden.kinokuniya.co.jp/product/index.html.

6）学校法人慶應義塾．“大学図書館向けのコンテンツ拡充と電子書籍の新たなビジネスモデル構築を目指す「早慶和書電子化推進コンソーシアム」発足”．プレスリリース．
https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2022/10/20/28-132760/.

7）EBA（Evidence Based Acquisition）モデルとは，電子出版されている全コンテンツが一定期間提供され，期間終了後に利用統計等を参考に契約金額分のコンテンツを選定して恒久アクセス権を得られるという購読モデル。

8）慶應義塾大学メディアセンター．“電子書籍についてのアンケート 調査結果”．早慶和書電子化推進コンソーシアム．
https://libguides.lib.keio.ac.jp/sokei-ebook/survey.

9）株式会社紀伊國屋書店．“KinoDen 大学図書館向けに講談社電子書籍をサブスクリプションモデルで販売開始”．紀伊國屋書店．
https://corp.kinokuniya.co.jp/press-20140419/.

メディアセンター全体研修の20年

河野江津子（こうのえつこ）
（理工学メディアセンター事務長）

1　はじめに

慶應義塾大学メディアセンターでは，全キャンパスのメディアセンター職員を主な対象として，年に１度全体研修の場を設けている。2003年11月の第１回から第10回まではメディアセンター研究発表会，第11回からはメディアセンター研修会と名前を変え，2023年11月に第20回を迎えることができた。

この節目に，会を企画・運営する集合研修企画運営ワーキンググループの主査として，20年の変化を振り返りつつ，全体研修の意義を考えてみたい。

なお，2002年度以前の研修の歴史については，『慶應義塾図書館史Ⅱ』[1)]の各論「第十章　図書館職員の研修」をご参照いただきたい。

2　メディアセンター研究発表会の始まり

大学のなかにあって，図書館員の専門性はよく議論の対象となる。慶應のメディアセンター職員として働くために司書資格は必須ではないが，図書館・情報学を学んだ背景をもとに配属される割合は高い。このため専門職と見られることも多いが，2003年，当時の天野善雄メディアセンター本部事務長は「自己啓発能力の高さや研究的志向の強さなど，専門職として求められる一般的要件をほとんどの職員は満たしていない」との厳しい認識を持っていた。このため，「実態が伴っていない状況を刺激し，他部門から見てメディアセンターの専門性が認められるような活動を行い，発表の場を設けることが大切」との趣意をもって，全塾研修委員会（以下「研修委員会」とする）の発足とメディアセンター研究発表会（以下「研究発表会」とする）の定期開催を決定した。これが継続性を持って行われている全体研修の始まりである。

当時は，財政上の理由から大学執行部の方針で人事部主催のものを含めた研修の実施が縮小されていた時期であった。このため，研修色を抑える意図で研究発表会という名称が考案された。

研修委員会は，研究発表会のテーマの設定，発表者の募集，会の運営，事後評価など，企画・立案段階から実施までの一連の活動を担うこととなった。本部事務長を主査とし，メディアセンター本部と各メディアセンターから６名の委員が推薦された（当時はまだ薬学メディアセンターは存在せず，2024年現在も薬学は職員が少ないため除いている）。

研究発表会は年１回開催し，業務と関連する研究・事例報告や全キャンパスで共通する各種業務の調整を行う常設の委員会報告などを行うことが決まった。メディアセンター職員が人前で発表する機会を作り，年１回は集まって直接顔を合わせようという意図が込められていたが，参加はメディアセンター以外の教職員にも開かれ，職員用ホームページ（Keio Information Farm）にも広報を掲載した。

3　2003年から2013年まで

研究発表会は，当初は2004年の開催を目指していたが，大きな予算も不要なことから2003年11月に第１回の開催が実現した。11月となったのは三田メディアセンターが休館となる三田祭（学園祭）のときが適切との判断で，この期間設定は例外的に３月開催となった2009年と2011年を除き，2023年まで継承されている。初回の会場は三田キャンパスの北館大会議室だったが，その後は年によって北館ホール，東館G-SEC Labなどと変遷している。

第１回のプログラムは各委員会の報告と公募した研究発表５件で，2007年の第５回まではほぼこの形をベースに続いた。

研究発表では，統計データを元にした蔵書やサービスの評価，情報リテラシー教育や学生の利用マナー，図書館広報についての考察など，若手から中堅の多くの職員が，単なる現状報告に留まらず業務から着想した課題や調査結果についての発表を行った。当初の想定通り，職員が調査・研究を行い，プレゼンテーションの経験値を上げるという目的が果たされていたと言える。

第６回は，慶應義塾創立150年記念式典が2008年

11月に挙行されるため，時期をずらして2009年３月の開催となった。この回では次期図書館システムの導入についての説明を盛り込んだため，委員会報告は無しとなった。2009年11月は次期図書館システム説明会を実施するために研究発表会はスキップされ，第７回は2011年３月へ繰り延べとなった。

第７回からは開催スタイルが徐々に変化し，常設委員会の年次報告に時間を割くのではなく，その時々に特別な役割を担って活動しているプロジェクトからの報告に限ることにした。個人発表は自発的な応募者が減り，特定の職員に偏る傾向が見られたため，推薦も受け付けるようなった。

メディアセンターの中期計画策定や人材育成をテーマとしたパネルディスカッションの企画は目新しい試みとなった。一方，あるテーマについてグループディスカッションを行い，グループごとに発表，講評を行う方式を検討したこともあったが，これは時間の制約上難しく，実現には至らなかった。

研究発表会の10年で特筆すべきは，慶應が2002年10月に加盟したRLG（Research Libraries Group）から，ジェームズ・ミハルコ会長に研究図書館のあり方について講演や講評で複数回登壇いただいたことである。定期的に来訪して研修の場に参加される様子から，アジアの加盟館としての慶應の活動を尊重してくれており，慶應側も国際的な団体に加盟しているという実感を得られる良い交流となっていた。なお，RLGは2006年にOCLCに統合され，ミハルコ氏はOCLC副社長となった。

4　運営会議体の変更

この間，会を運営していた研修委員会は，2009年８月に研究発表会運営ワーキンググループと名称を変えている。「研修」は不可との人事部の方針に合わせて変更したとされている。その後，2011年に当時の宮木さえみメディアセンター本部事務長が「大学全体の研修制度が徐々に復活し，部門別研修なども再開され始めたため，もとの名称である研修委員会に戻したい」との提案をメディアセンター事務長会議にて行った。このときは，名称は維持しつつも既存の研究発表会にとらわれず，別の形の集合研修の可能性も含めて企画・立案，運営を行う組織とすること，主査は従来通り本部事務長とするが副主査を任命し，実質的には副主査が主導的に運営指揮に携わることが決まった。これにより，研究発表会の実施スタイルの変化が起こったと言える。

2014年になると，改めて名称と運営方法についての見直しが提議された。その結果，2014年７月より運営会議体は集合研修企画運営ワーキンググループ（以下「WG」とする）と変更され，本部事務長が職責として担っていた主査は，新WGでは管理職または主務の中から任命されることになった。名称の変更理由は，WGの任務を明確にし，「企画」を含めてさらに積極的に活動するためとされた。

5　メディアセンター研修会の10年

WG名と同時に会の名称もメディアセンター研究発表会からメディアセンター研修会（以下「研修会」とする）と変更された。

名称が変わっても回次は研究発表会から引き継ぎ，2014年に新たな形で開催された研修会は第11回となった。この回は，新WGが発足してから短い期間で準備する必要があり，座学形式となった。「慶應義塾の将来と図書館の役割－研究者支援を考える－」をテーマとし，３本の講演とミハルコ氏の総評から成るプログラムであった（ちなみに，ミハルコ氏は翌年度にOCLCを引退され，第12回への参加が最後となった）。

研修会の形式は座学と限定された訳ではないが，2015年の回の検討を行う際には，「キャンパスごとの活動報告より全体の方向性を示せるような内容」とし，また「図書館だけでなく慶應全体から見ても取り組む意義のある内容」とするのが良いとの意見があり，これ以降，統一テーマのもとに学内外の講師による講演や事例報告を３，４本盛り込むという講演会スタイルが定着していった。

今後の方向性への知見が得られるようなテーマ設定ということで，研修会となってからは年ごとに図書館や大学業界で大きな話題となっているトピックを扱うことが増えた。過去のテーマを遡ってみることで，当時のトレンドを垣間見ることができる。例えば，2018年のテーマのキーワードはダイバーシティ，コロナ禍の2020年はオンライン授業，2023年はAIという具合であった。

研修実施にかかる経費については，慶應の研修縮小傾向が緩和されてきたことから2015年度に人事部所管の部門・ブロック別研修へ応募し，補助を受け

た。ただし，応募のためには準備期間を前倒ししなければならないなど不自由な点もあり，翌年度以降，経費はメディアセンターの経常費で賄うことになった。

6　開催形式の進化

研修会当日は三田キャンパス以外では開館しているメディアセンターもあり，現地参加が叶わない職員もいる。このため，三田メディアセンターマルチメディア担当の協力を得て内容をビデオ録画し，記録媒体を後日希望者へ貸し出すことを継続的に行っていた。第４回と第５回には遠隔会議システムを使用し，三田以外のキャンパスへライブ配信したこともあったが，システム担当者の負担が大きいこともあり，基本的には録画で対応してきた。2017年まではDVDでの提供だったが，2018年からは業務用に導入されたクラウドサービスBOXにも保存し，学内認証を介して期間限定で視聴できる環境も整えた。

ところが，新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）の流行下で「集合」することが禁じられたため，2020年は急遽Zoomウェビナーによるオンライン開催となった。社会情勢に合わせて強制的に変更せざるを得なかったが，これにより撮影機材の設置が不要となり，Zoomの録画機能によって簡単に記録を残せることになった。また，遠隔地からも業務の合間に参加できることとなり，利便性が高まった。

オンラインのみの開催は２年間続き，2022年からは三田・北館ホールでの対面参加とZoomウェビナーのハイフレックス開催とした。講師も会場参加と遠隔地から接続するケースがあり，参加方法に関わらず講師の姿，講演資料をともに見やすくするためには，PCと会場のカメラの画角の調整，PC画面構成の調整，マイクの切り替えなど，入念なリハーサルが必要となる。機器の設置はメディアセンター本部システム担当の協力を得つつ，Zoomの操作に当たっては，コロナ禍でユーザ向けの各種オンラインセミナーを実施し経験を積んだレファレンス担当の委員のスキルが大いに役立った。

また，聴覚に障害のある職員もおり，その情報保障も重要な課題であった。2017年に初めてGoogleの音声認識による文字起こしを行い，翌年には慶應義塾協生環境推進室の協力を得て機関契約している文字変換アプリUDトークを使用した。しかし，単純な機械翻訳では精度に問題が多く，2019年，2020年は外部業者と契約し，文字変換のリアルタイム修正を行った。2022年からはアプリを間に挟む手間を省くため人力で同時文字通訳をしてくれる業者へ外注し，対象の参加者からは好評を得ている。外注は当初は協生環境推進室の予算を使わせてもらっていたが，学内での情報保障の需要が増えたため，2023年度からはメディアセンターの経常費から支出することになった。経費はかかるが，今後も必要のある限り合理的配慮の範囲としてこのような情報保障を行う方針である。

7　懇親会での情報交換と交歓

研究発表会が始まった当初の目的の一つとして，「全キャンパスのメディアセンター職員が年１回は集まる」ことが掲げられていた。これは単に同じ講演会に参加すれば良いという訳ではなく，普段はメールや電話でしかやり取りしない部門内の職員同士が顔を合わせて近況を確かめあい，意見交換をする場が重要と考えられたためである。このため，会のあとには懇親会が企画され，参加の動機付けの１つともなっていた。

当初はケータリング形式で三田メディアセンター内で行っていたが，スペース不足や委員の準備の負担もあり，2011年３月の第７回から外の会場で行うことになった。講師もお招きし，質問の続きや周辺テーマについての情報交換も行う場となるなど，単なる交歓ではない刺激を得られるものでもあった。

コロナ禍で残念ながら３年間は見送ったが，2023年から再開し，待ちわびた多くの職員の参加を得た。

8　海外研修報告会の実施

ここまで年１回の研修会について紹介してきたが，WGが企画・運営するのはこれだけではなく，もう１つの大きな柱として海外研修報告会（以下「報告会」とする）がある。職員が国外研修へ出かけるプログラムは多岐に渡るが，メディアセンター職員を海外の大学図書館や図書館関連機関，国際会議へ中・長期派遣する研修を主として，その成果を報告する会を2003年度から継続的に開催している。海外長期研修自体が始まったのは1965年のハワイ大学に遡り，80年～90年代はシカゴ大学，カリフォルニア大学のバークレー，ロサンゼルス，サンディエゴ校な

ど米国内で研修先を広げていった。2003年に初めてカナダのトロント大学への派遣が実施され，その報告会を研修委員会が主催した。同大へは計８名を送り，また先方からの来訪者にも報告会での発表をお願いした。その後，メディアセンター本部では新奇性も求めて派遣先を広げ，2010年代に英国のセインズベリー日本藝術研究所，米国のワシントン大学東アジア図書館との交流を開始した。セインズベリーは９名，ワシントン大学は３名の派遣者が報告会に登壇し，研修先での業務や見聞，訪問地域の図書館事情などを持ち帰り，共有した。

報告会は主に三田メディアセンターの研修室を主会場とし，遠隔会議システムで他キャンパスへ映像・音声を届け，また質疑応答では双方向のコミュニケーションを可能とする形式を取ってきた。しかし，研修会同様にコロナ禍にオンラインへ移行し，その後はZoomウェビナーでのオンライン配信のみを行っている。これにより，報告会場を三田に設置する必要もなくなり，参加者ほぼ全員が自席のPCから視聴するという形へと変化した。

９　メディアセンターでの全体研修の意義

大学の中にあって，図書館員は特に「研修」を重要視する職種ではないだろうか。日常業務を遂行しつつ，サービス向上のために国内・国外の図書館や出版界の動きに敏感にアンテナを張り，次々に登場する新しいシステムやテクノロジー，行政・法制上の変化にも追いついていかなければならない。このため，各種団体が主催するセミナーや講演会に参加することはポピュラーで，国公私立大学図書館協力委員会，私立大学図書館協会，国立情報学研究所，国立国会図書館など，様々な機関が提供するプログラムに慶應からも多くの参加者を派遣してきた。しかし，こういったプログラムは受講者数が限られるため選考があったり，遠隔地での開催時には費用がかかったりと，参加するのが狭き門の時代があった。

それがコロナ禍を経て対面形式の開催が減少し，オンラインやハイフレックス形式が増加するとともに，リアルタイムで参加できなかった人のため，オンデマンドで視聴できるよう動画や資料が後日公開されるのも当たり前となった。見逃したセミナーを自宅で受講するなど，受けられる研修の選択肢も時間も大幅に広がったのである。

しかし，数時間の研修動画を職場でじっくり視聴するのは難しく，休日をこれに当てるかは各人のワーク・ライフ・バランスの意識にもよる。業務の一環として全体研修を実施することで，担当や経験年数に関わらず誰もが均等な機会で参加でき，特定のトピックに対して全員が共通認識を持って取り組めるよう，知識の底上げを図ることができる。また，その場で職員同士や時には講師との交流が深まり，風通しが良くなれば，実践的な議論や活動へとつながるケースも出てくる。例えば，2017年の第14回は「学習・研究を支える図書館空間をデザインする」というテーマだったが，ちょうどレファレンスコーナーのリニューアルを検討中だった日吉メディアセンターでは，講師の１人だった岸本達也理工学部教授に改修計画へのアドバイスや設計・デザインのプロの紹介を依頼し，そのコラボレーションによって効果的な空間設計を実現させた。外部研修の選択肢が広がった今でも，部門内の全体研修はこういった点で組織や業務の活性化に役立つと考えている。受けて終わりではなく，次の何かにつながるステップとなれば企画するWGとしても幸いである。

もちろん，メディアセンター以外の部門にもそれぞれの専門性があり，社会や経済情勢の変化を受けて様々な事業や業務改革が実行されている。研修会に対しては，図書館という枠にとらわれず，大学組織の一員として必要な業務知識を身につけたいというメディアセンター内からの要望も多い。メディアセンター主催の研修会という位置付けの中でのバランスを考えながら，今後の企画・検討に活かしていきたい。

参考文献

１）慶應義塾図書館史Ⅱ編集委員会．慶應義塾図書館史Ⅱ．東京，慶應義塾大学メディアセンター．2023，viii，337，70p.

２）平吹佳世子．メディアセンター研究発表会について．MediaNet．2004，no. 11，p. 61.

３）中川和美．全塾研修委員会活動報告．MediaNet．2006，no. 13，p. 34.

４）長野裕恵．日吉図書館１階レファレンスコーナーの改装－空間デザインが図書館の利用に影響を与えた一例－．MediaNet．2019，no. 26，p. 38-41.

貴重書紹介

貴船の本地

石川（いしかわ）　透（とおる）
（文学部教授）

『貴船の本地』（請求記号：132X@214@3）絵巻は，現状三軸であるが，本来は上下二軸で制作された（図１）。中身を見ても分かりにくいが，本来の上巻末尾には，絵草紙屋小泉と思われる朱印が押してある（図２）。下巻末尾には，印記があったと思われる場所が消されている。このように，絵巻として不遇な作品でありながら，制作時の印記を有する重要な作品であることを解説したい。

本絵巻については，二十数年前に某所で閲覧の機会を得て，簡単な書誌的報告を「絵草紙屋小泉の印記」と題して行った[1)]。その論文にも記したが，この『貴船の本地』絵巻は，以前から慶應義塾図書館が所蔵している『ともなが』絵巻（請求記号：132X@56@2）と酷似しており，両者ともに絵草紙屋小泉の制作と考えられるのである。

『ともなが』については，天下の孤本として，古くからその翻刻は刊行されていたが，それらの書誌解題を見ても，押されている印記については，触れられていなかった。おそらくは，印記の一部の文字が難解で取り上げることができなかったのであろう（図３）。ただし，その絵巻としての豪華さは，慶應義塾図書館が所蔵する絵巻の中でも指折りの作品であったから，拙著『慶應義塾図書館蔵　図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会，2003年）に，全ての挿絵をカラーで掲載した。その図版や，慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションの画像[2)]を見れば，絵巻の特徴がよく分かる。

この『ともなが』と『貴船の本地』は，両者とも，本来上下二軸の絵巻物である。挿絵の数は，各巻八枚ずつであるということも共通するが，両者とも挿絵で各巻が終わるということも共通している。基本的に絵巻物は，ほとんどの作品が，詞書本文から始まり，終わりも本文で終わるものであるから，珍しい共通項となる。

その本文の文字は，明らかな同筆で，これらは，朝倉重賢の筆跡である。朝倉重賢については，拙著『奈良絵本・絵巻の生成』等に記したように，生没年等は明らかにできていないが，奈良絵本・絵巻の筆耕（本文の筆者）の一人で，最も数多くの絵巻の本文を書写した人物である[3)]。現在五点ほどの絵巻の末尾に，その署名が見られる。

本文が同筆というだけではなく，その挿絵についても，『ともなが』と『貴船の本地』は酷似している。両者ともに，いわゆる化け物が登場する作品であるが，その描き方もよく似ている。『貴船の本地』の方には，「土佐将監光起筆」の貼紙があるが，この著名な絵師の名前は，にわかには信じがたい。ともかくも，それぞれの最後の挿絵の左下に朱色の印記が存在しているのである。

その印記は，「小泉」「蔵宝蔵・七左衛門尉・安信」と書かれている。このうち，「蔵宝蔵」の文字の読みが難解で不明なのであるが，これは，個人を特定する見地からは，あまり重要ではない。おそらくは，「小泉七左衛門尉安信」という人物の印記なのである。残念ながら，検索して簡単に出てくる人物ではない。二十年ほど前までには，おそらく誰も取り上げたことのない人物であったのである。

だが，同じような絵巻末尾の印記については，別種の印記についての報告は存在していた。それは，「城殿」「城殿和泉掾　草紙屋　藤原尊重」の印記を有する絵巻が四点と，ほぼ同じ情報を箱に記した絵巻一点の報告であった。その後，箱書きの絵巻二点の報告が追加されたのだが，この二点は同じ内容を記したもので，これらは，「城殿和泉掾藤原尊重」という「草紙屋」を経営していた人物の印記と箱書きであったと考えられる。この人物も不明な点が多いのであるが，「城殿」という京都の店は，室町時代には扇屋を経営し，江戸時代中期には紙を扱う店の名前として記録に出てくる。このようなことから，扇を制作していた店が草紙屋として絵巻を制作していたことが考えられたのである。

実は，この「城殿」が制作した絵巻の多くを，その本文を朝倉重賢が執筆していたのである。ということは，朝倉重賢という筆耕は，「城殿」にも雇わ

れ，「小泉」にも雇われていたことになる。「城殿」と「小泉」の絵巻は，同じ本文の筆跡であっても，挿絵部分の描き方や全体的なスタイルがかなり異なっていることから，明らかに別の店である。おそらくは，同じような豪華絵巻を制作する店として，ライバル関係であったと思われるのであるが，本文については，同じ人物を雇っていたのである。

では，「城殿」にしろ，「小泉」にしろ，いつ頃に存在した絵草紙屋であったのであろうか。朝倉重賢自身の生没年は不明であるが，朝倉重賢の本文筆跡を持つ絵巻の挿絵に，海北友雪（1598～1677年）の落款を有するものがあったり，朝倉重賢の執筆した絵巻が，浅井了意（？～1691年）が筆耕を担当した絵巻とよく似ていたりすること等から，江戸時代前期，十七世紀半ばから後半にかけて活躍したことが分かっている。とうぜん，「城殿」や「小泉」といった店も，その頃に存在したことが分かり，『貴船の本地』絵巻も，江戸時代前期の制作であると推定できる。

この「小泉」という店の印記については，『貴船の本地』の印記以外のものも存在している。個人蔵『七夕の本地』絵巻には，巻末に「源小泉　大和大極」「烏丸通桜馬場町　御絵双紙屋　大和大極」の朱印があり，「小泉」という絵草紙屋が烏丸通にあったことが分かる。この印記は，國學院大學図書館蔵の奈良絵本『住吉物語』にも見られる。

さらには，慶應義塾図書館蔵奈良絵本『七草ひめ（帙題 若菜の草紙）』（請求記号：110X@314@1）[4]は，本来三冊本の内の上巻に相当するが，その下巻に当たると考えられる『つきわか物語』の末尾には，「御ゑさうし　天下一　小泉やまと」の印記があり，内容から見て，これも絵草紙屋小泉の印記であると考えられる[5]。『七草ひめ』『つきわか物語』と題されている作品は，奈良絵本でも，特大横型というたいへん珍しい形である。この大きさの作品はきわめて珍しく，どれもよく似た特徴を持っている。おそらくは，特大横型という特殊な奈良絵本自体が，絵草紙屋小泉の作品ではないか，と考えられる。

以上のように，絵草紙屋小泉と思われる印記は少なくとも三種類存在している。そのわずかな情報からだけでも，京都の烏丸通りに存在したこと，豪華な絵巻や奈良絵本を制作していたことが分かる。その活動期は江戸時代前期であり，奈良絵本・絵巻の世界では，草紙屋城殿と並ぶブランド店であったろうことが想像できる。

『貴船の本地』は，絵草紙屋小泉が江戸時代前期に京都において制作した作品であることが明らかになったが，最後に，その物語の内容を記しておく。

寛平法皇の頃，大臣の子定平の中将は，つぎつぎと五百六十人の女を迎えるが満足いかない。ところが，法皇から賜った扇に描かれている女に恋をし，この女より美しいという鬼国の大王の姫と会いたいと思う。鞍馬の毘沙門天で祈願すると，告げがあり，姫と会うことができたが，姫は鬼国で父に殺されてしまう。やがて定平は，姫の生まれ変わりである女子を育てて夫婦となり，後に貴船大明神となった。

なお，この『貴船の本地』絵巻は，2023年10月に丸善丸の内本店で開催された第35回慶應義塾図書館貴重書展示会「へびをかぶったお姫さま」展に，同じ印記を持つ作品群と共に展示された。その際に刊行した図録[6]や，録画されたギャラリートーク[7]を参照願いたい。

参考文献

1）石川透．“絵草紙屋小泉の印記”．奈良絵本・絵巻の生成．東京，三弥井書店，2003. 8.　p. 407-414.

2）慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション．“ともなが　2巻（奈良絵本・絵巻コレクション）”．https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-56-2-1
https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-56-2-2

3）石川透．“第三編　朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類”．奈良絵本・絵巻の生成．東京，三弥井書店，2003. 8.　p. 210-317.

4）慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション．“[七草ひめ] 3巻　存巻上（奈良絵本・絵巻コレクション）”．https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/110x-314-1

5）石川透．“慶應義塾図書館蔵『若菜の草紙』の周辺：附解題・翻刻”．野鶴群芳：古代中世国文学論集．東京，笠間書院，2002. 10.　p. 403-420.

6）慶應義塾図書館．へびをかぶったお姫さま：奈良絵本・絵巻の中の異類・異形（第35回慶應義塾図書館貴重書展

示会）．東京，慶應義塾図書館，2023，125p.

7）KeioMitaLibrary（慶應義塾図書館），石川透．“20231006「へびをかぶったお姫さま」ギャラリートーク”．YouTube.
https://www.youtube.com/watch?v=dEmgfetuBiA

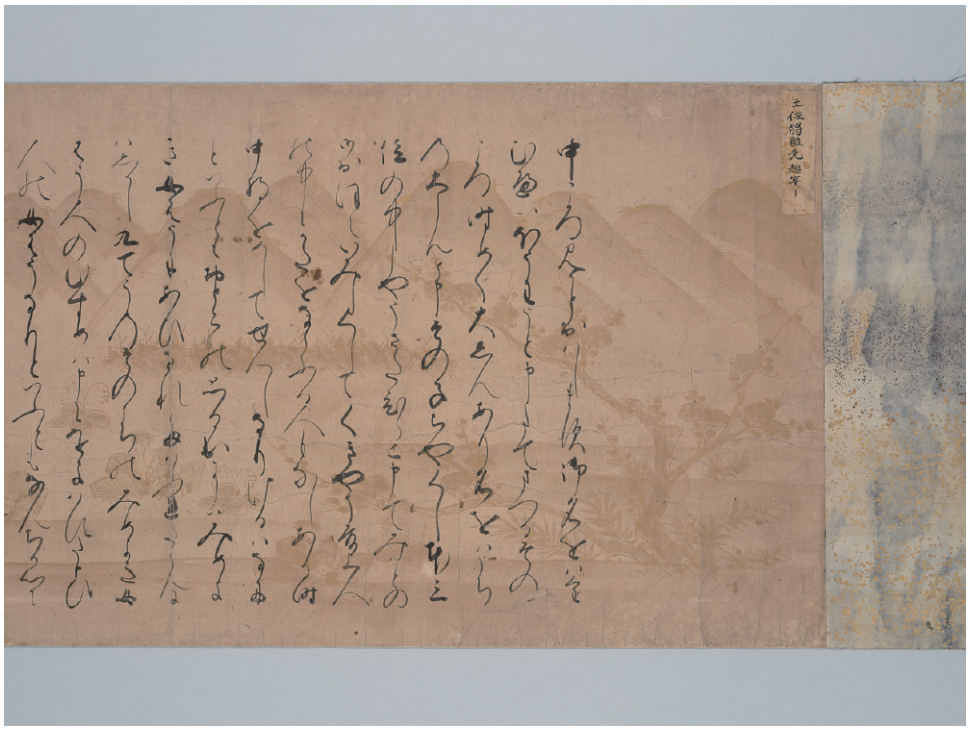


図１　「貴船の本地」上巻冒頭

図２　「貴船の本地」印記

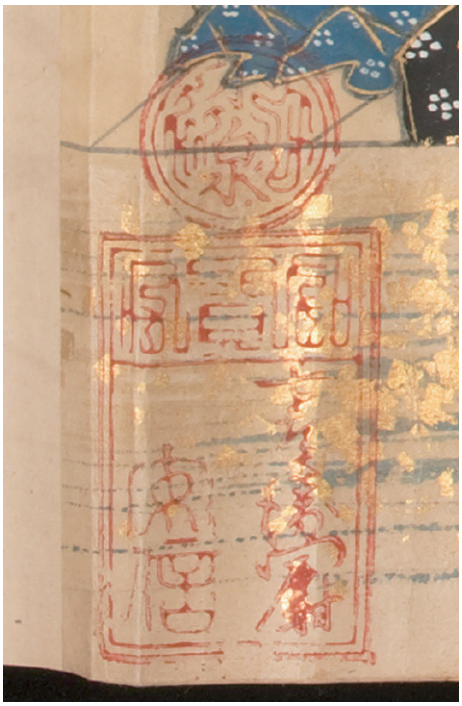


図３　「ともなが」印記

海外レポート

英国図書館研修報告

神谷（かみや）　優子（ゆうこ）
（メディアセンター本部）

1　はじめに

2023年９月から12月末までの約４か月間，英国イングランド東部ノリッジにある，セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館に受け入れていただき，英国を中心とした欧州の日本研究図書館などを訪問する機会を得た。慶應義塾大学メディアセンターの英国図書館研修は2012年より始まり，筆者で９人目となる。2019年までは毎年行われていた研修プログラムであるが，新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）による世界的パンデミックの影響を受け，2020年よりこのプログラム自体が停止されていた。2023年５月にコロナウイルスの感染症法上の位置付けが５類に移行されたことを受け，筆者が４年ぶりに派遣されることになった。

この研修の特徴として，慶應からの派遣者が一方的に学ぶだけでなく，訪問先の日本語資料を所蔵する研究図書館において，必要とされている業務支援等を行うことで，両者にとって得るところが多いという点が挙げられる。筆者は目録担当としての業務歴が長いため，目録作成をはじめとしたテクニカルサービスの業務支援を行いながら，英国ほかヨーロッパ諸国の図書館などを訪問し情報共有を行うことを目的の一つとして本研修に臨んだ。また，会議の出席や，オンラインでの研修参加などを通し知見を広げることも大切な目的と位置付けていた。

研修・訪問先と詳細日程は，表１のとおりである。これらすべてを紹介することは難しいため，本稿では参加させていただいた会議と，いくつかの訪問先について報告する。

表１　日程と訪問先

日　程	訪　問　先
下記以外の期間	セインズベリー日本藝術研究所　リサ・セインズベリー図書室
9/11	日本国大使館　広報文化センター図書館
9/13－9/16	日本資料専門家欧州会議（EAJRS）（ベルギー）
9/26	イーストアングリア大学（UEA）図書館
10/3－10/13	大英図書館
10/30	Japan Library Group（JLG）会議（大英図書館）
11/13	大英博物館
11/14	ナショナルギャラリーライブラリー
	ナショナルポートレイトギャラリーライブラリー
	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）図書館
11/15	コートールドライブラリー（コートールドギャラリー）
	大英図書館
11/16	UEA（東文研客員研究員によるギャラリー・トークと講演会）
11/17	ナショナルアートライブラリー
11/22	オックスフォード大学　ウェストンライブラリー
11/27－11/29	ベルリン国立図書館（ドイツ）

2　会議

(1) 第33回日本資料専門家欧州協会年次会合

日本資料専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists，以下「EAJRS」とする）は，日本資料に関心を持つヨーロッパの専門家による団体である。1989年に設立され，その目的は，ヨーロッパ各地の日本研究機関の情報交換，また日本からの情報入手とその促進および普及にある。1990年からは毎年９月に年次大会が行われており，2023年は９月12日から15日まで４日間の日程でベルギーのルーヴェンにあるルーヴェン大学にて開催された。参加者は会場参加とオンライン参加を合わせて101人で，英国，ドイツ，オランダ，ノルウェー，フィンランドの大学図書館員や日本研究所員のほか，ヨーロッパ以外からもアメリカ，カナダ，そして日本（国立国会図書館，国立情報学研究所，国文学研究資料館など）など，計14か国の参加があった。2023年度のテーマは「Adapting to Changing Trends in Japanese Studies：日本研究の時流に適応する」であり，日本語11本，英語17本の計28本の発表があった。また発表と並行して，書店や日文研など８つのベンダーなどが開催するワークショップも開かれた。さらに，ルーヴェン大学でのレセプションに加え，市内見学，ベルギーの伝統料理を楽しむディナー，ルーヴァン・カトリック大学の見学などのアクティビティも用意されており，筆者も参加することができた。

図１　EAJRS：発表の様子

筆者はこれまで，利用者と直接対面する機会が少ないまま，図書館員としての勤務歴を重ねている。そのため，このEAJRSの場で，研究者を支える各国の図書館員や研究所の方々と交流できたことは，視野が広がり，刺激にもなるとても貴重な機会であった。研修の最初にこのような場に参加できたことは，今振り返って大変意義深かったと思う。

(2) JLG meeting

英国日本図書館グループ（The Japan Library Group in the United Kingdom：JLG UK）は，日本研究と図書館の分野における専門知識を集約し，また相互に情報交換することを目的として，1966年に設立された団体である。当初は，ケンブリッジ，ロンドン，オックスフォード，シェフィールドという４つの大学図書館に加え，後に大英図書館の一部となる大英博物館図書館及び国立科学技術貸出図書館を中核として設立された[1)]。現在ではSOAS，リサ・セインズベリー図書館，日本国大使館広報文化センター図書館などもメンバーとなっており，年に２回の会合を開き，英国における日本の学術コレクションに関する現在の問題について議論している。

図２　大英図書館

筆者は，10月30日に大英図書館を会場とし開催された会合にオブザーバー参加した。各図書館の半期の状況を報告しあい，時に意見を交換したり共感したりするこの会合は，日頃１人の職場など少ないス

タッフの中で働いていることの多い図書館員にとって，とても大切な場になっていると感じられた。

3　英国内図書館訪問

(1) 大英図書館

図３　キングズ・ライブラリー（大英図書館）

大英図書館（British Library）は，約２億点の資料を所蔵する世界最大級の国立図書館である。1973年，大英博物館図書館とその他のいくつかの国立図書館が統合して誕生した。法定納本制度で指定された英国国内に５つある納本図書館の１つであり，英国とアイルランドで発行されたすべての出版物が収められている。

筆者は，こちらのAsian and African studiesというセクション内の日本部において，６日間にわたり様々な業務に携わらせていただいた。このセクションでは選書・受入・目録作成・支払いといったいわゆるテクニカルサービスが行われている。さらに，大英図書館所蔵資料の目録を電子化するなど，様々なプロジェクトも行われている。今回，その中の１つである通称「川瀬目録」に関する作業を行った。また，非英語・非アルファベット言語の資料担当者間で言語問題について考えるプロジェクトのオンラインミーティングへの参加もかなった。他にも，葛飾北斎に関するイベントを台湾の図書館と検討している広報部や法務部との打ち合わせにも参加した。大英図書館で生じる「日本」に関するすべての業務がこの日本部に集約されているという。ただ日本語のできる担当者は少ないため，すべてに十分時間をかけることは難しいであろうと感じられた。大英図書館であってもやはり人員に余裕があるとは言えない現状が垣間見られた。

大英図書館の中央に設えられているのは，キングズ・ライブラリーである（図３）。本好きだったジョージ３世が，世界各地で集めさせた書籍などの一大コレクションであり，その数は約８万５千冊から成る。図書館員にとっては，壮大で圧巻の一言に尽き，何度目にしても心が躍る光景である。

(2) ロンドン大学コートールド美術研究所図書館

図４　コートールド美術館

コートールド美術研究所（The Courtauld Institute of Art）は，1932年に設立された美術史及び美術品の修復に関する，世界でも名高い研究機関である。ロンドン大学の構成組織であり，美術史に特化した教育および研究を専門としている。また，コートールド美術館も併設している。この美術館は英国の実業家サミュエル・コートールドが収集したルネッサンスから20世紀にかけての美術品，ゴッホの「耳を

切った自画像」，マネの「フォリーベルジェールのバー」などが展示されている。研究所は大変美しいサマセット・ハウス内に設けられている。この中庭にはアイススケートリンクがあり，訪問した日がちょうどリンク公開日でクリスマスデコレーションされた景色も大変印象深かった。

訪問時には，作業の最中であったWitt Library及びConway Libraryのコレクションをデジタル化するプロジェクトについてお話を聞かせていただいた。数年かけて行われている大規模なプロジェクトであるが，実作業の多くにフェローや学生などのボランティアが関わっているそうだ。ボランティア内でリーダーを決め，きちんとした仕組みを作り，それを代々引き継ぎながら長く続けているのだという。気の遠くなるような数の資料を手作業で行う地道なデジタル化作業の一部を見せていただいた。関わっている方々が生き生きと話して下さっていた姿が印象的であった。

(3) ナショナルアートライブラリー

図５　ナショナルアートライブラリー閲覧室

ナショナルアートライブラリー（National Art Library）は，サウスケンジントンにあるヴィクトリア＆アルバート博物館（Victoria & Albert Museum，以下「V＆A」とする）内に併設されている国立美術図書館である。V＆Aは，1851年のロンドン万国博覧会を契機として，翌1852年に産業博物館の名で誕生した。その後美術と産業の融合に熱意を傾けた故アルバート公（ヴィクトリア女王の夫君）にちなんで，現在の名称となった。現在，世界の陶磁器，染織，家具等工芸全般にわたる所蔵品150万点以上をもつ世界有数の美術館であり，大英博物館と並ぶ英国の代表的国立美術館である。そこに併設されているナショナルアートライブラリーは，もとは中央デザイン学校の付属であったが，その後上述の産業博物館に組み込まれ，1860年頃に現在の名称になった。工芸美術関係の中心的な図書館としての役割と，現在に続く英国で最大規模の公開美術図書館としての役割を持ち，英国でも重要な位置を占めている。この図書館の強みは，網羅的に所蔵している文書資料とその内容の深さにある。大小様々な規模の美術館やギャラリーの展覧会カタログ，オークションハウスの販売カタログを多数所蔵していて，さらに現代の業界文献や現代アーティストに関する文書なども積極的に収集している。

閲覧室はV＆Aの２階に位置し，85席を有している（図５）。写真映えする大変美しい場所である。一方，書架は増設を重ね，あらゆる空間を使った複雑な作りになっていた。

こちらの図書館においても，アジア部門のスタッフの少なさが問題となっている様子であった。日本語に関する知識が豊富とは言い難いスタッフが日本語資料の目録を作成する必要に迫られているようで，その苦労は想像を超えるものがあると感じられた。

4　ベルリン国立図書館訪問

(1) ベルリン国立図書館の歴史

ベルリン国立図書館（Staatsbibliothek zu Berlin，以下「Stab」とする）は，1661年に設立され，現在はプロイセン文化財団が運営している。1913年にウンター・デン・リンデンに１号館ができたが，ここが東ベルリンとなったため，1978年に約２km離れたポツダム通りに２号館が建設された[2)]。２号館の建物は，ベルリン・フィルハーモニーも手がけたハンス・シャロウンの設計によるもので，中はとても

明るく，解放的な雰囲気となっている。閲覧机，書棚，階段などいたるところに美しく芸術的な装飾が施されているのも特徴的だ。

東西分断の歴史を経て，Stabには約1,000万冊の蔵書がある。現在，１号館は研究所図書館として，２号館は一般用図書館としての役割を担っているため，１号館には1955年以前の出版物や地図，児童書などを，２号館には1955年以降の一般的な出版物を所蔵している。

図書館の創設者であるフリードリヒ・ヴィルヘルムは，東アジアに対して並々ならぬ興味を抱いていたと言われている。その支援によって，大量の中国書籍が17世紀に当時の宮廷図書館へもたらされた。一方，当時鎖国政策を取っていた日本から書籍を入手することは，非常に限られた範囲にとどまっていた。19世紀までに同図書館に収蔵された日本の作品はわずか４点にとどまり，うち２点は現在も保管されている。Stabの東アジア部が所蔵する日本古典籍コレクションは，2021年の時点でおよそ1,000点にのぼる。そのうち約100点は1860～61年のプロイセン使節団遠征で入手された品々である。

図６　ベルリン国立図書館２号館

(2) 日本部の業務

２号館にある東アジア部内の日本部にて，様々な業務を紹介していただいた。この日本部では，まず利用者教育として，ベルリン自由大学などの日本学を専攻している学生にむけて行うイントロダクションを特に重要視している。さらに官庁出版物の国際交換という事業も大切にしている。日本から海外へ送付可能な官庁出版物のリストが出された際に，Stabではヨーロッパ以外の言語の官庁出版物は，各言語を扱う部署がリクエスト資料を選定する。非売品資料も多く，それ自体が人気のある資料だが，さらにこのリストを選書の参考資料として使うこともあるという。海外で日本の出版物について知るためにこの事業は大変有益である。また，選書業務や件名・分類付与，典拠作成，さらにILL対応など，「日本」や「日本語」に関連するものはすべて，この日本部へ資料が回ってきている。

また，ドイツの北部を中心とする７州にまたがる図書館ネットワークとして，GBV（Gemeinsamer Bibliotheksverbun）という存在がある。目録業務において，図書は，このネットワークの目録データベースであるK10plusを使っている。これはStabのOPACであるStabKatとは連携していないため，別途登録作業が必要である。また典拠システムも別に維持している。雑誌は，ドイツ語圏で利用しているZDB catalogueというユニオンカタログを使っている。図書と雑誌で使用しているシステムが別々で，さらに複数のシステムへの登録が必要，さらに雑誌は，製本単位の書誌・固有タイトルの書誌・雑誌タイトルとしての書誌をすべて作成するなどきめ細かな対応をしている。加えてExcelで原簿を管理するなどスタッフにとっては細かな負担が少なくない。しかしながら，日本部に図書は２名，雑誌は３名の専任の目録作成者が在籍していて，他の日本研究を扱う図書館に比べると人員は比較的恵まれている。さらにNACSISやWorld CATなどの外部書誌を有効に使い，データをダウンロードした後に手間をかけず取り込めるようなシステムを独自開発するなど，効率的な業務を可能とする工夫も随所にみられる。その結果，きわめて迅速に対応できている様子が伺えた。

(3) 専門情報サービス

ドイツ国内の主要な図書館には「専門情報サービス（Fetch Informationsdienst）」というものが確立しており，サービスの柱となっている。これは国が指定した図書館が，網羅的にひとつの分野を集中して収集するというもので，それらの資料類はドイツ

全体に提供する義務がある。分野は多岐にわたるが，たとえば「中東・北アフリカ・イスラム研究」や「教育科学と教育研究」といったものがある。Stabの東アジア部は，「日本学」分野を割り当てられている。これは，前述のように，プロイセン王国の頃から日本に関する資料が多く収集されていたという経緯による。東アジア部では「CrossAsia[3)]」というサービス名でサイトを運用し，データベースやILLサービスなどを利用者に提供している。予算は，国以外にドイツ研究振興協会からの助成などもあり，いくぶん余裕があるように見受けられた。

このサービスが上手く成り立つためには図書館と利用者の密な関係が重要であるという。日本部の利用者はドイツ人の日本学研究者がメインであり，その数が比較的限られていることはサービスを提供する図書館の側にとっても好都合だ。また，日本学者協会，社会学者協会とのつながりを密にして，こういったサービスの存在をきちんと知らせていることも利用者との連携を取っていく上で非常に効果的だという。担当者からは，利用者との関係において，日本部は問題ないと笑顔で教えていただいた。

また，分野間でサービス内容に差が生じているという現状もある。たとえば「法学」などは，研究者も多いため，利用者の求めるものに対して希望に添えないようなこともあるという。一方，東アジア部が担当している「日本学」については上述のようにユーザー層が限られている上にスタッフの努力もあり，手厚い対応ができている。またこのサービスへの利用登録も，他の分野は修士課程以上であったり，研究所単位であったりするが，日本学については学部生，しかも個人単位から認められている。サイト上での検索システムについても予算に余裕があるため開発を重ねられ，プロジェクトなどの際には専門の職員を臨時で補うこともできる，データベースも積極的に導入できる…など充実のサービスとなっている。国の方針としてのシステムが確立している辺りにも，ドイツのお国柄ならではのきっちりした仕組みが見受けられ，非常に羨ましく感じられた。

(4) 言語の問題

これは日本国外の図書館の多くに共通することであるが，非アルファベット言語であり，分かちの扱いなども難しい日本語資料には多くの問題がある。Stabでは，日本語資料の書誌であっても，場合によって，タイトルの漢字形を「検索できるが表示されないフィールド」に入力するなどの措置を取っているという。館内のOPACでは現物の表記とは異なるローマ字がまず表示され，注記事項など日本語の入力自体が不可能な箇所もある。業務用のチェックインシステムもローマ字しか表示されない。1号館を訪問した際に，ユニオンカタログに関わっているスタッフともお話させていただいたが，もちろん日本語ならではの言語の問題は理解しているし，対応したいと考えてはいる，が現状はなかなか難しいのだそうである。雑誌担当者の「まずは（現物通りの）漢字表記が大事だと理解してもらうことが大切」という言葉が大変印象的であった。

5　海外の日本研究図書館が抱える問題点

世界における「日本学」は決してメジャーな研究分野ではない。ただ，その熱が下火になっているわけではなく，今なお積極的に研究を続けている研究者は多くいるという。そのため，彼らの研究を支える専門知識のある図書館員の存在は，想像していた以上に重要であると多くの面で感じることができた。さらに，こういった日本学研究を衰退させないよう，連携しながら力を入れ，積極的に行動されている図書館員が世界にたくさんいるという現状を知り，大変心強く感じられた。ただ残念ながら，長らく言及されているように，世界，特にヨーロッパの日本研究図書館員の数は減少し続けている。「日本担当」のスタッフが退職した後に「アジア・アフリカ担当」といったように，日本に特化した人材が登用されないことも少なくないのだという。加えて，キャリアの終盤を迎えているスタッフが多くなっている状況もある。スタッフの優れた能力と，積み上げてきた経験をきちんと引き継いでいける後進の育成の必要性は大きく，急務であるといえよう。一方，筆者の立場で日本からできることは限られているかもしれないが，日本国外からのNACSISやOCLCへの需要に対応するには，より多く日本からの登録を増やすこと，さらに日本でどのようなサービスを行っているかを海外に向けて発信していくことが大事なのではないかと感じた。

6　リサ・セインズベリー図書館

図７　セインズベリー日本藝術研究所

訪問先の締め括りとして，研修期間の３分の２を過ごしたリサ・セインズベリー図書館での日々について触れたい。これまでの派遣者も述べているように，ノリッジは中世の街並みが残された，大変美しく趣深い街である。そのシンボルともいえるノリッジ大聖堂の膝元で過ごした日々は，鐘の音とともに決して色褪せない思い出となった。こちらでは，日本関連資料の書誌修正作業，また書庫の狭隘化対策として，資料の移動作業を行った。さらに，粛々と進められているデジタル化のサポートも行った。また日々の業務の合間に，ヨーロッパの現状などについてもいろいろな観点からお話を聞かせていただいた。大変有意義な時間となったことは言うまでもない。

7　終わりに

４か月の研修期間を通じて，世界の中で「日本」がどのように理解されているかを客観的に知ることができた。日本にいるだけでは得られない貴重な経験になったと思う。また，セインズベリー日本藝術研究所という日本芸術の知識の宝庫にいられたことで，現代文化のみならず，浮世絵や仏像といった古くから愛されてきた日本の芸術文化についてもこれまでになく触れることができた。研究所フェローや客員研究員の方々から多くのことを教えていただき，日本への理解を広げることもできた。

帰国後の日々の業務で薄れてしまっていたが，この原稿執筆を経て，ノリッジで過ごし，感じた思いを振り返ることが出来た。日本で何ができるのか，今後どのようにつながりを維持していけるのか，今一度心にとめ努めていきたい。まずは見聞きした状況をできる限り知らせていくことが大切なのではないかと考えている。

最後に，今回の研修全般のコーディネートをして下さったリサ・セインズベリー図書館の平野明さん，温かく迎え入れて頂いたセインズベリー日本藝術研究所の皆様，忙しい業務の中，受入れて下さった各図書館のスタッフの皆様，また快く送り出してくれたメディアセンター本部，特に目録担当の皆様にこの場を借りて感謝申し上げたい。そして，母（妻）の４か月の留守を何とか無事に乗り切ってくれた家族にもお礼を言いたい。

参考文献

1）Yu-Ying Brown. The Japan library group in the U.K. Japan Forum Pages, 5:2, p. 257-261, DOI: 10.1080/09555809308721491.
https://doi.org/10.1080/09555809308721491
2）ブッセ・エルネストゥス原著．“ドイツの図書館：過去・現在・未来”．東京，日本図書館協会，2008，p. 127-137.
3）“CrossAsia”.
https://crossasia.org/

スタッフルーム
Staff room

私を貫くもの

手島（てじま）　善人（よしと）
（三田メディアセンター）

振り返れば，ジャズに興味を持ったきっかけは反抗心だった。当時中学生，まさしく反抗期にあった私は，それまで続けてきたクラシックピアノに嫌気がさしていた。その理由は，楽譜に書かれている以上の表現するにあたり，作曲者のキャリアや作曲時の環境に想いを馳せるよう指導を受ける中で，自由な発想を求められつつも，あたかもそこには模範的な正解があり，それを再現するよう迫られている感覚に苛まれていたからである。

それまでジャズに対しては，漠然と「洒落ている」程度の印象しかなかった。しかし，クラシックへの反抗心が芽生える折，何とはなしにYouTubeがサジェストした，Roy HargroveによるStrasbourg St. Denisのライブ映像は，私の音楽観を変えた。その演奏は冷静ながらもエネルギーに満ち溢れ，そして何より彼らは音楽を心底楽しんでいた。ジャズのことが何もわからない中学生にとっても，それが前提にある「正解」をなぞるのではなく，何か別のものを希求していることは自明だった。

この出会いを機会に次第にジャズに傾倒するようになり，クラシックピアノからジャズピアノに転向した。さらには吹奏楽部に入りバストロンボーンを担当し，部内のビッグバンド等でジャズに触れた。そして卒業後は慶應義塾大学のジャズサークルに参加し，主に2010年代以降の現代ジャズラージアンサンブルを中心に演奏活動を行った。本筋からは逸れるが，この経験が採用面接では何かと話題の種となったこともあり，サークルには感謝が尽きない。

さて，単にジャズといっても内実は様々な形態・音楽のタイプがあるが，いずれも共通する点は即興性であろう。アドリブ，インプロヴィゼーションとも呼ばれるこの特徴はジャズに限ったことではないが，他のジャンルと比べればその重みはひとしおである。

しかし殊に複数人のステージにおいて，即興で演奏するとはどういうことか。無論，個々人が好き勝手に音を出しているわけではなく，大きく分けて２つのポイントがある。１つはメロディについて。ジャンル，リズム，コード進行，テンポ，楽器の音域・特性など一定の制約の中で，自分のアイディアに基づきメロディを紡いでいく。

一方で，一音一音とは別に全体の構成についても意識しなければならない。はじめから最高潮のテンションでは聴衆も辟易してしまうし，反対に盛り上がりに欠ければ煮え切らない印象となってしまう。

構成を組み立てていく中で重要なのは，時を同じくするバンドメンバーの存在である。メインプレイヤーとその他メンバーのテンションが乖離していれば，その演奏はぎこちないものとなる。反対にボルテージを同じくして展開していけば，各々の演奏は互いにエンハンスされ，決して１人では醸せない高揚を誘う。

実際の演奏にあっては，プレイヤー同士でコミュニケーションが緊密に取られている。個々が出す音はもとより，アイコンタクトやハンドサイン，表情までそのチャネルは多岐に渡る。ステージの上で言葉無くして，時に助け合い，焚き付け，煽り，闘うのである。

転向直後，師からまず教わったことは，「何を演奏するかではなく，何を聴くかが先立つようにすること。耳を鍛えなさい」ということだった。今なら左記の動画の何に心を動かされたかわかる。即興演奏と音を介したコミュニケーションが作り出す雰囲気全体を感じ取ったのだ。

しばしばジャズは言語さながらだと思い至る。コード進行という文法の上で，フレーズという語彙で話す。その言語圏でプレイヤーが会話（それはおしゃべりだったり，討論だったり喧嘩だったりする）をし，相互により刺激的な演奏を求めて協働すること。レジェンドのレコーディングを聞いて会話を紐解いたり，ライブに足を運び聴衆としてリアルタイムで会話に参加すること。毎回どんな会話（演奏）になるかわからない。一言一句の再現をするつもりもない。私はそこに陶酔すら覚えるのである。

メディアセンターの主な出来事 2023年度

※印のポスターは次ページをご覧ください

資料

2023

4月　5月　6月　7月　8月　9月

イベント

4/1−5/13【湘南藤沢】
体験型謎解きイベント
「カモからの挑戦状」※

●6/20（早稲田）, 29（慶應日吉）【共通】
◀早慶和書電子化推進コンソーシアム
光文社トークイベント ※

●9/21
【理工学】展示と連動した選書ツアー
（丸善ジュンク堂書店 池袋本店）

●7/7【日吉】
知的書評合戦・ビブリオバトル「心が熱くなる一冊」▶

●7/8【三田】三田キャンパス建築見学会

4月−5月【日吉】
▼新入生歓迎展示「ようこそ慶應義塾へ2023」

7/10−8/18【日吉】
展示「図書館フレンズ選書ツアー展示2023」※

●5/17, 19【日吉】ライブラリーコンサート

●5/22【日吉】選書ツアー（丸善 丸の内本店）

6月−7月【薬学】展示「日本植物学の父 牧野富太郎を知る」

●5月【薬学】
展示「羽ばたけ！ 薬学部生！
▼〜キャリア形成×医療現場のこれから〜」

●8月【日吉・理工学・湘南藤沢】
◀受験生対象 夏のオープンライブラリー（4年振り）

8/4−5【三田】オープンキャンパス

●6/30【理工学】第22回サイエンスカフェ
「熱・光・力を見える化する
ソフトな二次元材料の化学」▶

サービス

●4/1【日吉】図書館を紹介する館内ツアー動画をYouTubeで公開

●4/3【共通】ILL(SuperHabil)FAX/メール受付システムの運用開始

●4/19【理工学】創想館大型TVデジタルサイネージでの広報運用開始

5/15−31【信濃町】「学習環境に関するアンケート」

6/1−30【共通】電子書籍に関するアンケート▶

施設・設備

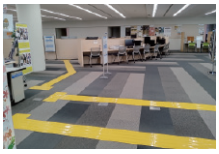
●4/3【三田】
▼声出しブース設置

8/7−9/30【理工学】
◀図書館本館外壁改修工事

●7/13【日吉】
◀館内冷水器をマイボトル対応の
ウォーターサーバに交換

●8月【薬学】
事務室・カウンター改修工事▶

●4/28【湘南藤沢】
▼1階視覚障害者用歩行点字パネル工事



●9/1【理工学】
館内PCリプレースに伴う創想館エリアのレイアウト変更、マルチエリア個人ブース設置

●9月【日吉】
AVホールのスクリーンと装置を入替

その他

●9/8【三田】
選書事務室移転

●8/24【理工学】
防災訓練

資料

2024

10月　11月　12月　1月　2月　3月

▼ 10/2−12/2【日吉】展示「比べてみよう！ 映画と原作」

1/9−3/2【日吉】展示「平安文学への誘い：源氏物語を中心に」

▼ 11/25−26【湘南藤沢】万学博覧会

3/1−23【日吉】
受験生対象 春のオープンライブラリー（6年振り）

●12/19【湘南藤沢】第1回プレゼンテーションバトル「好きな＊＊（コト）」※

10/4−10【三田】
貴重書展示会「へびをかぶったお姫さま」
（丸善 丸の内本店）※

11/1−1/18【日吉】
展示「キャンパス文学さんぽ：あの作品、あの作家の聖地を歩く」▶

11/17−1/17【薬学】港区立高輪図書館との連携展示「みんなの推し本！」※

●10/18【理工学】
第23回サイエンスカフェ
▼「しなやかさのすゝめ」

11/28−12/23【三田】展示「久保田万太郎 ― 時代を惜しみ、時代に愛された文人 ―」※

12/4−2/29【理工学】展示「選書ツアー 2023」

●12/7【理工学】第3回プレゼンバトル ※

●12/8【日吉】知的書評合戦・ビブリオバトル「ついつい何度も読み返してしまう本」

●11/22【共通】第20回メディアセンター研修会「AI時代の図書館の役割」

10/4−【日吉】利用者参加型企画「読んでみて！」※

●10/2【信濃町】
オーダーメイド型
講習会の開始▶

●12/1【信濃町】
館内リニューアル
プロジェクト立ち上げ▶

●1/19【看護】
ジェルクッションのレンタルサービス開始

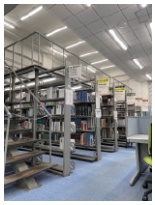
●2/12【信濃町】
閲覧エリア機能・利用ルールの変更

●2/29【共通】
Resource Lists（Leganto）サービス終了

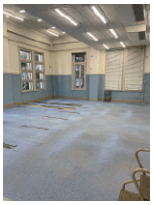
●10/2【理工学】創想館地下セミナールーム A/Bのオンライン予約サービス開始

1月−2月【信濃町】
KIC（ITC）パソコンの撤去・減台

2/23−25【信濃町】積層書架の撤去



(before)



(after)

12/4−2/16【信濃町】
資料再配置にともなう館内資料の移動

11/16−1/12【湘南藤沢】
137インチ大型LEDディスプレイ（デモ機）設置

●3/14【三田】
プリントサービス用プリンタ設置

●2月【薬学】ハイカウンター席の新設、
閲覧席の椅子125脚をクリーニング

10/10−9/30【三田】レファレンス資料利用度調査▶

●10月【理工学】「理工学メディアセンターニュース」紙面デザイン一新

●10/20【共通】「慶應義塾図書館史Ⅱ」刊行

●11/24【三田】
防災訓練

●12/13【日吉】
防災訓練

●3/7【本部】
◀国立台湾図書館と
学術交流協定締結

●3/6【湘南藤沢】
防災訓練

資料

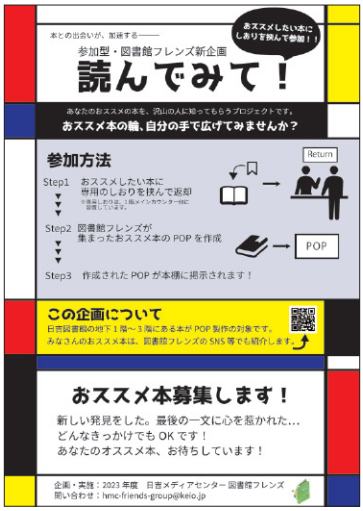
メディアセンターの主な出来事 2023年度補遺：イベントポスター

4/1-5/13【湘南藤沢】
イベント「カモからの挑戦状」

6/29【日吉】
光文社トークイベント

7/10-8/18【日吉】
「選書ツアー展示2023」

10/4-10【三田】
展示「へびをかぶったお姫さま」



10/4-【日吉】
利用者参加型企画 「読んでみて！」

11/17-1/17【薬学】
展示「みんなの推し本！」

11/28-12/23【三田】
展示「久保田万太郎」

12/7【理工学】
第 3 回プレゼンバトル

12/19【湘南藤沢】
第 1 回プレゼンテーションバトル

メディアセンターの活動の記録＜2023年度＞

メディアセンター本部

1．「慶應義塾図書館史Ⅱ」の刊行

10月に「慶應義塾図書館史Ⅱ」を刊行した。これは1972年に刊行された「慶應義塾図書館史」の続編となるもので，メディアセンターの前身となる研究・教育情報センターが発足した1970年から2019年度末までの50年間のメディアセンター（図書館）の歴史をまとめたものである。本書は冊子で刊行したほか，PDF版を慶應義塾大学学術情報リポジトリ（KOARA）でも公開した。

2．国立台湾図書館と学術交流協定を締結

2024年３月に須田所長ほか２名が国立台湾図書館を訪問し，学術交流協定を締結した（発効は４月１日）。この協定は両図書館の国際的な活動を促進するもので，相互の出版物や学術資料の交換，職員の交流などを行うものである。

3．早慶和書電子化推進コンソーシアムの活動

活動２年目となる2023年度は，実験的プロジェクトによる和書の電子書籍提供を継続したほか，以下の活動を行った。

・６月に早慶の学生・教職員を対象に利用状況や要望に関するアンケートを実施し，その結果を参加出版社にフィードバックした。11月にはアンケート回答者の中から学生数名に対してインタビューを実施した。
・６月末に，参加出版社（光文社）の協力により早稲田，慶應両大学図書館において，トークイベントを実施した。
・６月～７月にかけて理工学，日吉，湘南藤沢にて電子書籍に関する展示を行った。

4．第20回研修会の開催

「AI時代の図書館の役割」をテーマに，三田・北館ホールとZoomウェビナー併用のハイフレックス形式で開催した。講演者は，岸田和明氏（文学部教授），矢向高弘氏（システムデザイン・マネジメント研究科教授・AI・高度プログラミングコンソーシアム代表），佐藤嘉能氏（クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社）の３名。メディアセンター以外の職員も含めて144名が参加した。

5．セインズベリー日本藝術研究所との交流再開

コロナ禍により2019年度を最後に途絶えていた交流を再開した。９月～12月の３か月間スタッフ１名が先方に滞在し，この期間中に先方の業務を学んだほか，EAJRS（日本資料専門家欧州協会年次大会）への参加や英国及び欧州の図書館の調査を通じて幅広い知見を得た。

6．Resouce Lists（Leganto）サービスの終了

2021年度から開始した当サービスであったが，その後の利用状況の伸び率や義塾のICT関連予算状況などから総合的に判断した結果，2023年度末でこのサービスを終了した。

三田メディアセンター

1．館内施設・設備

⑴　利用者スペースの利便性および安全性を向上させるため，年間を通して什器の刷新や館内工事を実施した（新館２階東閲覧室全席への電源コンセント設置および椅子の買い替え，書籍落下防止装置の取り付け他）。
⑵　４階セミナー室３を「声出しブース」にリニューアルし，運用を開始した。学生用の設備で，発話を伴う語学学習，プレゼンや演習発表練習，オンラインでのグループ学習やゼミ活動などに用いる（４月３日）。
⑶　選書担当事務室が，１階事務スペースから５階（旧５階閲覧室）に移転した（９月８日）。
⑷　KICプリントサービス用プリンタが１階エレベータホールに設置され，それまで３階エレベータ前に設置されていたITC統合プリンタは撤去された（３月14日）。

2．各サービスおよび業務

⑴　2023年度より三田キャンパス全ての研究科で修士論文がPDF提出になった。これを受け，

修論の収集・提供に関わる各種書式を改訂した（５月30日）。

⑵ 10月のインボイス制度の導入に伴い，一日入館券，塾員入館券，塾員貸出券の各種申請書・領収書，相互貸借サービスの領収書などの様式を変更した（９月22日～25日）。

⑶ レファレンス資料利用度調査を開始した（調査期間：10月10日～2024年９月30日）。

⑷ 2024年度予算申請で，前年度支出実績に基づき図書支出から図書資料費へ予算額付け替えを申請した。

⑸ 「中國方志叢書」4,056冊，「中國名著選譯叢書」100冊を山中資料センターに移動した（11月29日）。

３．学内協力活動

⑴ ４年ぶりにオープンキャンパス2023が開催され，２日間で延べ10,357人の来館（退館ゲートカウント）を記録した。前回（2019年度）と比較すると約3,000人の増加であった。入学センターの集計によるとオープンキャンパスの来場者は約12,000名で，大半がメディアセンターに来館したことになる（８月４日～５日）。

⑵ 文人・久保田万太郎の没後60年を記念して，慶應義塾大学久保田万太郎記念資金および文学部の主催で，展示「久保田万太郎―時代を惜しみ，時代に愛された文人」が開催された（11月28日～12月23日　於１階展示室）。

４．学外協力活動

「中津川家文書」が港区有形指定文化財に指定され，告示された。「反町文書」「曲直瀬家文書」に続き３件目の指定となる（10月12日）。

日吉メディアセンター

１．施設・設備の整備

⑴ ２階，３階にデジタルサイネージを各１台新設した（４月）。

⑵ 館内冷水器をマイボトル対応のウォーターサーバに交換した（７月）。

⑶ スタディサポートデスク前の低書架４台のうち使用していない１台を撤去した（７月）。

⑷ AVホールについて，空調機の交換（７月），映像装置の交換（８月～９月），入口照明の人感センサー対応（２月），ホール内への防犯カメラ設置（３月）を行った。

⑸ 建物東側（来往舎側）外壁面の補修工事を行い，窓を遮光窓ガラスに交換した（８月）。

⑹ 館内の照明のLED化工事（２年計画２年目）が終了した（11月）。

⑺ オーバーヘッドスキャナーを購入した（２月）。劣化した資料のオペレーターコピーや，公衆送信サービスが開始された際に使用する。

２．企画・広報・イベント

⑴ 新学期に向けて図書館を紹介する館内ツアー動画をYouTubeで公開した（2023年３月）。

⑵ 新入生対象のセルフオリエンテーリングを開催し，195名の参加があった（４月３日～28日）。通信教育課程夏期スクーリング生に向けても開催し，426名の参加があった（８月４日～19日）。

⑶ 図書館フレンズの活動

・丸善丸の内本店で選書ツアーを実施し（５月），選書した図書の展示を行った（７月～８月）。

・利用者参加型の企画「読んでみて！」を開始した（10月～）。専用の栞を挟んで返却された本の情報を，お勧め本として書架側面に掲示している。

・本の紹介冊子「フレンズ文庫」を「新フレンズ文庫」として５年ぶりに発行した（１月）。

・ビブリオバトル「心が熱くなる一冊」（７月），「ついつい何度も読み返してしまう本」(12月）を開催し，後日，紹介された図書を展示した。

・毎年恒例の「本の福袋」を実施した（12月）。

⑷ HAPP恒例企画のライブラリーコンサートを開催した（弦楽四重奏，ジャズ）（５月）。３年間行った配信を止めて会場での鑑賞のみとした。

⑸ 「早慶和書電子化推進コンソーシアム」の関連企画として「光文社トークイベント：光文社古典新訳文庫はこうやってつくってます」を早稲田大学図書館との共催で実施し38名の参加があった（６月）。編集長（早稲田大学OB）と編集部員（慶應義塾大学OB）によるトークセッションが行われた。

(6) 慶應義塾大学の受験を考えている受験生を対象にオープンライブラリーを夏は4年振りに開催し319名（8月3日～31日），春は6年振りに開催し127名（3月1日～23日）の入館があった。

(7) ライブラリーグッズ（ぴあくろうをデザインしたボールペン，あずまやをデザインした巾着）を作成した（2月）。

3．利用者サービス

(1) 経済学部でほぼ全員が受講する授業「Study Skills」に対して，スタッフが作成した情報リテラシーセミナー動画の提供を開始した。

(2) アカデミックスキルズ履修学生による学習相談の窓口を開設した（春4月17日～7月21日，秋10月16日～1月31日の平日午後）。

(3) 理工学メディアセンターのラーニングサポート（院生）による出張相談を実施した（学期末試験期に春3日間，秋2日間）。

(4) 日吉を中心に作成し2006年に公開した情報リテラシー動画教材「PATH」について，FLASHを使用しているため現在は参照する術がなく公開中止とした（5月）。

(5) 国立国会図書館の視覚障害者等用データ提供館として日吉メディアセンターを登録するため同館と「視覚障害者等用データ収集覚書」を締結した（12月）。

(6) 映像資料の利用推進のため，所蔵する映画等のDVD・ブルーレイのカバーボックス約30点をメインカウンター近くに展示した（3月～）。

4．資料の移動

(1) 新書について，出版年が2009年までの929冊を2階から地下書庫へ移動した（11月）。

(2) 2階バルコニーの軽読書書架を分散配置から集合配置に改めたことで，本が見やすく取り出しやすくなった（2月）。

5．協生館図書室

(1) 「コロナ期間の未貸出新着図書」コーナーを設置（4月～7月）し，2020～2022年の新着図書のうち貸出回数0の1,074冊を展示した。

(2) 新着図書コーナーを拡張し展示期間を一週間から約一か月間に変更した（6月）。

(3) ウェブサイトの「紹介状」の文言を「閲覧申請」に改め関連各ページを更新した（8月）。

(4) ITCアカウント対応PCのリプレースとプリンタの移設を行った（9月）。台数を11台から4台に変更(うちWindows English ver. 1台)。

(5) 防災訓練を契機に非常口誘導サインの点検を行い，室内右手奥一か所を増設した（12月）。

(6) インターフォンの受信機をモニタータイプ（子機付き）へ交換した（3月）。

(7) 図書室内のITCアカウント対応プリンタは，新サービスへの移行を機に図書室外（同フロア）へ移設された（3月）。

信濃町メディアセンター

1．教育・学習支援

(1) 「学習環境に関するアンケート」実施
非来館サービスの充実の一方で，コロナ禍を経て来館者数が減少していることから，今後のメディアセンターにおける利用環境見直しの参考とするため，学生を主な対象として学習環境に関するアンケートを実施した（5月）。

(2) オーダーメイド型講習会の開始
従来の電子リソースミニ講座の後継サービスとして，利用者が学びたい内容や開催日時を自由に選べる「オーダーメイド型講習会」を開始した（10月）。

(3) 館内利用ルールの緩和
信濃町キャンパス方針変更に伴い，利用ルールを緩和した。館内でのマスク着用は個人判断とし，消毒は必須とせず，閲覧席の着席ルールの制限を撤廃した（11月）。

2．研究支援

(1) 「見える化プロジェクト」調査
医学部企画室より依頼があり，各教室（基礎系の場合はさらに細分化した研究室）について，過去5年間の研究業績調査を行った。臨床系は教室ごとの文献数，被引用数，Top10％論文数，h5-index，基礎系は筆頭著者，責任著者の論文掲載誌のインパクトファクターの総数とh5-indexを算出した（12月）。

3．館内リニューアルプロジェクト

⑴　館内リニューアルプロジェクト立ち上げ
「学習環境に関するアンケート」の回答結果を受け，学生の多様な学びをサポートするために図書館機能を見直すプロジェクトを立ち上げた（12月）。

⑵　資料の移動
資料再配置にともない，地下の医学中央雑誌734冊とIndex Medicus674冊，米国医学図書館の目録関連資料146冊を倉庫に移動した(12月)。1階のレファレンス統計資料を2階書庫へ移動し（1月），除籍対象である地下の中国語雑誌49誌（3,646冊）を書架から撤去し，その他のレファレンス資料を地下に移動，1階の視聴覚資料を地下メディアルームに移動した（2月）。

⑶　閲覧エリア機能・利用ルールの変更
書架や机など什器の移動・撤去を行い，1階閲覧室を「マナビバ」，くつろぎ閲覧エリアを「くつろぎ」，地下1階閲覧室を「自習室」，セミナー室を「eラーニングルーム」，グループ学習室を「メディアルーム」と名称変更した。これにともない会話やオンライン授業による発話などの各エリアのルールを変更した（2月）。

⑷　積層書架の撤去
レファレンス資料が配架されていた1階の積層書架を撤去した（2月）。

⑸　ITC端末の撤去・減台
地下セミナー室と1階閲覧室のITC端末の撤去・減台を行った（1月～2月）。マナビバに3台，eラーニングルームに5台，メディアルームには2台を設置した。

4．医療活動支援

⑴　関連病院図書担当者連絡会開催
オンライン（Zoom）で開催し，16機関が参加した。例年行っている関連病院コンソーシアム契約状況報告および信濃町メディアセンター活動報告のほか，参加者より病院図書室の事例報告があった。懇談の時間では活発な情報共有や意見交換が行われた。スタッフによる図書担当初心者向けの文献検索講座を復活させた（2月）。

⑵　健康情報ひろば
新たに3名のボランティアスタッフを受け入れた（5月，8月，1月）。病院で開催された「ボランティア感謝の集い」では，累積の活動時間3,000時間を超えた2名と，4,000時間を超えた1名のボランティアスタッフが表彰された（12月）。

5．資料関連

⑴　山中資料センター配架資料の除籍作業
山中資料センターに配架している信濃町メディアセンター所蔵資料のうち地区内で重複している図書（約3,600冊）の除籍作業を開始した（12月）。

⑵　館内リニューアルに伴う除籍作業
図書（レファレンス資料，PCコーナー図書，国試コーナー図書）483冊と，雑誌（レファレンス資料）95冊，非図書（旧版）662点を除籍した。

6．施設・設備

⑴　ウォークイン端末のリプレース・減台
2018年度に導入したウォークインユーザー用のパソコンのリプレースを行い，OSを最新版に更新した。また利用状況を鑑み，設置台数を2台から1台に減台した（7月）。

理工学メディアセンター

1．施設・設備の改修・変更

⑴　創想館，別館の生協設置利用者用コピー機2台を撤去した（5月15日）。館内コピー機が1台（本館1階・コイン式）となり，学外者も含めセルフコピー料金は一律10円とした。

⑵　本館3階照明のLED化工事を行った（9月1日～3日）。

⑶　本館静かエリア，本館PCエリア，創想館PCエリアのKIC-PCリプレース・撤去を行った（9月1日）。

⑷　創想館PCエリア，学習エリアのレイアウト変更を行った（9月11日）。オンライン面接等を行える場所への要望が高く，マルチエリアに仕切り付き個席を用意し，声出し可能な

エリアとした。

(5) 本館外壁改修工事を行った（９月30日竣工）。

(6) 外部の予約管理システムを用いたセミナールームA/Bのオンライン予約サービスを開始した（10月２日）。

(7) 別館電動書架・通路部分の照明LED化工事を行った（２月10日～11日）。

(8) 防犯カメラの移設・新設工事を行った（２月24日～26日）。

(9) 本館１階静かエリアの机の溝埋め工事を行った（３月30日）。

２．企画・広報・イベント

(1) 2023年度ノベルティグッズとして透明ポケット付き不織布バッグと吸水クロスマルチカバーを作成した。プレゼンバトルへの参加や，オープンライブラリーのスタンプラリープレゼントとして学生や来館者に配付した。

(2) 広報紙「理工学メディアセンターニュース」の紙名となって25年，同デザインの継続が10年，通号250となったのを機に10月号より紙面デザインを一新した。

(3) 選書ツアーを９月21日に丸善ジュンク堂書店池袋本店で行った。POPとツアーの様子の展示パネルを作成し，選定により新規購入した資料97冊の展示を以下の期間に開催した。12月４日～2024年２月29日

(4) 12月に第３回プレゼンバトルを開催し，プレゼンター・観戦者ともに他キャンパスおよび学部１・２年生からの参加を多く得た。教員が講師となるサイエンスカフェは，2023年度内に２回開催し，会場の臨場感を届けられるよう，実演の様子の配信も実施した。

３．利用者サポート・セミナー

(1) 大学院生スタッフによる学部生への学習支援（ラーニングサポート）を対面/オンラインの両方で提供した。研究室選びの相談に特化した広報も行い，多くの利用があった。春と秋の定期試験期間には,日吉での出張相談を実施した。

(2) 文献探索セミナーの形式を対面・オンラインの選択制とすることを定型化し，どちらにも対応できるようスタッフの熟練度をアップさせた。オンラインの件数自体は2022年より減少し，全体の３分の１となった。外部講師によるセミナーは，キャンパスの垣根を越えて学生が受講できるよう，前年度に引き続きオンラインで実施をした。

(3) 文学部図書館・情報学専攻の実習生１名を受入れした（８月21日～９月１日）。

４．資料購入関係

(1) 一般財団法人慶応工学会より学術振興事業の一環として，学生用図書購入のための寄付金15万円をいただいた。

(2) 文科省検定教科書について，数学・理科・工業・情報の４科目のうち，「工業」分について教職課程センターが購入し，理工学メディアセンターに納品，寄贈受入することが決定した。

(3) 図書資料費で支出していた化学系データベース“Reaxys”や国内外の学協会論文誌等の支払いを理工学部間接経費で行った。

湘南藤沢メディアセンター

１．施設関連

・１階に視覚障碍者用歩行点字パネルを設置した（４月）。

・湘南藤沢キャンパス内のごみ廃棄ルール変更（分別強化）に伴い，館内のごみ箱の再配置を行った（５月）。

・コピーカードサービス終了に伴い，２階に設置されていたカード式コピー機を撤去した（５月）。

・３階の冷水器をノズル付きに交換した（７月）。

・館内の各窓のブラインドを刷新した。また破損回数が多い箇所についてはブラインドではなくロールスクリーンを導入した（８月）。

・エントランス（風除室）の自動ドアセンサーの修理と漏水対策とあわせて屋上の清掃を行った（８月）。

・１階オープンエリアにアームデスクラウンジチェア１脚と３階書架横にスクエアタイプテーブル付きチェア５脚を新しく導入した（１月）。

・サイネージ利用のため，移動式AV機材（98インチモニタ＋マイク関連）を導入した（１月）。

・メディアセンター内で防災訓練を実施した（３月）。

2．ライブラリーサービス関連

⑴　サービス

・合成音声による館内放送を開始した（４月）。

・湘南藤沢高校生の利用可能エリアを試験的に拡大した（12月）。

⑵　イベント

・新入生向けの体験型謎解きイベント「カモからの挑戦状」を開催した（４月～５月）。

・１階オープンエリアで加茂研究会と防衛研究所のトークセッションを開催した（10月）。

・SFC万学博覧会の開催にあたり，メディアセンターでは館内見学に加え，3Dプリンタの体験会を実施した（11月）。

⑶　資料移動

・Z館101に置かれていたSFC10年史アーカイブ資料をZ館サーバースペースに移動した（11月～12月）。

・３階に配架されていた文庫と新書を２階へ移動した（２月～３月）。

・「SFCコレクション」を新着書架へ移動した（２月～３月）。

⑷　学生コンサルタントの活動

・ライティング＆リサーチコンサルタントはSFC万学博覧会においてポスター展示「「SFCで研究する」ってどんなだろう？WRCと一緒に考えましょう！」およびSFC学会で活動内容の発表を行った（11月）。

・データベースコンサルタントはプレゼンテーションバトル「好きな＊＊（コト）」を開催した（12月）。

・メディアセンターフレンズはイベント１件，企画展示２件，X（旧Twitter）企画３件を行った。

＊イベント

－タンデムラーニング説明会（４月）

※担当者の卒業により，タンデムラーニングは2023年度を以て活動を終了した。

＊企画展示

－早慶和書電子化コンソーシアム関連企画「わたしの推しの光文社古典新訳文庫」（６月）

－「知らなかったカモ！メディアセンターのこんなヒミツ」（７月）

＊X（旧Twitter）企画

－「パレスチナ・イスラエル問題を考える～今ガザで起こっている，歴史的・構造的な問題を知るために～」（12月）

－「2024年学び始め～正月ってどんなもの？～」（１月）

－「福沢諭吉が訳した言葉たち」（１月）

3．マルチメディアサービス関連

⑴　サービス関連

・メディアセンター地下施設を含む教室などの360°室内画像を公開した（４月）。

・SONY社から137インチLEDディスプレイを借用し，１階オープンエリアに設置した（11月～１月）。

・簡易モーションキャプチャーのmocopi（１個）貸出を開始した（４月）。

・配信機器の故障のため，海外衛星放送サービスを終了した（12月）。

⑵　AV機材のリプレース

・3DプリンタUltimaker S7（４台）を追加導入した（４月）。

・６色刺繍ミシンを追加導入した（４月）。

・貸出用カメラをEOS R（22台）からEOS R6 MarkⅡ（15台）にリプレースした。

4．看護医療学図書室関連

⑴　施設関連

・看護医療学部校舎のごみ廃棄ルール変更（ごみステーション化）に伴い，図書室内のごみ箱を撤去した（11月）。

・CNSプリンタの小型化により，利用者スペースに余裕ができたため，大テーブル周辺に一人掛けソファを追加導入した（２月）。

・経年劣化のため，図書室内の各窓ブラインドを刷新した（３月）。

⑵　ライブラリーサービス関連

・授業期間平日の閉室時間を21時に変更し，2019年度以前の状態へ復旧した（７月）。

・「ぽれぽれ文庫」コレクションの入替作業を行った（９月）。

・ジェルクッションのレンタルサービスを開始した（１月）。

⑶　企画展示

・「大学生活スタートBOOK」（４月～５月）。

・「『今日の看護医療』ゲストスピーカー関連資

料」(６月～７月)。

薬学メディアセンター

１．全般

(1) 芝共立キャンパス入構方針の変更に伴う入館制限

芝共立キャンパスではコロナ禍を機に入構を制限してきたが，今後もセキュリティおよびセーフティ保持・強化の一環として，入館制限を継続することとなった。これを受けて，薬学メディアセンターにおいても薬学部・薬学研究科所属の学部生・大学院生，慶應義塾の教職員については入館自由とするが，それ以外の利用希望者は引き続き事前申込や紹介状持参を必須とすることとした。

(2) 港区立高輪図書館との連携企画（11月～2024年１月）

研究協力や講演会等を通じて同館とつながりがあった薬学部教員を通じて連携の申し入れがあり，展示を企画した。11月半ばから２か月間，高輪図書館において薬学部のあゆみとして共立薬科大学史や写真アルバム等を貸し出して展示したほか，薬学部生・スタッフの推し本（医薬品情報学講座協力），薬学関連資料を陳列した。

(3) 東京慈恵会医科大学学術情報センター 図書館との相互協力協定の終了（12月）

芝共立キャンパスの入構規制が強化されたことや少なくとも過去５年は利用の実績がなかったことをふまえて協定の終了を申し入れ，先方でも了承された。今後は他の大学と同様の手続きにより（事前照会・紹介状発行）利用可能となった。

２．施設・設備

(1) 事務室・カウンター改修工事（８月）

３階事務室の東側の壁を撤去してカウンターを設置し，カウンターがあった北側開口部にはパーティションを取り付けた。カウンターを入口側に向けて入館者チェックをしやすくしたほか，閲覧席側をパーティションで塞ぐことで事務室内の話声を漏れにくくした。

(2) ハイカウンター席の新設（２月）

西側の一角にハイカウンターとハイチェア３脚を設置した（本号表紙写真）。

(3) AV資料の書架撤去（１月）

パイプ・ダクトスペースの扉を塞いでいたAV資料の書架を撤去した。

(4) 閲覧席の椅子129脚をクリーニング（２月）

業者に依頼し，129脚の張地を洗浄・吸引によりクリーニングした。

３．利用者サービス

(1) 2023年度開館スケジュールと運用変更

・前年度の学生アンケートで，試験前の開館日増加を求める意見が多かったことを受けて，定期試験中だけでなく定期試験前にも日曜臨時開館を実施した。

・祝日授業日の閉館時刻を21：00から18：00に変更した。

・７，12，２月（閑散期）土曜の委託職員を２名から１名に変更（昼１時間はカウンター休止）した。

４．資料関連

(1) VHSテープの除籍

薬学メディアセンターで所蔵しているVHSテープの資料は希少性がなく，ここ数年間利用需要も極端に乏しいことから，図書の付録を除くほぼすべてのアイテムを除籍した。

(2) 年刊資料の過去分除籍について

毎年刊行されバックナンバーが増え続けるタイプの資料について，内容の陳腐化やカビ対策，スペースの有効活用という側面から旧版保存の必要性を検討することにした。各分野の専門教員に評価を依頼し，保存不要対象となった資料のリストを教授総会に提案して承認された。除籍作業は順次行うこととなった。

５．その他

(1) 会場提供と運営補助

2023年の日本薬学図書館協会研究集会が８月31日に芝共立キャンパス２号館４階大講堂で行われ，会場校として運営をサポートした。

資料

メディアセンター展示一覧＜2023年度＞

三田メディアセンター

展示期間	回数	タイトル	開催場所
3月17日～5月31日	—	EU諸国の貿易事情：各国のミニ情報に触れてみよう （日・EUフレンドシップウィーク企画イベント．パネル展示）	ラウンジ
4月12日～5月6日（前期） 5月8日～5月27日（後期）	358	春のこゑ ―蔵書で愛でる花と鳥リバイバル―	展示室
7月10日～8月5日（前期） 8月21日～9月22日（後期）	359	悠久の時を感じて ―高校教科書に載る歴史の足跡―	展示室
11月2日～11月18日	360	生誕300年記念　アダム・スミス ―慶應義塾図書館が誇る国富論コレクションの数々―	展示室
11月28日～12月23日	361	久保田万太郎 ―時代を惜しみ，時代に愛された文人―	展示室
2024年1月12日～2月8日	362	スペイン中世写本の楽しみ ―慶應義塾所蔵資料を中心に―	展示室

日吉メディアセンター

展示期間	タイトル
3月27日～5月31日	新入生歓迎展示　ようこそ日吉図書館へ 2023
5月8日～6月10日	留学フェア（国際センター主催）関連展示
6月2日～7月1日	電子書籍でも読める！ 光文社古典新訳文庫
6月5日～6月30日	庄内セミナー（教養研究センター主催）関連展示
6月19日～7月21日	学習相談mini展示　学習相談ってなに？ 相談員はどんな人たち？
7月3日～7月29日	電子書籍でも読める！ 早慶コンソーシアム・セレクション
7月10日～8月18日	図書館フレンズ　選書ツアー展示 2023
8月4日～8月31日	夏期スクーリング生歓迎展示　ようこそ日吉キャンパスへ2023
10月2日～12月2日	比べてみよう！ 映画と原作 ―名作から話題作まで―
10月11日～11月11日	今年のノーベル文学賞
10月20日～12月16日	日吉キャンパス公開講座（教養研究センター主催）推薦図書展示
11月1日～2024年1月18日	キャンパス文学さんぽ ―あの作品，あの作家の聖地を歩く―
12月5日～2024年1月31日	学習相談展示　相談員に聞いてみた！ 勉強，学生生活あれこれ
12月14日～12月23日	本の福袋 2023
2024年1月9日～3月2日	平安文学への誘い ―源氏物語を中心に―

理工学メディアセンター

展示期間	タイトル
4月3日～5月31日	理工学部教員の「私の一冊」
6月1日～6月30日	電子書籍でも読める 裳華房コレクション （早慶和書電子化推進コンソーシアム連動企画）
8月2日～9月29日	矢上での生活（オープンライブラリー連動企画）
10月2日～11月30日	メディアセンターで就活対策！
12月4日～2024年2月29日	選書ツアー2023：Book Hunting Tour

湘南藤沢メディアセンター

展示期間	タイトル
4月3日～5月12日	大学生活スタートブックス（看護医療学図書室）
6月9日～6月23日	わたしの推しの光文社古典新訳文庫（メディアセンターフレンズによる企画展示）
6月15日～7月31日	「今日の看護医療」ゲストスピーカー関連資料（看護医療学図書室）
11月25日～11月26日	「SFCで研究する」ってどんなだろう？　WRCと一緒に考えましょう！ （ライティング＆リサーチコンサルタントによる企画展示）
12月1日～12月21日	パレスチナ・イスラエル問題を考える ―今ガザで起こっている，歴史的・構造的な問題を知るために― （メディアセンターフレンズによる企画展示）

薬学メディアセンター

展示期間	タイトル
5月1日～6月21日	羽ばたけ！ 薬学部生！ ―キャリア形成×医療現場のこれから―
6月22日～7月31日	日本植物学の父　牧野富太郎を知る ―薬学メディアセンターの蔵書から―
9月14日～2024年1月31日	研究活動本格始動！
10月3日～12月20日	カタリン・カリコ氏　ノーベル賞受賞記念展示

資料

メディアセンター所蔵資料の展覧会貸出・掲載・放映＜2023年度＞

展覧会貸出

展覧会名・会場・会期	資料名（請求記号）	貸出先・主催など	所蔵館
「自然という書物―15～19世紀のナチュラルヒストリー＆アート」 （町田市立国際版画美術館・２月26日～４月16日）	コンラート・ゲスナー「動物誌」 （142X@103@3@1）など　全８点	町田市立国際版画美術館	三田メディアセンター
四百年遠忌記念特別展「大名茶人 織田有楽斎」 （サントリー美術館・４月22日～６月25日）	『有楽亭茶湯日記』（208@24@1）	サントリー美術館	三田メディアセンター
「さすが！北斎、やるな!！国芳―浮世絵のマテリアリティ」 （慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo・５月15日～７月15日）	葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」 （200X@4-20） 歌川国芳「源頼光公館土蜘作妖怪図」 （200X@3-76, 77, 78）など　全56点 （高橋誠一郎浮世絵コレクション） ※三枚続でセットの作品は１点でカウント	慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo	三田メディアセンター ※高橋誠一郎浮世絵コレクションの所蔵者は慶應義塾
2023年度春季企画展「曾禰中條建築事務所と慶應義塾Ⅰ　明治・大正編」 （慶應義塾史展示館・６月27日～９月２日）	和田英作「慶應義塾図書館　ステンドグラス原画」（福564） ※重要文化財附指定 など　全９点	慶應義塾史展示館	三田メディアセンター
「長浜城主・秀吉と歴代城主の変遷」 （長浜市長浜城歴史博物館・７月22日～９月18日）	大かうさまくんきのうち（132X@27@1）など　全４点 （重要文化財１点，港区指定文化財３点）	長浜市長浜城歴史博物館	三田メディアセンター
特別展示「浮世絵×カブキ 江戸の役者絵展」 （山口県立萩美術館・浦上記念館・７月29日～８月27日）	勝川春好「浅尾為十郎」（200X@71） 勝川春好「四世松本幸四郎」（200X@73） 全２点（高橋誠一郎浮世絵コレクション）	山口県立萩美術館・浦上記念館	三田メディアセンター ※高橋誠一郎浮世絵コレクションの所蔵者は慶應義塾
「テルマエ展：お風呂でつながる古代ローマと日本」 （山梨県立美術館・９月９日～11月５日）	山東京傳作，［歌川豊國］画「賢愚滌錢湯新話（上）」（225@61@3@1）　全１点	山梨県立美術館	三田メディアセンター
	洗湯手引草、熱海温泉図彙 （富士川文庫 F@セ@69, F@ア@9）		信濃町メディアセンター
鏡花生誕150年記念特別展 「再現！番町の家」 （泉鏡花記念館・10月１日～11月26日）	泉鏡花遺品　全72点	泉鏡花記念館	三田メディアセンター
「常盤山文庫×慶應義塾　臥遊―時空をかける禅のまなざし」 （慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo・10月２日～12月１日）	「増註唐賢絶句三體詩法３巻（存巻１）」 （151@65@1）など　全５点	慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo	三田メディアセンター
第39回特別展「足利尊氏」 （亀岡市文化資料館・11月３日～12月10日）	「足利尊氏軍勢催促状」（反町文書 130X@1@1）など　全６点（全て港区指定文化財）	亀岡市文化資料館	三田メディアセンター
「テルマエ展：お風呂でつながる古代ローマと日本」 （大分県立美術館・11月25日～2024年１月21日）	山東京傳作，［歌川豊國］画「賢愚滌錢湯新話（中）」（225@61@3@2）　全１点	大分県立美術館	三田メディアセンター
	洗湯手引草、熱海温泉図彙（富士川文庫 F@セ@69, F@ア@9）		信濃町メディアセンター
「中世寺院の書物―聖教とそのかたち」 （神奈川県立金沢文庫・12月１日～2024年１月21日）	「大般涅槃經 40巻 存巻10」（132X@11@1） 「表无表色章 不分巻」（110X@593@2@1･2） 全２点	神奈川県立金沢文庫	三田メディアセンター
「歴史の中の動物と人間」企画展示 （慶應大阪シティキャンパス・12月２日～2024年３月20日）	大鯨豊年貢（203@538@1）	慶應義塾大学文学部古文書室	三田メディアセンター
「シュルレアリスムと日本」 （京都府京都文化博物館・12月16日～2024年２月４日，板橋区立美術館・2024年３月２日～４月14日，三重県立美術館・2024年４月27日～６月30日）	山中散生コレクションより　２点 Le surréalisme et la peinture（K0@090@Y1@16） Dictionnaire abrégé du surréalisme（K0@090@Y1@38）	京都府京都文化博物館 板橋区立美術館・東京新聞 三重県立美術館・中日新聞社	日吉メディアセンター

展覧会名・会場・会期	資料名（請求記号）	貸出先・主催など	所蔵館
「サムライ、浮世絵師になる！鳥文斎栄之」（千葉市美術館・2024年１月６日～３月３日）	鳥文斎栄之「角玉屋うち小むらさき」（200X@151）など　全５点（高橋誠一郎浮世絵コレクション）※三枚続でセットの作品は１点でカウント	千葉市美術館	三田メディアセンター ※高橋誠一郎浮世絵コレクションの所蔵者は慶應義塾
新春展2024「龍の翔る空き地」（慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo・2024年１月９日～２月９日）	「紋章学の継承・紋章学」（120X@755@1）など　全16点	慶應義塾ミュージアム・コモンズ：KeMCo	三田メディアセンター
	Dragon ball 1 Das Geheimnis der Drachenkugeln（KG0@726@To2@1-1）		日吉メディアセンター
	医術家伝集（富士川文庫 F@イ@62）		信濃町メディアセンター
「源氏物語と江戸の教養」（昭和女子大学光葉博物館・2024年１月９日～２月２日）	「末摘花」伝京極良経（132X@191@1）「源氏物語　蒔絵手箱」（132X@158@54）全２点	昭和女子大学光葉博物館	三田メディアセンター
「スペイン中世写本の楽しみ 慶應義塾所蔵資料を中心に」（三田メディアセンター１階展示室・2024年１月12日～２月８日）	Apocalipsis（２冊）（KV0@022@Be1@2-1, 2-2）[Beato de Liébana : códice de San Andrés de Arroyo]（KV0@022@Be1@1）Libro de horas de Isabel la Católica : cuyo original se encuentra en la Biblioteca del Palacio Real de Madrid（KY@196@Li1@1）Poema de mío Cid : edición facsímil del manuscrito de Per Abbat, 1207（KY@961@Ci1@1）	三田メディアセンター JSPS科研費22K00955 中世イベリア世界の多文化共生再考	日吉メディアセンター
令和５年度企画展「武蔵武士の食と信仰―食べて 祈って 戦って―」（埼玉県立嵐山史跡の博物館・2024年１月13日～３月３日）	「世俗立要集　零巻（存巻154）」（魚菜文庫 242X@15）　全１点	埼玉県立嵐山史跡の博物館	三田メディアセンター
令和５年度企画展「未来に伝えよう！みなと遺産　新指定文化財展」（港区郷土歴史館・2024年１月13日～３月10日）	「伊達稙宗書状〔軍事行動指示〕」（中津川家文書 133X@119@1(1)～1(11)）など　全14点（全て港区指定文化財）	港区郷土歴史館	三田メディアセンター
「古文書にみる病と薬」（慶應義塾史展示館・2024年３月５日～３月28日）	「通信使記録（朝鮮国王より日本公儀江別幅并三使自分献上物）」（対馬宗家文書91・3・145 32(28)）など　全16点	文学部古文書室	三田メディアセンター
	麻疹戯言、麻疹必用（富士川文庫 F@マ@4, F@マ@6）		信濃町メディアセンター
「開発！＜KAIHOTSU＞―中津の古代から中世―」（中津市歴史博物館・2024年３月16日～５月６日）	「山城国上野庄差図(案)」（香果遺珍 130X@160@949）など　全３点	中津市歴史博物館	三田メディアセンター

出版物掲載

所蔵館	件　数
三田メディアセンター	149
信濃町メディアセンター	7

放　映

所蔵館	件　数
三田メディアセンター	24

資料

メディアセンターに関する書誌＜2023年度＞

2023.4～2024.3

雑誌論文・記事

・長野裕恵．“特集　本と出合う　大学図書館で本との出会いを提供する―日吉メディアセンターでの取り組み”．三田評論．2023. 8・9，no. 1280, p. 50-51.
三田評論ONLINE．2023. 8. 8.
https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/features/2023/08-10.html,（参照　2023-12-08）.

・座談会：今，新しい「本との出合い」の場をいかにつくるか（特集：本と出会う）．三田評論．2023. 8・9，no. 1280，p. 10-25.
三田評論ONLINE．2023. 8. 8.
https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/features/2023/08-1_4.html,（参照　2023-12-08）.

・関根謙（『三田文學』編集長，慶應義塾大学名誉教授）．“久保田万太郎から受け継ぐものは ―「久保田万太郎記念資金」の終了と記念企画（KEIO Report）”．三田評論．2024. 1，no. 1284，p. 122-123.
三田評論ONLINE．2024. 1. 23.
https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/other/202401-3.html,（参照　2023-12-08）.

Web

・“課題の不安はメディアセンターで解決　日吉「スタディサポート」で学業に自信を”．慶應塾生新聞．2023. 5. 1.
https://www.jukushin.com/archives/56095,（参照　2024-6-7）.

・“じゅっぽん　三田メディアセンターはなぜ日曜開館してない？”．慶應塾生新聞．2023. 7. 6,
https://www.jukushin.com/archives/57465,（参照　2024-6-7）.

・“600号PROJECT　コロナ禍と慶應　三田メディアセンター　コロナ禍が呼んだ学びの転換期”．慶應塾生新聞．2023. 7. 29,
https://www.jukushin.com/archives/57776,（参照　2024-6-7）.

・“【就活特集】就職活動するならデータベースを見よ 塾生が利用できるデータベース”．慶應塾生新聞．2023. 6. 17
https://www.jukushin.com/archives/57210,（参照　2024-7-1）.

・“慶應義塾大学メディアセンター，『慶應義塾図書館史Ⅱ』を刊行”，カレントアウェアネス・ポータル．2023. 12. 28.
https://current.ndl.go.jp/car/208218,（参照　2024-06-10）.

・“國臺圖與慶應大學簽署協議 展開國際交流”．國立教育廣播電臺（国立教育放送局）．2024. 3. 8.
https://www.ner.gov.tw/news/65ead4c71381040022a0510a,（参照　2024-6-12）.

・“日本慶應大學與國台圖簽署學術交流協議書 深化國際夥伴關係”．自由時報．2024. 3. 9.
https://news.ltn.com.tw/news/life/breakingnews/4602227,（参照　2024-6-12）.

・“日本慶應義塾大學與國立臺灣圖書館簽署學術交流協議書 深化國際夥伴關係”．国立台湾図書館 新聞稿．2024. 3. 11.
https://www.ntl.edu.tw/wSite/public/Attachment/431116534271.pdf,（参照　2024-9-6）.

・“慶應義塾大学メディアセンター，国立台湾図書館と学術交流協定を締結”カレントアウェアネス・ポータル．2024. 3. 28.
https://current.ndl.go.jp/car/212439,（参照　2024-6-12）.

・宮代康丈．“知る，理解する，思い描いて行動する”．慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス　おかしら日記．2023. 12. 26.
https://www.sfc.keio.ac.jp/magazine/018771.html,（参照　2024-7-1）

・“UltiMaker導入で学びの空間をより創造的に”．BRULÉ公式Webサイト．2023. 6. 14
https://www.brule.co.jp/learn/casestudy/keio-university-use-case.html,（参照　2024-7-1）

慶應義塾公式Webページ

・“第35回慶應義塾図書館貴重書展示会　へびをかぶったお姫さま ― 奈良絵本・絵巻の中の異類・異形 ―”．プレスリリース．2023. 9. 7.
https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2023/9/7/28-151527/,（参照　2023-10-04）.

その他

・“【AV機材が無料で借りられる！】カメラを借りたい方必見！！”．SFC ON AIR．2023. 6. 1 https://www.youtube.com/shorts/dDh8apJ16fE,（参照　2024-7-1）

・SFC探検隊！ メディセンで一番高い本を探せ！．SFC-CLIP．2024. 2. 8 https://sfcclip.net/2024/02/61951/,（参照　2024-7-1）

スタッフによる論文発表・研究発表＜2023年度＞

2023.4～2024.3

書　籍

SFC

保坂睦．“はじめての電子ジャーナル管理　改訂版”．（JLA図書館実践シリーズ；35）．日本図書館協会．2023. 6，p. 250

論文発表

三　田

竹内美樹．“挿絵本―本に輝きをあたえるもの”．三色旗．2023. 4，no. 847，p. 38-40.

信濃町

本井英理子．“第７回JMLAコア研修 コア5 PubMed/医中誌Web検索初級参加報告”．医学図書館．2023. 12，vol. 70，no. 4，p. 211-212.

岡田将彦．“会員館紹介：慶應義塾大学　信濃町メディアセンター”．医学図書館．2024. 3，vol. 71，no. 1，p. 1-2.

薬　学

谷藤優美子．“薬学メディアセンターの学生アンケート実施について”．塾監局紀要．2024. 2，no. 38，p. 65-67.

研究発表

本　部

川本真梨子．“2023年度「大学図書館職員短期研修」．大学における目録業務とその周辺”．2023. 10. 19．於 東京大学総合図書館

原直実．“図書館総合展．OCLC WorldCat®でつくる図書館の未来～目録データの国際標準がつなぐ日本と世界～”．2023. 10. 25．於 パシフィコ横浜アネックスホール

三　田

森嶋桃子．“大学図書館のSNS活用”．RA協議会ネットワーキングセミナー「SNSを利用した情報発信」．2023. 8. 1．於 オンライン

倉持隆．“鏡花遺品所蔵館としての慶應義塾図書館”．鏡花生誕150年記念シンポジウム「再現！番町の家」．2023. 11. 4．於 金沢市アートホール（石川県金沢市）

鈴木修二，佐藤康之．“『図書館等公衆送信サービス』に望むこと”．2023年度大学図書館シンポジウム．2024. 1. 22．於 オンライン

信濃町

佐山のの．遠藤泉．“医学図書館による医療活動支援：慶應義塾大学信濃町メディアセンターを例として”．第７回JMLA学術集会．2023. 12. 13．於 オンライン

資料

年次統計資料＜2023年度＞

１－１．図書費＜2023年度実績及び2024年度予算＞

＜単位：円＞

内訳 / 各メディアセンター	2023年度実績			2024年度予算		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
メディアセンター本部		**583,423,782**	**583,423,782**		**630,809,000**	**630,809,000**
メディアセンター本部		560,114,721	560,114,721		597,366,000	597,366,000
通信教育部		23,309,061	23,309,061		33,443,000	33,443,000
三田メディアセンター	**212,209,662**	**308,952,309**	**521,161,971**	**250,815,000**	**303,440,000**	**554,255,000**
図　書　館	72,983,040	200,515,412	273,498,452	90,800,000	198,300,000	289,100,000
学　　部	139,226,622	108,436,897	247,663,519	160,015,000	105,140,000	265,155,000
日吉メディアセンター	**63,713,107**	**96,903,181**	**160,616,288**	**80,071,000**	**89,787,000**	**169,858,000**
図　書　館	24,604,726	19,197,232	43,801,958	25,200,000	20,000,000	45,200,000
研　究　室	28,473,877	53,953,894	82,427,771	43,520,000	45,968,000	89,488,000
協生館図書室	10,634,504	23,752,055	34,386,559	11,351,000	23,819,000	35,170,000
信濃町メディアセンター	**14,624,661**	**116,647,688**	**131,272,349**	**15,000,000**	**114,800,000**	**129,800,000**
理工学メディアセンター	**9,718,597**	**116,322,276**	**126,040,873**	**14,600,000**	**115,400,000**	**130,000,000**
湘南藤沢メディアセンター	**37,432,467**	**124,674,092**	**162,106,559**	**42,140,000**	**121,040,000**	**163,180,000**
図　書　館	31,006,227	114,672,539	145,678,766	35,340,000	111,040,000	146,380,000
看護医療学図書室	6,426,240	10,001,553	16,427,793	6,800,000	10,000,000	16,800,000
薬学メディアセンター	**3,895,142**	**25,684,270**	**29,579,412**	**4,440,000**	**27,310,000**	**31,750,000**
合　　計	**341,593,636**	**1,372,607,598**	**1,714,201,234**	**407,066,000**	**1,402,586,000**	**1,809,652,000**

１－２．媒体別図書費＜2023年度実績＞

＜単位：円＞

各メディアセンター	内訳	和（国内）	洋（国外）	合　計
メディアセンター本部	単行書	17,820	5,207	23,027
	雑誌	46,782	0	46,782
	データベース	3,036,000	0	3,036,000
	電子ジャーナル	0	560,044,912	560,044,912
	電子ブック	16,090,104	4,182,957	20,273,061
三田メディアセンター	単行書	42,253,861	82,836,485	125,090,346
	雑誌	22,339,126	76,136,120	98,475,246
	データベース	36,577,950	52,537,448	89,115,398
	電子ジャーナル	1,981,400	159,431,153	161,412,553
	電子ブック	0	44,908,404	44,908,404
日吉メディアセンター	単行書	27,226,071	17,084,838	44,310,909
	雑誌	12,815,549	14,259,596	27,075,145
	データベース	9,945,236	23,959,006	33,904,242
	電子ジャーナル	660,000	33,239,875	33,899,875
	電子ブック	396,000	18,778,930	19,174,930
信濃町メディアセンター	単行書	6,714,661	528,509	7,243,170
	雑誌	8,056,784	679,143	8,735,927
	データベース	1,769,900	18,766,457	20,536,357
	電子ジャーナル	4,792,740	85,929,419	90,722,159
	電子ブック	0	4,029,736	4,029,736
理工学メディアセンター	単行書	5,512,149	291,279	5,803,428
	雑誌	3,899,023	676,082	4,575,105
	データベース	110,000	17,664,395	17,774,395
	電子ジャーナル	135,300	94,092,645	94,227,945
	電子ブック	0	3,086,575	3,086,575
湘南藤沢メディアセンター	単行書	21,774,359	2,741,687	24,516,046
	雑誌	12,601,610	6,316,895	18,918,505
	データベース	9,025,165	33,829,436	42,854,601
	電子ジャーナル	5,620,660	56,278,005	61,898,665
	電子ブック	0	11,738,312	11,738,312
薬学メディアセンター	単行書	2,390,300	188,913	2,579,213
	雑誌	1,710,404	73,624	1,784,028
	データベース	759,000	9,184,323	9,943,323
	電子ジャーナル	313,500	14,959,348	15,272,848
	電子ブック	0	0	0
合　　計	単行書	105,889,221	103,676,918	209,566,139
	雑誌	61,469,278	98,141,460	159,610,738
	データベース	61,223,251	155,941,065	217,164,316
	電子ジャーナル	13,503,600	1,003,975,357	1,017,478,957
	電子ブック	16,486,104	86,724,914	103,211,018

＊リバースチャージ消費税を含む

資料

2－1．蔵書統計＜所蔵冊数累計＞

＜単位：冊＞

内訳 / 各メディアセンター	単行書			製本雑誌			合　計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	1,125,749	1,169,391	2,295,140	280,995	320,771	601,766	2,896,906
日吉メディアセンター	522,660	258,506	781,166	74,539	77,453	151,992	933,158
信濃町メディアセンター	92,563	51,530	144,093	102,648	186,601	289,249	433,342
理工学メディアセンター	117,011	40,942	157,953	56,054	149,867	205,921	363,874
湘南藤沢メディアセンター	280,301	75,260	355,561	50,806	17,724	68,530	424,091
薬学メディアセンター	37,920	4,542	42,462	5,463	5,902	11,365	53,827
合　　計	2,176,204	1,600,171	3,776,375	570,505	758,318	1,328,823	5,105,198

2－2．蔵書統計＜逐次刊行物：タイトル数＞

内訳 / 各メディアセンター	カレント[注1]			ノンカレント[注2]			合　計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	2,372	890	3,262	21,427	12,006	33,433	36,695
日吉メディアセンター	818	233	1,051	2,568	3,302	5,870	6,921
信濃町メディアセンター	714	23	737	2,935	4,650	7,585	8,322
理工学メディアセンター	275	30	305	2,729	6,650	9,379	9,684
湘南藤沢メディアセンター	624	84	708	1,202	702	1,904	2,612
薬学メディアセンター	81	3	84	174	140	314	398
合　　計	4,884	1,263	6,147	31,035	27,450	58,485	64,632

注１）　購読中の雑誌
注２）　購読を中止または刊行が停止した雑誌

2－3．蔵書統計＜電子媒体資料＞

データベース種類数

内訳 / 各メディアセンター	国　内	国　外	小　計	全塾共通を加えた種類数
全塾共通	65	245	310	
三田メディアセンター	1	7	8	318
日吉メディアセンター	6	2	8	318
信濃町メディアセンター	4	2	6	316
理工学メディアセンター	0	2	2	312
湘南藤沢メディアセンター	5	1	6	316
薬学メディアセンター	1	3	4	314
合　　計	82	262	344	

電子ジャーナルタイトル数

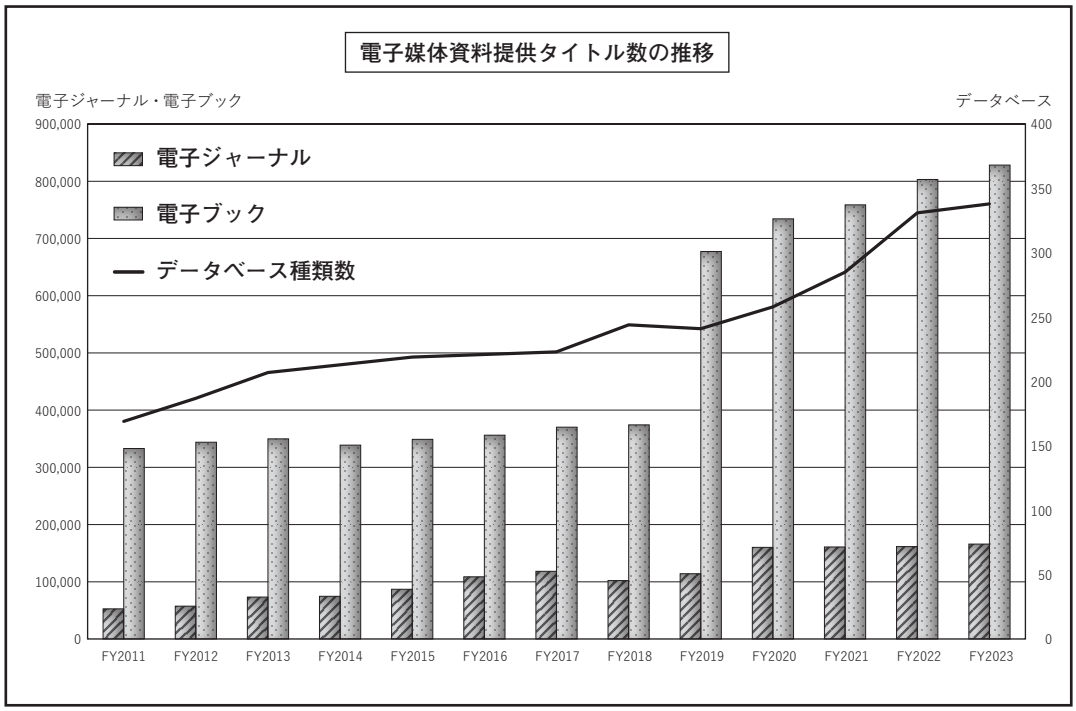
内訳 / 各メディアセンター	国　内	国　外	小　計	全塾共通を加えたタイトル数
全塾共通	19,847	189,511	209,358	
三田メディアセンター	12	998	1,010	210,368
日吉メディアセンター	7	125	132	209,490
信濃町メディアセンター	13	1,436	1,449	210,807
理工学メディアセンター	25	157	182	209,540
湘南藤沢メディアセンター	8	129	137	209,495
薬学メディアセンター	2	32	34	209,392
合　　計	19,914	192,388	212,302	

全地区純タイトル数	165,934

＊地区間および同一タイトルの重複を除いた数

電子ブックタイトル数

内訳 / 各メディアセンター	国　内	国　外	小　計	全塾共通を加えたタイトル数
全塾共通	17,905	806,752	824,657	
三田メディアセンター	0	1	1	824,658
日吉メディアセンター	0	2,461	2,461	827,118
信濃町メディアセンター	0	1,261	1,261	825,918
理工学メディアセンター	0	2,462	2,462	827,119
湘南藤沢メディアセンター	0	0	0	824,657
薬学メディアセンター	0	0	0	824,657
合　　計	17,905	812,937	830,842	



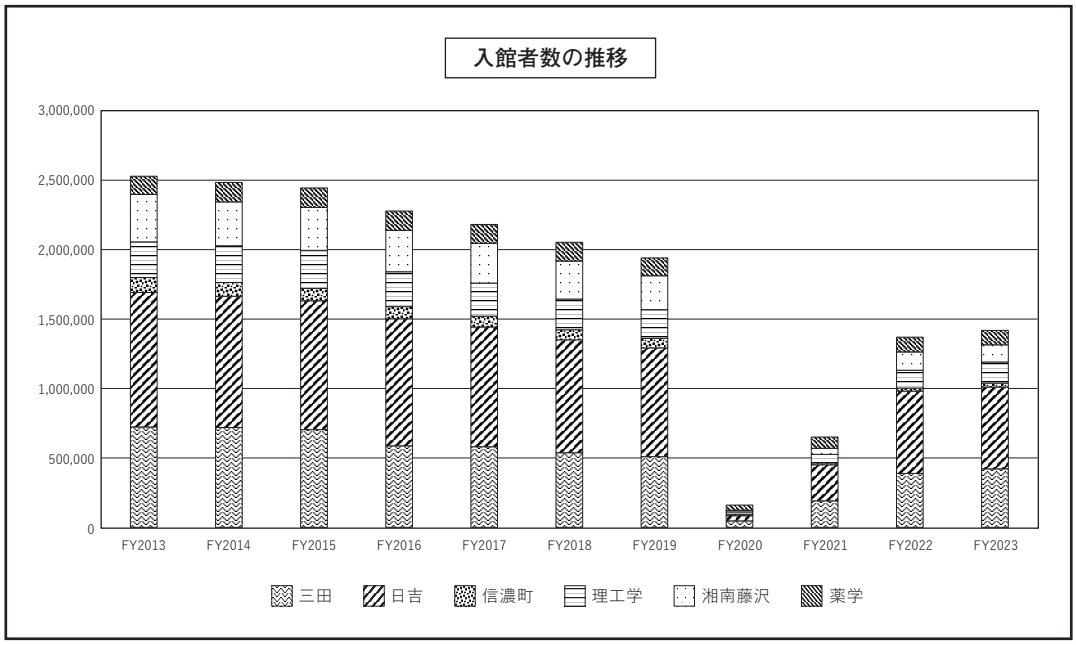
資料

２－４．蔵書統計＜非図書資料＞

各メディアセンター	タイトル数	個　数
三田メディアセンター	16,987	143,123
日吉メディアセンター	12,630	42,970
信濃町メディアセンター	716	4,828
理工学メディアセンター	617	4,191
湘南藤沢メディアセンター	6,641	17,118
薬学メディアセンター	360	1,029
合　　計	37,951	213,259

３－１．入館者数

各メディアセンター	人　数
三田メディアセンター	421,761
日吉メディアセンター	588,910
信濃町メディアセンター	28,661
理工学メディアセンター	151,444
湘南藤沢メディアセンター	124,002
薬学メディアセンター	103,630
合　　計	1,418,408



3－2．利用統計＜貸出及び貴重書閲覧冊数＞

内訳 / 各メディアセンター	館外貸出					館内閲覧
	教職員	学生	その他	塾外	計	貴重書
三田メディアセンター	21,466	84,380	0	2,350	108,196	1,395
日吉メディアセンター	12,709	69,762	92	1,393	83,956	
信濃町メディアセンター	6,315	2,193	0	977	9,485	
理工学メディアセンター	1,850	21,331	12	48	23,241	
湘南藤沢メディアセンター	5,873	37,862	451	2,087	46,273	
薬学メディアセンター	1,128	3,130	0	34	4,292	
合計	49,341	218,658	555	6,889	275,443	1,395

3－3．利用統計＜学外との相互貸借（現物・複写）＞

内訳 / 各メディアセンター		依頼を受けた（貸）			依頼した（借）		
		国内	国外	計	国内	国外	計
三田メディアセンター	現物（冊）	553	84	637	1,109	34	1,143
	複写（件）	904	681	1,585	1,835	747	2,582
日吉メディアセンター	現物（冊）	131	0	131	415	12	427
	複写（件）	132	0	132	738	377	1,115
信濃町メディアセンター	現物（冊）	15	0	15	21	1	22
	複写（件）	3,476	1	3,477	254	549	803
理工学メディアセンター	現物（冊）	8	0	8	11	0	11
	複写（件）	179	0	179	51	163	214
湘南藤沢メディアセンター	現物（冊）	66	0	66	90	1	91
	複写（件）	165	0	165	395	224	619
薬学メディアセンター	現物（冊）	1	0	1	0	0	0
	複写（件）	55	0	55	26	73	99
合計	現物（冊）	774	84	858	1,646	48	1,694
	複写（件）	4,911	682	5,593	3,299	2,133	5,432

参考データ：早稲田大学との相互貸借（上記の内数）

依頼を受けた（貸）

内訳 / 各メディアセンター	現物（冊）	複写（件）
三田メディアセンター	424	220
日吉メディアセンター	100	30
信濃町メディアセンター	15	137
理工学メディアセンター	8	27
湘南藤沢メディアセンター	36	41
薬学メディアセンター	1	2
合計	584	457

依頼した（借）

内訳 / 各メディアセンター	現物（冊）	複写（件）
三田メディアセンター	443	730
日吉メディアセンター	97	205
信濃町メディアセンター	8	15
理工学メディアセンター	4	7
湘南藤沢メディアセンター	27	81
薬学メディアセンター	0	0
合計	579	1,038

3－4．利用統計＜レファレンス・サービス＞

利用者別件数

内訳 / 各メディアセンター	学内者		学外者	合計
	教職員	学生		
三田メディアセンター	434	1,760	373	2,567
日吉メディアセンター	347	2,681	178	3,206
信濃町メディアセンター	367	164	402	933
理工学メディアセンター	69	330	67	466
湘南藤沢メディアセンター	107	938	94	1,139
薬学メディアセンター	46	192	9	247
合計	1,370	6,065	1,123	8,558

業務内容別件数

内訳 / 各メディアセンター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田メディアセンター	1,039	98	1,384	46	2,567
日吉メディアセンター	524	253	2,341	88	3,206
信濃町メディアセンター	115	369	421	28	933
理工学メディアセンター	73	23	336	34	466
湘南藤沢メディアセンター	203	92	768	76	1,139
薬学メディアセンター	20	3	209	15	247
合計	1,974	838	5,459	287	8,558

3－5．説明会・授業等＜レファレンス・サービス＞

内訳 / 各メディアセンター	回数	参加者数
三田メディアセンター	139	2,660
日吉メディアセンター	53	4,677
信濃町メディアセンター	88	932
理工学メディアセンター	51	813
湘南藤沢メディアセンター	67	2,233
薬学メディアセンター	4	485
合計	402	11,800

内容別回数

内訳 ＼ 各メディアセンター	情報リテラシー関連										その他の説明会・授業等		合計	
	ガイダンス		外部講師による講習会		図書館職員による講習会		学生スタッフによる講習会		授業（図書館職員の講師派遣）					
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
三田メディアセンター	2	226	1	28	92	1,925	0	0	10	87	34	394	139	2,660
日吉メディアセンター	3	284	0	0	50	4,393	0	0	0	0	0	0	53	4,677
信濃町メディアセンター	3	343	3	37	65	294	0	0	4	223	13	35	88	932
理工学メディアセンター	5	172	9	418	35	205	0	0	2	18	0	0	51	813
湘南藤沢メディアセンター	11	995	6	140	32	554	0	0	18	544	0	0	67	2,233
薬学メディアセンター	4	485	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	485
合　計	28	2,505	19	623	274	7,371	0	0	34	872	47	429	402	11,800

＊授業の人数はのべ参加者数または履修者数

4－1．開館総日数

各メディアセンター	日　数
三田メディアセンター	282
日吉メディアセンター	284
信濃町メディアセンター	335
理工学メディアセンター	290
湘南藤沢メディアセンター	284
薬学メディアセンター	282

4－2．閲覧座席数

各メディアセンター	席　数
三田メディアセンター	1,010
日吉メディアセンター	1,420
信濃町メディアセンター	220
理工学メディアセンター	451
湘南藤沢メディアセンター	955
薬学メディアセンター	136
合　計	4,192

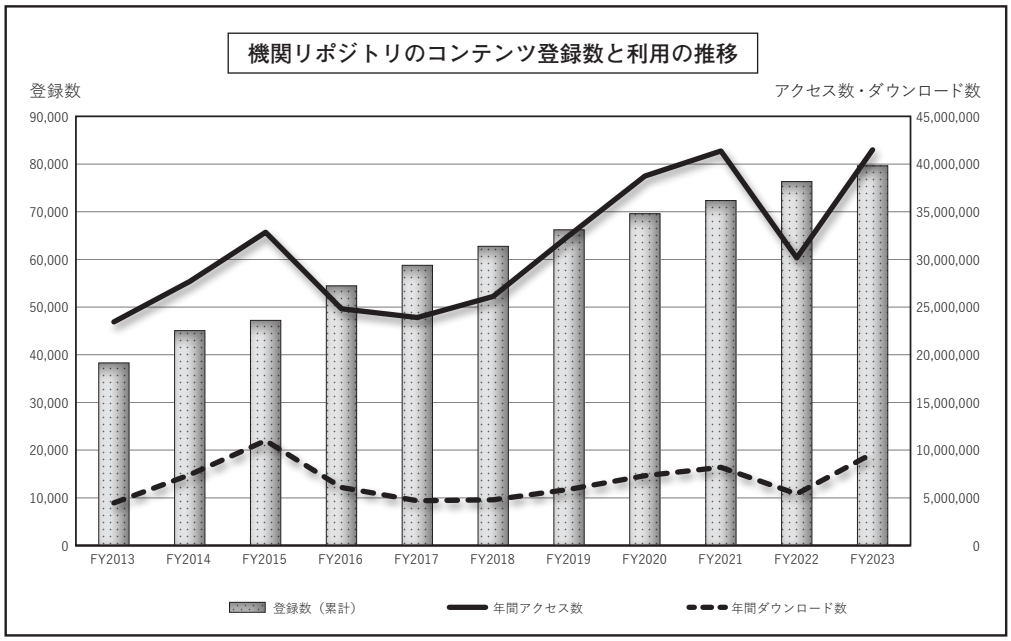
5－1．情報発信＜機関リポジトリ＞

コンテンツ登録数（累計）	79,633

＊科学研究費研究成果報告書を含む

年間利用状況

アクセス数	41,492,059
ダウンロード数	9,647,468



編 集 後 記

『MediaNet』31号をお届けする。前号から発行をWeb版（PDF）に切り替えたことにより，記事の読まれ方に変化が生じているようである。何より通勤時間を活用してパラパラと全体を通すような読み方ができなくなったという声を多く聞いた。とはいえ，もはや冊子には戻れないが，PDFでも多くの記事に目を通していただけるように，本号からは構成をシンプルにするなどの工夫をしてみた。見直しは道半ばであるが，読者の声を聴きながら，引き続き手に取っていただけるような雑誌を目指していきたい。

今号の特集は「つながる，広がる，コラボレーション」とし，メディアセンターと外部機関との連携という観点から記事を揃えた。メディアセンターの業務は学内所属者へのサービス提供だけではなく，さまざまな面があることを知っていただけるのではないかと思っている。特集以外では，信濃町メディアセンターにおける館内リニューアルプロジェクト，早慶電子学術書プロジェクトについて報告いただいた。いずれも問題認識から，現状の改善を目指した取り組みである。どちらもまだ現在進行形のプロジェクトであるが，メディアセンターが行っているサービスについて，理解を深める一助になるのではないかと期待している。メディアセンター全体研修の20年，英国図書館研修報告は，メディアセンターの人材育成の取り組みの報告である。今回の貴重書紹介は，印記に注目したものとなっている。断片的な情報を組み合わせて，その資料がどのようなものであるかを明らかにしていくもので，そのためにはたくさんの資料が長く保存されていることが大事であり，図書館のもう一つの役割が，こういうところでも役に立っているのだということを改めて教えられた。

（木下和彦）

誌名変遷

八角塔		：1号（昭42（1967）．7）－　6号（昭45（1970）.3）
KULIC	（ISSN 0913-0705）	：1号（昭45（1970）.10）－ 26号（1992.11）
MediaNet	（ISSN 0919-8474）	：No. 1（1993.11）－

MediaNet 第31号　2024年10月31日発行

編　集　MediaNet編集会議
発行者　関秀行
発　行　慶應義塾大学メディアセンター
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1644
表紙デザイン　有限会社　梅沢印刷所（小林克年）
表紙撮影　谷藤優美子
印　刷　有限会社　梅沢印刷所

MediaNet編集会議
編集長　木下和彦（本部）
編集員　川崎直子（三田），吉沢亜季子（日吉），遠藤泉（信濃町），西條智架（理工学），
稲垣侑華（湘南藤沢），池田三津代，加藤諒（本部）
E-mail：mc-medianet@adst.keio.ac.jp
URL　https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/

Keio University

1858

CALAMVS GLADIO FORTIOR

慶應義塾大学メディアセンター
https://www.lib.keio.ac.jp/

Web版MediaNet
https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/

三田メディアセンター
Mita Media Center
https://www.lib.keio.ac.jp/mita/

日吉メディアセンター
Hiyoshi Media Center
https://www.lib.keio.ac.jp/hiyoshi/

信濃町メディアセンター
Shinanomachi Media Center
https://www.lib.keio.ac.jp/med/

理工学メディアセンター
Media Center for Science and Technology
https://www.lib.keio.ac.jp/scitech/

湘南藤沢メディアセンター
Shonan Fujisawa Media Center
https://www.lib.keio.ac.jp/sfc/

薬学メディアセンター
Media Center for Pharmaceutical Sciences
https://www.lib.keio.ac.jp/pha/